

2000年3月第8号

人環フォーラム NO.8

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

インタビュー「映画学と国立大学の未来」

蓮實重彦 聞き手 加藤幹郎・高橋義人

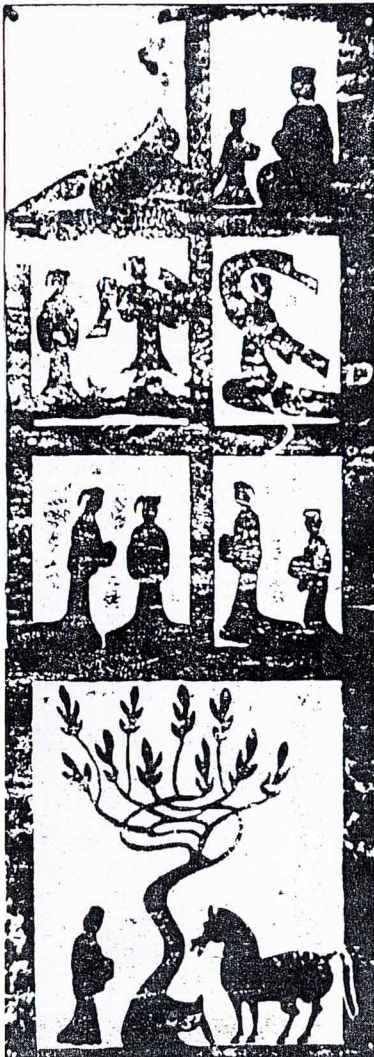
特集：現代思想を斬る

富田恭彦・篠原資明・道籙泰三・大澤真幸

『人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのようにのりこえ、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見いだしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。

「自然と人間との共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究科(略称「人環」)は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかわりを模索していくため、『人環フォーラム』を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえにたって、精神的な豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつづけていきたいと考えています。



●目次＝人環フォーラム8＝

巻頭言	Page 1
ベルリンの緑	山崎和夫
インタビュー	Page 2
「映画学と国立大学の未来」	蓮實重彦 聞き手 加藤幹郎・高橋義人
特集：現代思想を斬る	Page 12 — 29
現代アメリカ哲学への誘い クワイン／デイヴィッドソン／ローティ／富田恭彦	Page 12
現代思想としてのマザー・テレサ — ベルクソン再発見／篠原資明	Page 16
ヴァルター・ベンヤミン — 「原状回復」の思考／道籙泰三	Page 20
公共性の逆説／大澤真幸	Page 24
フィールド便り	Page 30 — 33
インドの職人／金谷美和	Page 30
敦煌莫高窟調査記／北田裕行	Page 32
リレー連載：環境を考える	Page 34 — 39
生物の多様性 — とくに関係の多様性について	川那部浩哉
フロンティア	Page 40 — 43
水圏における有機炭素の循環を探る／杉山裕子	Page 40
多次元図形とコンピュータグラフィック／石井源久	Page 41
議会制は果たして意義ある存在なのか？／山崎充彦	Page 42
適切な公共政策を実現するには？／佐野 亘	Page 43
サイエンティストの眼	Page 44 — 45
ゲルの破壊	宮本嘉久
社会を斬る	Page 46 — 51
社会科学は現代に何ができるか	佐伯啓思
フィールド便り	Page 52 — 55
橋をかける — 当麻寺の練供養をめぐる —／西村謙司	Page 52
成人T細胞白血病ウイルスとは何か — ロシア先住民族における疫学調査／山下満左裕	Page 54
文学の周辺	Page 56
豊饒なるニューヨーク	水野尚之
京博便り	Page 58
推理小説と芸員	泉 武夫
世界の街角	Page 60
ソウル瞥見	西垣安比古
書評	Page 62 — 66
磯江景孜『ハーマンの理性批判』／川中子義勝	Page 62
田邊敏明『地球温暖化と環境外交』／西井正弘	Page 63
篠原資明『エコ：記号の時空』／北村知之	Page 64
問宮陽介『市場社会の思想史』／大瀧雅之	Page 65
加藤 真『日本の渚』／西田隆義	Page 66
人環図書	Page 67
瓦版	Page 68
コラム	Page 15, 19, 29
有機物質・化合物の形・構造と性質・機能／山口良平	Page 15
グレイコードと実数／立木秀樹	Page 19
スローガンとジョークのかなたに／三原弟平	Page 29

ベルリンの緑

山崎和夫 — KAZUO YAMAZAKI 京都大学名誉教授



私は去る一〇月、八年ぶりにベルリンを訪ねる機会があった。バスの車窓から見た景色の中で特に私の気を引いたのは、現在の人口は東京よりずっと少ないとはいえ、今年再びドイツの首都に復帰した大都會ベルリンに緑が多いことだった。ベルリンの緑の多さは他のドイツの都市と比べても特に際立っている。タクシーの運転手に、このことを話題にしてみた。そうすると彼が「そうなんですよ。でもねお客さん、よく見てごらんさい。これらの木は樹齢およそ四、五〇年なのがわかりますか。このあたりには当然、樹齢何百年という唐櫨フイチテの巨木も生えていた森があったはずなのにね」と言った。そう言われてみると確かにそのような巨木は見当たらない。そこで当然「それはなぜだと思えますか」ということになった。私の乏しい歴史の知識ではまず、第二次大戦末期にベルリンではソ連の大軍と、最後の壮絶な市街戦が展開されたことが思い出された。しかしそれはベルリン中の森を焼き払うようなものではなく、ごく限られた市街の一部だけだったはずだ。その次に思いついたのは、戦争直後の食糧難の時代、日本中の住む場所以外を芋畑にしたのと同じことが、このベルリンでも行われたということだったが、運転手の説明は少し違っていた。それは一九四八年六月から一〇ヶ月余に及んだソ連による西ベルリンの封鎖のためだと言うのだ。ソ連は西側の陸の孤島西ベルリンを封鎖によって屈服させようとしたのに対して、連合国側はいわゆる「空の架橋」と呼ばれた輸送機による必需物資の空輸でこれに対抗した。そしてさらに二〇〇万の西ベルリン市民は、森の木を切って暖をとり、その森の跡地へ食料になるものを植え、寒さと飢えをしのごこの危機を脱したと言う。こうしてかつてのベルリン中の森は姿を消してしまったという。

日本の大都会ならこの危機が去ったあと、芋畑にバラックを無秩序に

建てたのではないかと思うが、ベルリンでは元の森に戻すように植林し、それが現在樹齢四〇余年の緑となってベルリンを覆っているのだ。そうだ。

このあたりに今日では環境先進国となっているドイツ人の国民性を見る思いがした。ドイツでは今や徹底したゴミの分別収集が実行され、アルプスの山上のケーブルカーの駅にでも、一目でわかる色分けされた五種類ほどのゴミ箱が用意されている。市民は面倒がらずに規則を守っている。街角には飲料の自販機はほとんどなく、パーク・アンド・ライド方式も進んでいる。つまり郊外の地下鉄等の駅に大きな無料の駐車場を作り、そこから地下鉄等で都心に向かわせ、車の市内への流入を減らす努力をしている。ベンツ社は未来の車のエネルギー源として無公害な水素エネルギーの使用を本気で開発しようとしていると聞いている。一方で三〇年以上前に一〇%で始まった付加価値税（消費税）は今では二〇%に近い。大学の授業料をすでに四〇年間も無料にしていることにも基本的な考え方の差異が感じられる。いずれにしろドイツでは、わが国の政治家等がすぐに手本にしたがる現存の唯一の超大国とはかなり違ったやり方を行っている。かの超大国では力こそ正義であり、国土の広さゆえに物資の不足に苦しんだこともなく、消費こそ最大の美德であり、大きいこと、多いこと、速いことこそが価値あるものとして、追求されてきた。しかし二一世紀、人口は増加しつづけ、地球の大きさが有限であることが、さらに重い意味をもつようになりつつある。したがって環境問題がより重要になってくる。それに対処するには価値観の転換が必要で、それには超大国からではなく、わが国と似た資源小国ドイツから学ぶべき点も多いのではなからうか、と改めて考えさせられている。

映画学と国立大学の未来

蓮實重彦

SHIGEHICO HASUMI



●聞き手

加藤幹郎

MIKIRO KATO

高橋義人

YOSHITO TAKAHASHI

国立大学の独立行政法人化の波が押し寄せるなか、大学はいかに社会の新しいニーズに応えるべきか、いかに日本の大学は世界に向けて独自の価値を維持発信すべきか、そもそも大学の教育と研究の環境はいかにあるべきか、そして日本映画の現状を踏まえた映画研究はいかにあるべきか、こうした問題について、今回は日本の大学改革をリードされてこられた東京大学総長の蓮實重彦先生にお話を伺いました。

●蓮實重彦（はすみ しげひこ）

一九三六年、東京都生まれ。東京大学総長。一九六五年、パリ大学大学院より博士号取得。著者に『監督 小津安二郎』（筑摩書房、一九八三年）。同書の仏訳はフランス映画批評家連盟文芸賞を受賞。九九年にはフランス政府「芸術文化勲章」を受賞。その他の著書に『映画の神話学』（泰流社、一九七九年）、『映像の詩学』（筑摩書房、一九七九年）、『シネマの記憶装置』（フィルムアート社、一九七九年）、『映画はいかにして死ぬか』（フィルムアート社、一九八五年）、『映画 誘惑のエクリチュール』（ちくま文庫、一九九〇年）、『ハリウッド映画史講義』（筑摩書房、一九九三年）、『魘の誘惑』（東京大学出版会、一九九九年）など多数。



ミシガン大学傍の映画館ステイト・シアター

●加藤幹郎（かとう みきろ）

一九五七年、長崎県生まれ。京都大学総合人間学部・同大学院人間・環境学研究科助教授。著書に『映画 視線のポリティクス』（筑摩書房、一九九六年）、『映画ジャンル論』（平凡社、一九九六年）など。

●高橋義人（たかはし よしと）

一九四五年、栃木県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。著書に『形態と象徴』（岩波書店、一九八八年）、『魔女とヨーロッパ』（岩波書店、一九九五年）など。



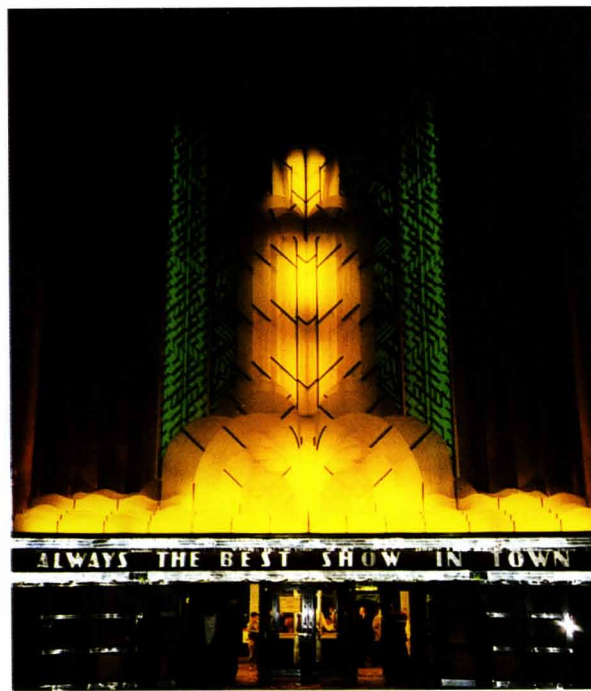
日本の大学に何が欠けているか

高橋 京大に人環（人間・環境学研究科）を作りますときに、文学部にはないものというところで、映画学というのがひとつの柱になると思ったんです。ところがなかなか学内の理解を得にくくて、私どもにとっては蓮實先生に、映画学とはどのような学問なのかというところからお話を伺わせていただけたらと思います。

蓮實 それほど本格的なお話ができるかどうかかわからないのですが、世界の大学を見て日本が遅れているところはいくつかあると思います。たとえばフロイト系の精神分析学が非常に遅れている。それから「音響と映像に関するメディア的思考」も非常に遅れている。映画など学問の対象ではないとおっしゃる方々には、国際的な視線が欠けてるわけで、映画学は世界の優れた大学なら、どこにも必ずあります。だから京大や東大にあって当然ですよ。ですから国際的な視線を少しでもお持ちならば、ほかの大学も必死に作るうとすると思います。この一〇年くらいで情報学とか色々そういうものが出てきましたけれども、日本の情報学というのは、どちらかというとコンピュータ・サイエンス中心であって、その周辺にあるべきメディア・スタディーズのようなものがほとんどない。ですから映画学は今後絶対注目されると思うのです。しかし、その頃まで映画それ自体がどれほど盛んであるかというのはまた別の問題にな



ロサンジェルス市内の映画館



オークランド市に保存されている1930年代の「ムーヴィー・パレス」パラマウント・シアター

つてきまして、日本の大学をとりあえず欧米大学並みにしなくてはいけないとしたら、映像学、映画学、それからやはり精神分析学がもう少し盛んにならなきゃいけないんじゃないかと思っています。

高橋 「音響と映像に関する思考」と言われますのは？

蓮實 音響、やはり音楽に関してですね、文学部的な音楽美学とは違う、たとえばポピュラー・ミュージックをめぐる研究です。二〇世紀の最も大きな文化的な潮流の、ひとつは映像であり、もうひとつはやはり音響であり、両方とも複製技術に従って盛んになってきたもので、これは大いにやらなきゃいけないことだと思っんですが、やはり音響の方が立ち遅れてるんじゃないですかね。

高橋 フランスの大学には音楽学とか演劇学、映画学とかはありますか？

蓮實 ええ、フランスは比較的早く映画が演劇から独立しました。音楽の方もいわゆる音楽美学とは違ったところでやっています。しかしいまだにやはり美学の人たちがフランスでも中心を占めているというところがあると思います。むしろ美学は美学で非常に重要だと思っんでも、そういう人たちには、たとえば『グラモフォン・フィルム・タイプライター』のフリードリヒ・キットラーの（1）ような、複製技術という概念がほとんど欠落している。ですから作

（1）フリードリヒ・キットラー Friedrich Kittler（一九四三—）ベルリン・フンボルト大学文化学研究所教授。ドイツ文学、メディア・スタディーズ。その驚くべき博識と、ラカンやフーコーといったフランス現代思想の独自の解釈とによって、近現代におけるメディア・システムの変遷を絢爛たる文体で記述。世界中でスキヤンダラスなまでの反響を巻き起こした。邦訳された著作に『グラモフォン・フィルム・タイプライター』（筑摩書房）のほか、『ドラキュラの遺言』（産業図書）がある。

（2）ジョージ・ルーカス George Lucas（一九四四—）南カリフォルニア大学で映画製作を学んだ後、監督デビュー。『スター・ウォーズ』（一九七七）が大ヒットとなり、以後は主にプロデューサーとしてハリウッドの大作映画を手がける。九九年、久々の監督作『スター・ウォーズ エピソード1』がまたもや大きな話題を呼んだ。他の監督作品に『アメリカン・グラフィティ』（一九七三）など。

（3）デイヴィッド・ボードウェル David Bordwell（一九四七—）アメリカの代表的な映画学者として多くの研究者を世に送り出すとともに、どんな細部も見逃さない鋭敏な批評眼で旺盛な執筆活動を繰り返し広げている。第一回京都映画祭では国際シンポジウム「時代劇と世界映画」のバネリストとして来日。著書に『小津安二郎 映画の詩学』（邦訳、青土社、共著）『The Classical Hollywood Cinema: Film Style & Mode of Production to 1960』（Columbia University Press, 1985）など。蓮實氏が言及している「教科書」とは、K. Thompsonの共著である『Film Art: An Introduction, 4th ed.』（McGraw-Hill, 1993）のこと。

品を、優れた創造者の優れた所産というイメージで捉えすぎるんで、二〇世紀はそれだけではないと思うのです。唯一無二の作品ではなく、大量に消費される複製としての作品が社会で演じる役割が意味を持つ複製技術の時代ということをもう少し本気で考えないといけないんじゃないかなと思います。

大学で何をどう教育すべきか

加藤 蓮實先生はたくさんのご著書を通じてわれわれの世代に多大な影響をあたえてこられた方です。われわれにとって先生のご著書それじたいがある種の強力な映画的教育装置であつてきたわけですが、先生は映画批評家であると同時に、一方で大学の教育者という立場に立っておられます。しかし蓮實先生は、いわゆる映画の教科書を編纂することはありませんでした。今後、大学での映画研究やメディア・スタディーズの勃興、あるいは国立大学の独立行政法人化にともなう大学のさらなる大衆化といったものに応じて、大学での映画学の教育と研究が「映画の教科書」編纂というかたちで進行してゆくとお考えでしょうか。

蓮實 映画学に関してはですね、私が物を書き始めた頃はアメリカにおいても何人か優れた研究者はいたけれども、それほど大きな発言権は求められていなかったと思います。ところが先日、南カリフォルニア大学の学長にお会いしたら、「うちの大学のボード・メンバー（理事）にはジョージ・ルーカス^②が入っている」と得意そうに言うんですね。独立行政法人になると、おそらくボード・メンバー的なものも色々必要になってくるんじゃないかということなんです。それが別問題として、一方で、そういう人が映画作家に向かうかというそのポテンシャルを維持しながら、もう一方で、いわゆる映画の教科書的なものを作らなくてはいけないという要請もたしかにある。私は日本の大学の映画研究者としては過渡的な存在ですから、日本でも映画学が整備され始めたこれからはちょうど加藤さんの世代が色々作らなくてはいけないと思う。しかし、わたし自身としては映画の教科書だけは作るまいと思ってきましたね。それは映画の教科書というのは、何の役に立つだろうかというのをまず考えたからです。二年前の第一回京都映画祭にきたウイスコンシン大のデイヴィッド・ボードウェル教授の教科書は非常によくできて



ニューヨーク市の映画館フィルム・フォーラム

いると思うし、他にも色々あるのですけれども、そういった教科書的なものを読んでも、映画作家は育たないという感じだけ非常に強くしたんです。さっき申し上げたように、過渡的な存在としての私は、映画研究者というか、映画批評家も育てたいし、同時に映画作家も出てほしいという願望が非常に強くあります。幸い、何人かの映画作家が、私の最初に教えていました立教大からも、それから東大からも育ち始めている。そうすると、これはボードウェルのいるウイスコンシン大学よりも強いわけですね。ウイスコンシンの方

(4) トム・ガニング Tom Gunning (一九四九) 初期映画に関する七八年のフライング・シンボジウムにおいて画期的な報告をおこない、その名を世界に知らしめた。以後も文化史的観点から初期映画研究の第一人者として活躍。前出のボードウェルとともにアメリカの映画学を代表する一方の雄である。第二回京都映画祭に招聘され、国際シンボジウム「明時代劇と一九三〇年代の世相」に出席した。著書に『D.W. Griffith and the Origins of American Narrative Film (University of Illinois Press, 1991)』、論文に『驚きの美学』邦訳、『新』映画理論集成①「フィルムアート社」所収など。

(5) 黒沢清 (一九五五) 自主映画製作で活躍後、八三年に『神田川淫乱戦争』で商業映画デビュー。近年は最影所全盛期を思わせるほどの量産体制に突入し、現代の日本映画界でもっとも先鋭的な活動を展開している。新作「カリスマ」がカンヌ映画祭監督週間に招待されるなど、国際的な評価もきわめて高い。立教大学在学中には蓮實氏の「映画表現論」を毎年聴講、成績は常にAだったという。他の監督作に『ドレミファ娘の血は騒ぐ』(一九八五)、『CURE』(一九九七)、『蜘蛛の瞳』(一九九八)など。

(6) 塩田明彦 (一九六一) 黒沢清と同じく立教大学在学中から自主映画を製作、八三年のハミリ作品『ファララ』で『ぴあフィルムフェスティバル』に入選した。脚本家、撮影監督として活躍後、劇場デビュー作『月光の囁き』で九九年ゆうばり国際映画祭・フアンタスティック映画祭審査員特別賞・批評家賞をダブル受賞、一躍注目を浴びる。第二作『どこまでもいこう』も高い評価を得ており、現在もつとも将来を期待される新人の一人。



ニューヨーク市内の名画座シアター80

が社会的なニーズは無視して、フィルム・スカラー（映画学者）を作っているわけです。でもボードウェル本人が実作を無視しているわけでは決していない。今回の京都映画祭に来ておられるシカゴ大学のトム・ガニング教授もそうですが、彼と話してみるとやはり彼も実作と近いんですね。友達に何人か映画作家がいるということなんですから。私は、できれば作家と研究者の両方を出したかった。自分の教えたなから黒沢清が出たなんてことを大々的に言いたくはないけれど、個人的には非常に嬉しいんですね、黒沢みたいな人が出てくると。今度の塩田（明彦）君もなかなかいいと思いますし、『リング』（一九九八）の中田（秀夫）とかですね。芸術映画という

ことで、当たらずともいいという人だけではなく、周防正行⁽⁸⁾のように、ハリウッドまで行ってしまいう連中が出て来ている。それを今後、教科書なり何なりを作ることによって、助長できるかどうかなんですね、問題は。ですから、教科書は絶対に必要だと思うけれども、映画作家を作り出すための方法が何だろうか。フィルム・スカラーは絶対できると思うんですね。事実、加藤さんも絶対、自分の弟子からすごいのが出るといって自信はあるでしょう。これ、あると思うんですよ。京大なり東大なりに映画学コースがあれば、世界的なフィルム・スカラーは必ず育てられる。ただ、それだとアメリカと同じなんですね。ですからアメリカのフィルム・スカラーの生産とは違ったかたちで、やはり映画作家を作りたい。それには、どういう教科書を作ったらいのかというのは私はわからないんです。ある意味では、今回の京都映画祭で来日したベルナル・エイゼンシッツ⁽⁹⁾のように、教科書と同時に、一方で各国映画史というものもどうしても書かなくては行けない。もらったばかりでまだ全部読んでいないんですが、彼のドイツ映画史は非常に面白いですね。どうして面白いのかというと、彼の場合も確かに理論家ではあるのですが、彼はゴダール⁽¹⁰⁾と付き合いがある。エイゼンシッツはゴダールが一番信頼している映画史家なのです。現場との付き合いがある人が、現場主義的ではない映画史をどのようにして書くのかという問題ですね。それもまた私のやりたいくて、まだやっていないことのひとつなんです。南カリフォルニア大学を除いて、アメリカのフィルム・スクールが、どの程度、映画の理論と実践を教育しているのかというのを、もう一度考え直してみなければならぬ。南カリフォルニア大学出身のルーカスで話は進むんですけども、それは一種のブランド主義でして、現実にはどういう人たちが映画に進んでいるのかというのを市場調査し直してみる必要がある。「映画を撮りたい」という意志をどこかで抑圧しないと、よいフィルム・スカラーにはなりません。はじめからフィルム・スカラーになりたいと思っている人の限界ってあるでしょう。これなら大学教師としてやっていけると思うような類の。だから大学において映画を作りたいという欲望を学生にどのように植えつけるかということだと思ふんですよ。潜在的な能力を持った人がどれくらいいて、どのようにその人達の顕在性を発揮させるかということです。その点、今

(7) 中田秀夫（一九六一—）助監督としてにつかつ撮影所で経験を積み、九二年、テレビ朝日「本当にあった怖い話」シリーズの「幽霊の棲む旅館」で監督デビュー。映画作家J・ローリーの研究家としても知られ、インタビュー「追放された魂の物語」（日本テレビ出版）を翻訳したほか、ドキュメンタリー映画「ジョセフ・ローリー」四つの名を持つ男（一九九六）も監督した。東大における蓮實氏の映画ゼミ卒業生。他に「女優霊」（一九九六）など。

(8) 周防正行（一九五六—）立教大学卒業後、高橋伴明らの助監督をつとめ、八四年にピンク映画「変態家族・兄貴の嫁さん」でデビュー。カルト的な人気を呼ぶ。「シコふんじやった。」（一九九二）で各映画賞を総ナメにしたほか、「Shall we dance?」（一九九六）が大ヒット、アメリカ全土二六八館でも劇場公開された。動員数は一九〇万人を記録した。現在、批評家と一般観客の両方からもつとも信頼されている作家である。他の監督作に「ファンシイダンス」（一九八九）など。

(9) ベルナル・エイゼンシッツ Bernard Eisenschitz（一九四四—）フランスの映画研究家。元「カイエ・デュ・シネマ」誌同人。映画の字幕製作に携わる傍ら、ソヴイェト映画、E・ルビッチ、F・ラングなどに関する論考を多数執筆している。一分の隙もない綿密なリサーチと、気品ある知的な文体の特徴。現在は成瀬巳喜男に関するエッセイと執筆者だという。ガニングとともに第二回京都映画祭国際シンポジウムにパネリストとして招かれた。邦訳された著作に「ニコラス・レイ」（キネマ旬報社）がある。

のところ日本はドイツより圧倒的に勝っています。今、話題の『ラン・ローラ・ラン』⁽¹¹⁾にしてもですね、ドイツでは大当たりというんですけれども、あれは一九六〇年代にすでに中島貞夫監督が涼しい顔で撮っていたような映画なんですよ（笑）。その点で今さらって感じがしないわけでもなくてですね。人材はいるんですよ、日本は。なぜこんなに人材がいるのかわからないけれども。だから、ちょっと細工をすれば、日本映画はすごく変わると思うんですね。事実、黒沢清の最近の映画は本当に面白い。ともかく、できるところで、できる方がいて、好きなことをやってしまつて、そうやってゆく以外ないと思うんですよ。人環や総人（総合人間学部）の場合は一応できてしまったわけですから、あとはそれを、国からの援助を期待せざるをえない部分はありますけれど、今のところは、それをどうするかは工夫のしどころだと思うんですよ。それから、もうひとつはどうしても学内的な地位というか、全学的な取り組みにならなくてはいいけないわけです。日本の大学で一番疲れるのは、何か新しいことをしようとする、それぞれの部局の概算要求でいかななくてはいいけない。それが学内でどれくらいになるかという部局単位の要求主義ですから、その大学の中で位置が低ければ、絶対文部省へは出ていかないうえです。ですから、あとは学内をどのように統一するかということ、それから何か必要だったら、今のところはまだ国家公務員ですから、文部省にいつて文部を落とす以外ないんじゃないですか。東大に表象文化論を作ったときも、「映画とか演劇とか何の役に立つんですか」という話はたくさんありましたけれど、最後にはもう迫力と脅しですよ（笑）。今だに文部省はだまされた、だまされたと言っているらしいですけど、だまされ勝ちなんです（笑）。でもそれは全学的な支援があったからできたようなものですね、映画なんか大学の学問ではないなんて言っているのは、国際的な視野のない人達だということをぼんぼん突きつけてゆくしかないんじゃないでしょうか。だって、映画が分からなくては絶対に二〇世紀は分からないわけですもの。

高橋 そういう意味では、先生の存在というのは大きかったですね、東大にとっても映画学にとっても。

蓮實 でも、そのために私は足に怪我を負ってしまったのです。概算要求書が通って「よし」ということになって、もうこれで終わり



ロサンゼルス市の映画館

かと思つてほつとしていましたら、大蔵省に出すためのちよつとした文書を明朝までに作ってくれというので、私は、もうこうなつたらテニスでうんと汗をかいて寝て、翌朝ワイプロに向かうしかないと思つたら、何とその日に肉離れを起こして倒れちゃいましたですね。概算要求のために以後テニスができないということになってしまった（笑）。

(10) ジャン・リュック・ゴダール Jean-Luc Godard (一九三〇—) 映画監督。スイスとフランスの二重国籍を有する。パリで過ごした青春時代はシネマテークに通いつめ、映画漬けの日々を送る。この頃F・トリュフ、オーラ、後の「ヌーヴェル・ヴァーグ」の仲間たちと知り合い、過激な批評活動を展開。五九年の長編第一作『勝手にしやがれ』で世界に衝撃を与えた。今なお一作ごとに映画史を揺るがせつづける孤高の存在。他の作品に『気狂いピエロ』(一九六五)、『新ドイツ零年』(一九九一)など。

(11) 『ラン・ローラ・ラン』 Lola Rennt 一九九八年、ドイツ。トム・ティクヴァ監督。フランカ・ポテンテ主演。

(12) 中島貞夫 (一九三四—) 映画監督。五九年、東映京都撮影所に配属。全盛期の勢いを次第に失っていく撮影所にあって、奇抜なアイデアで快作を連発した。六七年退社後はフリーで活躍。代表作に『くノ一忍法』(一九六四)、『893愚連隊』(一九六六)、『大奥(秘)物語』(一九六七)、『木枯らし紋次郎』(一九七二)など。現在は監督業に加え、大阪芸術大学教授、京都映画祭総合プロデューサーなどの要職にある。

(13) 森田富士郎 (一九二七—) 撮影監督。四七年、大映京都入社。六二年、『山男の歌』でデビューした。『大魔神』(一九六六)の撮影により三浦賞を受賞。大映倒産後はフリーとなり、映像京都設立に参加。他の作品に『陽暉楼』(一九八三)、日本アカデミー賞優秀撮影賞『利休』(一九九〇)、毎日映画コンクール賞など。

映画の肌理あるいは資本主義的暴挙

加藤 話は変わるんですが、もし二〇世紀と映画を結びつけるひとつの根拠がありうるとしたら、それは一枚のスクリーンに不特定多数の人間の視線を収束させるというシステムにあったのではないかという気がしております。しかもそれはあくまでもスクリーンから観客席への一方向的なメッセージの伝達です。それに対して、二〇世紀が終わろうとしている今、インターネットが開かれた今、何が起きているかというと、かつてごく一部の人間しか持ちえなかった



ミシガン大学映画学科用のスクリーニングもおこなわれるミシガン・シアター

特権的スクリーンを今や誰もが持てる時代になりました。不特定多数の人間が観客であると同時にスクリーン所有者であり、それゆえメッセージの発信者でもあるという、そういうかなり大がかりな構造変革が今世紀末に起こりました。このことと映画製作者が近年、最新のコンピュータ技術を導入しながら、ハリウッド黄金期に比べたら、ただもう粗雑な画面作りしかできないという現状についてはいかがでしょうか。

蓮實 たまたま昨日、京都映画祭のパーティでカメラマンの森田富士郎さんとお話する機会があったのですが、あの方がもう後継者がいないということを言っておられるわけです。あの方もそれこそ大映の素晴らしい美術と素晴らしい照明の中でピタッと決まる画を撮ってこられたカメラマンです。これからちょっと話がずれるかもしれませんが、一時の大映時代劇の室内というのは、おそらく映画史が実現させた最も素晴らしいもののひとつだと思うんです。やはり三隅研次の素晴らしいものは、彼の演出法もあるけれども、その背後にいたスタッフたちの、これはほとんど資本主義的暴挙としての職人芸ですよ、これに支えられていたと思うんです。今、森田さんが言われるには、アメリカ映画も、あんなに照明に凝らないで、大まかに照明を当てておくだけで誰にでも簡単に綺麗な画が撮れちゃう。ですから主役の目に光を当てるとか、そんな細かいことをしなくてもいいわけです。しかし綺麗だけれども、森田さんに言わせれば、やはり肌触りが違ってきたと。今は明らかに視線がスクリーンを捉える捉え方が粗雑になっていくわけですよ。それは私は仕方がないことだと思うんです。たとえば一九五〇年代の大映時代劇の室内セットの素晴らしいと途中で動いている人たちの素晴らしいは、もう永遠に失われたと思わざるを得ない。一九三〇年代ハリウッドのモノクローム画面のように。これはまあ再現不能のものであろうと。そうすると、その再現不能ものに我々がどう対処するかというですね、それに対するノスタルジーを持っている人たちと、それを知らない人たちが大きく分裂する時期にあるんじゃないかと思うんです。知らなければ、もうテレビの時代劇で充分なわけですね。今、私がまだ映画を見続けたり映画について発言したりしているのは、テレビの「あれで充分だ」という大雑把な画面と、充分なはずなのに、もっといい画面を作る

(14) 三隅研次（一九二一—一九七五）映画監督。当初日活京都撮影所に在籍していたが、四二年応召。敗戦後はシベリアに抑留され、四七年帰国。大映京都撮影所に入社する。五四年の『丹下左膳・こけしの壺』でデビュー。大映黄金期を代表する監督の一人で、日本初の七〇ミリ作品『釈迦』（一九六二）の監督を任されるなど、会社側の信頼も厚かった。他に『大菩薩峠』（一九六〇）、『座頭物語』（一九六二）などに一九六二など。

(15) 浅田彰監修『マルチメディア社会と変容する文化』（N T T出版、一九九七年、五三—五九頁などを参照のこと）。

(16) マルセル・レルビエ Marcel L. Herber（一八八八—一九七九）二〇年代フランスのいわゆる「印象主義」を代表する監督。伊藤大輔などの日本の映画作家にも多大な影響を与えたと言われる。第二回京都映画祭では、代表作である『エル・ドラド』（一九二二）、『生けるバスカル』（一九二五）の二作品が上映された。他に『人だなしの女』（一九二四）、『ラルジャン』（一九二八）などがある。

(17) ルーベン・マムリアン Ruben Mamoulian（一八九七—一九八七）ロシア生まれ。アメリカでミュージカルの演出家をしていたところをハリウッドに招かれ、『喝采』でデビュー。その背景には、トキー化による映画俳優の演技スタイルの転換があった。他の監督作に『市街』（一九三二）、『ジキル博士とハイド氏』（一九三二）、『絹の靴下』（一九三七）など。

うと思った職人さんたちの至芸との間の、ちょうど中間にいるからだと思うんです。それを同時代に見ることのできなくなった人たちの時代になれば、やはり違う映画論がもう少し出てくると思う。それまでの、いわば繋ぎというか、投げるピッチャーがいらないから打たれても投げてみるみたいな、そういう感じで私は映画の話を一応してきたんです。それが非常に厳しい状況のなかにありながらも、どこかに楽天性をもっている私の人格的な限界だとも思うんですけれども(笑)。

映画のメディア化はいつどのようにはじまったか

加藤 蓮實先生がこの数年来探究されている問題に、映画が一九三四年あたりから世界的傾向として物語を語るメディアになってしまったということがあります。たまたま今回の京都映画祭で一九二〇年代のフランスである程度の活躍を見せたマルセル・レルビエという作家を数本特集上映しておりまして、そこでひとつ気づきましたことは、彼がサイレント末期のトーキー直前の二五、六年にそれまで映画史が営々と築きあげてきた話法なり技法なりを総動員してひたすら物語を語ろうとしている。当然ながら、はなはだ不経済な物語なのですが、それでも、それこそ同時代のアヴァンギャルドの技法から初期映画の話法まで総動員しながらです。そういうことに気づいたんですが、映画がメディアになっていく過程ということについて最近はいかがお考えでしょうか。



映画芸術科学アカデミー (ロサンジェルス市)



蓮實 それは私、まだ仮説段階なんですけれども、もちろんそれ以前もメディアだったわけですが、映画の、大衆文化状況にふさわしい「新たなメディア化」というのが、本当に起こったかどうかについては全く仮説状態で、ただ、今言われたように、レルビエなんかにしても、まあ彼の場合は折衷派だと思っただけです。物語も語れるし映画の視覚性についても色気を隠さなかったと言えるんですが、ゴダールのよくやる手で言えばですね、細かい違いはありますが、よくて、大きな違いだけでひとつの差異を見せることができるかどうかという立場に立つと、ある意味ではマルセル・レルビエ的な折衷派は、私は一応無視してしまおう。それで折衷派といえればルーベン・マムリーアンも、トーキー第一作にしても、やや折衷派的なところがあつて、視覚的な要素も非常に強いし、物語的要素も強いっていうんですけれども。

加藤 『喝采』(一九二九)ですね。

蓮實 ええ、『喝采』の場合、視覚的要素がやはりアメリカ映画では、どこまで残ったのかというのも問題なんですけれども、ゴールドウィンからワーナー・ブラザーズのミュージカルまでは一応残っていた。まあ、残したのはバズビー・バークレーだと思っただけですが、ああいう効果というのがスーッと引いていったのと同じように、ロシアでも同じことが起こっている。物語が中心になっていく

(18) サミュエル・ゴールドウィン (Samuel Goldwyn) (一八八二—一九七九年説あり)——一九七四年「ワルシャワ」(当時はロシア)に生まれたハリウッドの映画プロデューサー。二〇年代以降は独立系プロデューサーとして自身の映画会社で手腕をふるう。良質の作品で知られた。プロデューサーをつとめた主な作品に「ステラ・ダラス」(一九三七)、『教授と美女』(一九四二)、『我等の生涯の最良の年』(一九四六)などがある。

(19) バズビー・バークレー (Busby Berkeley) (一八九五—一九七六) 振付家、映画監督。ブロードウェイの振付師として活躍後、三〇年にハリウッド進出。当初はゴールドウィンのもとで働いたが、後ワーナーに移籍、さらにMGMへと移った。カメラの自在な動きと幾何学的な群舞によって、三〇年代ミュージカル映画における最大の視覚的偉業を達成。代表作に「四十二番街」(フットライト・ボレロ) (ともに一九三三)、『ゴールドダイガース36年』(一九三五)など監督作品も多い。

(20) D・ボールドウエル「フランボワイヤンから狂性へ」一九二〇年—三〇年代の時代劇に関する考察(筒井清忠・加藤幹郎責任編集『時代劇映画とはなにか』(人文書院、一九九七年)、「四一—六二頁」を参照のこと。

ということですね。それから日本でも、これはもう少ししっかりやらないといけないと思ってるんだけど、これは第一回京都映画祭にきたボードウェル教授が「フランボワイヤン」という言葉を使っていましたよね。「フランボワイヤン」というのは「視覚的要素の誇張的な強調」ということだと思っんですけれど、明らかにそれが日本にもあって、山中貞雄²¹で、というのはこれは大雑把な言い方ですけれど、ゴダールの大胆なやり方で言うと、山中貞雄を見ていると、視覚的にも実はすごいんだけど、それを犠牲にして物語の方に引っぱっていく、ということが起こって、ほぼ大衆化社会の国々では同じことがほぼ同時に起こっていたらということになる。そこところはもっと詰めなくてはいいところ、が沢山あるんですが、今、詰めている余裕がほとんどないので仮説みたいなことだけを声高に語っているということになるんです。ボードウェルが「フランボワイヤン」と言っているのはなかなかいい目のつけどころだという気がしましたね。一昨日見た稲垣²²（浩）の『放浪三昧』（一九二八）は、トーンとしては、まだまだ伊藤大輔的なものを留めているけれども、やはりカメラの動きなんか肝心なところは、もうフランボワイヤンではなくなっている。ですから視覚的な効果だけの作家たちが、伊藤大輔にしても若干その頃停滞するわけです。旧ソ連も停滞する、それからドイツでもそういう監督たちがいなくなってしまうということがあります、おそらくフリッツ・ラング²³のハリウッド第一作と、最後のドイツ時代を比べてみると、前者の方が物語のエコノミーがずっと強くなっていると思っんです。ほぼそういうことが言えると思っすけれど、それと政治と当時の経済的問題を考えあわせないと、そう簡単には言えないと思っすけれども。

高橋 稲垣浩の『無法松の一生』（一九五八）は賞を取りましたでしょう²⁴。あれはたぶん画面の美しさというところもあったと思っんですけれど。

蓮實 そうですね。車輪がぐるぐる廻るところですとかね。ですから、稲垣は伊藤大輔的なものをちょっと留めているんですけれど、視覚だけではなく、ちゃんと物語は収めるというところはおさえている。

高橋 先日、宮川一夫²⁶さんが亡くなりましたけれど、そういう意味



映像の詩学
蓮實重彦

映像の詩学
蓮實重彦

映画 誘惑のエクリチュール 蓮實重彦



ちくま文庫

は 2
3
映画 誘惑のエクリチュール
蓮實重彦
ちくま文庫 760 (738)

(21) 山中貞雄（一九〇九—一九三八）マキノ・プロ、嵐寛寿郎プロダクションで助監督をつとめながら数多くの脚本を執筆。監督第一作『磯の源太・抱寝の長脇差』（一九三二）が絶賛され、一躍時代劇映画のホープに躍り出た。京都鳴滝に居を構え、近隣の映画人とともに脚本執筆集団「鳴滝組」を結成、共同ペンネームとして『梶原金八』を名乗る。将来をもっとも囑望される監督だったが、二九歳の若さで戦病死した。あわせて二一本の監督作品のうち、完全なプリントの現存が確認されているのは、『丹下左膳餘話・百萬両の壺』（一九三五）、『河内山宗俊』（一九三六）、そして遺作『人情紙風船』（一九三七）のわずか三本にすぎない。

(22) 稲垣浩（一九〇五—一九八〇）子役出身で、後に俳優片岡千恵蔵の独立プロダクション設立に参加。専属監督として千恵プロを大いに支える。千恵プロ作品の明るく伸びやかな作風は時代劇映画に新風を吹き込み、『明朗時代劇』『新装』をつけた現代劇などと称された。三五年の退社後も、時代劇映画を中心に高い評価を得た。『鳴滝組』の一員でもある。代表作に『鞍の母』（一九三二）、『無法松の一生』（一九四三）、『宮本武蔵』（一九五四）など。



京都市内の映画館、八千代館

では、やっぱりああいう方が作っていた画面作りというのは、今は継承していくんじゃないでしょうか。

蓮實 そうですね。ただ私は宮川さんがどちなのかというところからいいます。たとえば森田富士郎さんなんかは完全に物語を乱さないようにして、綺麗な画面を撮るという方なんですけれども、宮川さんも初期はそうだと思うんですが、『羅生門』（黒澤明監督、一九五〇）の場合は、ちょっと両方に足をかけているのかなあという気がしないでもないんですね。

高橋 ものによっては、このシーンは宮川一夫は自分の映像美を

追求しているとか。

蓮實 ですから、そのとき宮川さんは、いささか自分勝手なことをやっているのかなという感じがしないわけでもないですね。

加藤 『羅生門』という映画自体が日本的な物語というよりも、むしろ六〇年代に世界的に流行する、ある種の物語性を欠いた物語、すべてが終わった時点から過去を振り返るというよりも、過去が現在を侵食するがゆえに現在進行形でしか語れない、それゆえに物語を語り損ねる物語の萌芽を意識した映画になっています。そのとき、そういう現在進行形の物語に対応すべく、カメラマンが何らかの新しい話法を作らざるをえなかった、その始まりだと思ふのですが。
蓮實 そうなると思ふんです。ですから私はことによったらこれからまた視覚的な効果がパッと出てくるのかなという予感があります。で、逆に、『羅生門』だって宮川さんのあれだけの画がなければ、たとえば、雨が降ってくるころは、ほとんどドイツ表現主義時代のような感じですよ。ああいうことが効果となって、あの映画が一応括弧付きで高く評価されたんじゃないかという気がします。普通の静かな画だけで撮っていたら、あれだけ評判になっていたかどうかですよ。だから宮川さんも、うまい時期を考えてああいうことをやったのかなという気がします。

愛すべき映画作家たち

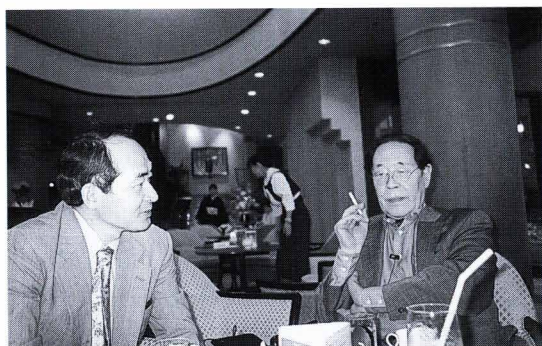
高橋 小津（安二郎）²⁵さんの映画なんかもやはりヨーロッパなんかで人気があるのは、ひとつは画面の美しさ、もうひとつは、どちらかというと古いものを大切にしているヨーロッパ人にわかりやすい、共感できるメンタリテイ、そういう両面があるように思います。

蓮實 あるとは思いますが、小津の場合には、はたして物語があるかというところ、よく考えてみるとほとんど薄っぺらで、語るべきものが何もなくたってしまった話みたいにも思える。同じことの繰り返しですし、新しい物語を創造することへの大きな断念みたいなものと、その断念を隠す映画的な技法ということになりますかね。私はやっぱり『秋刀魚の味』（一九六二）は傑出していると思う。もともと小津さんは山の手とは無縁の人ですしね。その辺りはいささか微妙なところがあるのかなという気がします。なぜ小津には東大や京大があんな沢山出てくるのかとかですね。小津さん自体は一切

(23) 伊藤大輔（一八九八—一九八二）時代劇映画の代表的巨匠。松竹蒲田の脚本家としてキャリアを開始。革新的な脚本を数多く提供した。二年、帝キネで監督デビュー。『日活移籍後の「忠次旅日記」三部曲（一九二七）で名声を不動のものにした。『イドウダイスキ』と称されたほどの華麗な移動撮影と火花散るモンタージュで有名だが、その根底には確固たる作劇術が横たわっている。他の監督作に『長恨』（一九二六）、『斬人斬馬剣』（一九二九）、『御誂次郎吉格子』（一九三二）、『王将』（一九四八）、『叛逆児』（一九六二）など。

(24) フリッツ・ラング Fritz Lang（一八九〇—一九七六）ドイツ表現主義の代表的監督として名声を馳せたが、ナチスへの協力を拒み、アメリカに亡命。以後五六年までハリウッドの契約監督として作品を量産した。ここで言及されている『ハリウッド第一作』とは『激怒』（一九三六）のこと。主な監督作に『ドクトル・マブゼ』（一九三二）、『メトロポリス』（一九二七）、『M』（一九三〇）、『暗黒街の弾痕』（一九三七）、『死刑執行人もまた死す』（一九四三）、『飾窓の女』（一九四四）など。

(25) 第一九回ヴェネツィア映画祭金獅子賞受賞。名高い一九四三年版を稲垣浩自身がカラー、ワイドスクリーンでリメイクしたの。



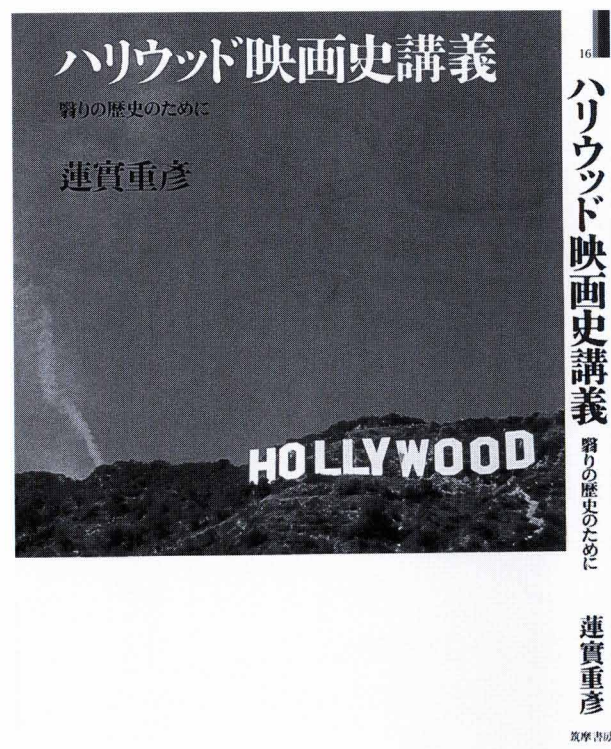
大学に行かなかった人なのに、京都に来れば京大教授らしい人が出てくるとか、京大ボート部らしきものがオールを漕いでいるとか、やはり全く知らないもののはずなんですよ、小津さんにとつてみると。そういうものを危うく物語化しているという点では、私は何かマンネリでもあるんですけれど、サスペンスのあるところがある。いや、変な人だと思いますよ、小津さんは。それは溝口健二⁽²⁸⁾の方がずっと自分の生活をなんらかの形で、そのままではありませんけれども複数の屈折をもって描いているんですが、小津さんの場合には、知らないことばかり描いている。

高橋 そういう意味では、溝口の方がリアルだと思うんです。ある意味では小津さんの方が……

蓮實 抽象的、非常に抽象的ですね。だからパターン化もしやすい抽象だと思うんです。

高橋 とても面白いお話をありがとうございました。

加藤 今日はお忙しい中を本当にどうもありがとうございました。蓮實 いや、こちらこそ、どうもありがとうございました。



欄外注はすべて藤井仁子（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）による。映画館等の写真撮影は加藤幹郎。その他は高橋義人と鈴木愛美による。

（28）溝口健二（一八九八—一九五六）小津、黒澤とともに海外でもっともよく知られた日本人監督。息の長い長廻しを多用し、女性主人公を徹底的に追いつめていく苛烈なスタイルで世界の絶賛を浴びる。代表作に『浪華悲歌』（祇園の姉妹）（ともに一九三六）、『残菊物語』（一九三九）、『元禄忠臣蔵』（一九四一—四二）、『西鶴一代女』（一九五二）、『雨月物語』（一九五三）、『山椒太夫』（一九五四）など。

（27）小津安二郎（一九〇三—一九六三）日本を代表する映画作家。とかく日本人の日常を淡々と描いた巨匠として語られがちだが、異様に低い位置に据えられたカメラ、人物の真正面からの切り返しなど、そのスタイルは不気味なまでに「非日常的」である。主な作品に『生れてはみたけれど』（一九三三）、『父ありき』（一九四二）、『晩春』（一九四九）、『麦秋』（一九五二）、『東京物語』（一九五三）、『秋日和』（一九六〇）など。

（26）宮川一夫（一九〇八—一九九）日本を代表する撮影監督の一人。二六年、日活京都撮影所に入社。三五年の『お千代傘』でデビューした。とりわけ溝口健二監督とのコンビは有名。『羅生門』以外にも『鴛鴦歌合戦』（一九三九）、『無法松の一生』（一九四三）、『雨月物語』（一九五三）、『浮草』（一九五九）、『おとうと』（一九六〇）など代表作多数。

現代アメリカ哲学への誘い

クワイン／デイヴィッドソン／ローティ

富田恭彦

YASUHIKO TOMIDA



富田恭彦（とみだ やすひこ）
一九五二年、香川県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程研究指導認定退学。現在、京都大学総合人間学部、同大学院人間・環境学研究科教授。京都大学博士（文学）。主な著書に『ロック哲学の隠された論理』（勁草書房、一九九一年）、『クワインと現代アメリカ哲学』（世界思想社、一九九四年）、『科学哲学者 鈴木達彦の多忙な夏』（ナカニシヤ出版、一九九七年）、『哲学の最前線 ハーバードより愛をこめて』（講談社、一九九八年）などがある。

アメリカ哲学と言えば、プラグマティズムを連想する人が多いと思う。たとえば、パース、ジェイムズ、デューイ。人によってはクワインやローティを、そうした古典的プラグマティストたちの延長線上に想起するかもしれない。実際、分析哲学の代表的論客であったハーバードのW・V・クワイン（一九〇八―）には、プラグマティストを自認しているかのような発言があるし、『哲学と自然の鏡』（一九七九）で一世を風靡したスタンフォードのリチャード・ローティ（一九三一―）は、自分の立場を好んで「プラグマティズム」と呼ぶ。だが、彼らの哲学は、プラグマティズムという言葉の一般的ニュアンスをもつては決して捉え切れない、多面性と深さを持つている。

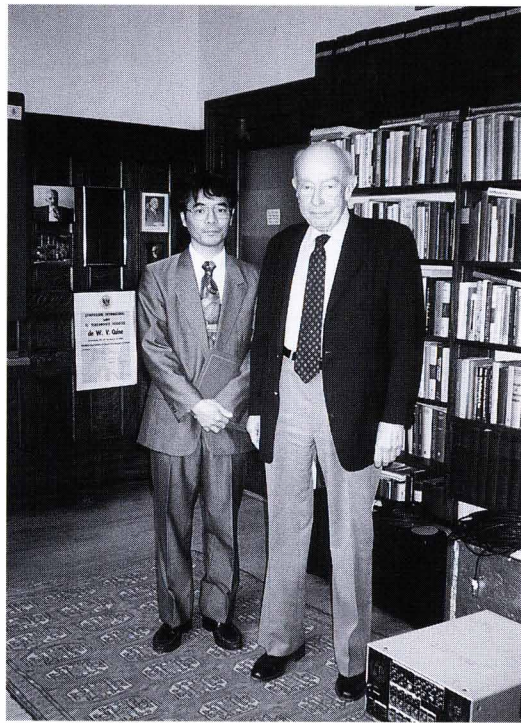
クワインは、オーバリン・カレッジを卒業したのち、ハーバード大学大学院哲学科に学んだ。その秀才ぶりは、ハーバードが彼を決して手放そうとしなかったことから、うかがえる。論理学者として知られる一方、科学哲学・言語哲学において、世界をリードする見解を相次いで提示した。

伝統的に、文には、経験によらずに真であることがわかるもの（数学や論理学に属する真なる文）と、経験（実験・観察）に

よって真であることがわかるものとがあり、両者の間には、明確な区別があるとされてきた。

いわゆる、分析的真理と総合的真理の区別である。ところが、クワインによれば、科学の一般法則（総合的真理の事例）も、

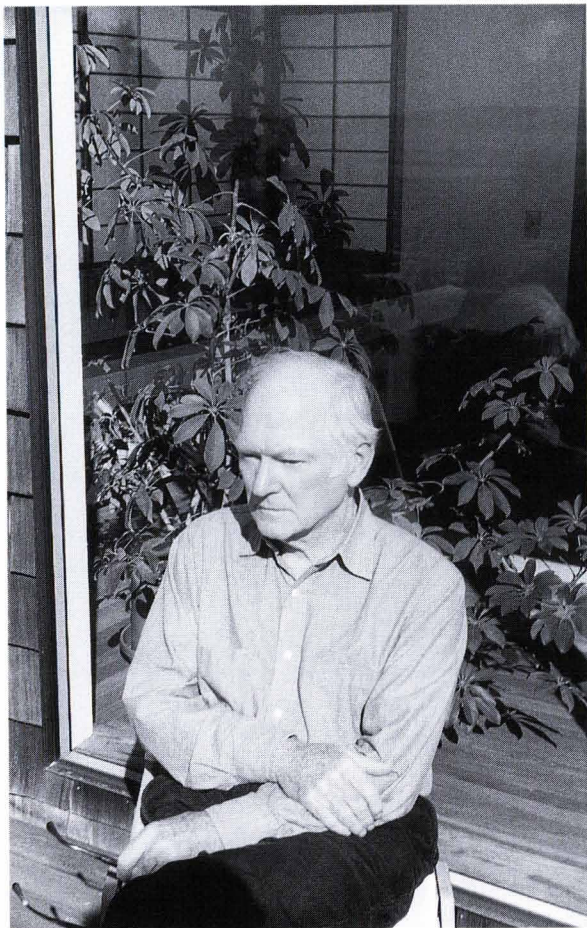
論理学や数学の基本原則（分析的真理の事例）も、事情に応じて変更可能であり、それらが一体となって科学理論を形成している。科学の諸理論は、それを構成するさまざまな文が全体として経験によってチェックされるのであり、その文のうちのあるもののみが、他と切り離されて、経験による検証（真偽確認の手続き）にさらされるのではない。ある科学理論にとって都合の悪い観察結果が出てくれば、理論のどこかを手直しすることになるが、理論を構成する文のいずれを手直しするかは、どうすれば理論全体の単純性を維持できるかなど、プ



クワイン先生と筆者 八年前、ハーバードに留学したおり、クワイン先生にインタビューしたときのもの

ラグマティックな観点から決められることになる。これが、クワインのいわゆる「全体論」的科学観である。

経験によって決定的に（あとで訂正し直すことのない）という意味で）真偽が定まる文。また、経験によらずして恒久的に真と定まっているような文。クワインの全体論的科学観は、そうした文の「特権性」を、原則的に認めない。これによってクワインは、後に述べるローティの反表象主義的哲学を準備することになる。だが、その一方で、それは明らかに、経験論のある種の原則を維持しようとするものでもあった。



デイヴィッドソン先生 拙著『クワインと現代アメリカ哲学』を出版するおりに、その本への掲載用にと、デイヴィッドソン先生がお送りくださったもの

観察文とは、ある刺激のもとで、即座に、公共的に（原理上複数の人がともに）、同意もしくは拒否することのできるような文のことである。「ウサギがいるぞ」。「これは硫化水素だ」。クワインは、こうした観察文が、外界の身体表面への刺激と密接な関係にあることに着目し、その意味で、観察文は、科学理論が経験によってチェックされる際のチェックポイントになると考えた。これはもちろん、観察文を、経験によって「決定的に」真偽が定まるとするものではない。だが、観察文への同意・不同意が、身体表面への刺激と対応する点で、理論（われわれの考え）の真偽に対する外界の役割に重きを置くとするものである。これに対して、彼の高弟のデイヴィッドソンは、（刺激の役割をまったく無視するわけではないもの）クワイン的な対応関係の重要性を拒否し、反経験論の立場に

立つことになった。
ドナルド・デイヴィッドソン（一九一七—、カリフォルニア大学バークリ校教授。その言うところによれば、われわれの信じていること（以下これを「信念」と言う）の真偽を確定すべく、それを、信念ならざる何か（世界とか事実とか）と突き合わせようとしても無駄である。なぜなら、信念と突き合わせるべき世界とか事実とかいったもののそれ自体が、われわれの信念となってしまうからである。「ウサギがいるぞ」というわれわれの信念を確かめようとして、事実を確認しようとするれば、われわれは、「ウサギがいる」とか「ウサギはいない」とかいった信念を得て、それを問題の「ウサギがいるぞ」という信念と突き合わせることになる。だから、信念が信念ならざるものと「対応」しているかどうかを調べようとしても、信念ならざるものは手に入ら

ないのである。

さて、クワインは、『言葉と対象』（一九六〇）のなかで、まったくの未知の言語をフィールド言語学者はどのようにして翻訳できるようにするかを、「根本的翻訳」に関する説として論じた。ウサギのいるところで、現地人がそれを視認しつつ、「ガヴァガイ」と言ったとする。フィールド言語学者は、自分なら「ウサギがいるぞ」とでも言うべき状況であることに照らして、「ガヴァガイ」は「ウサギがいるぞ」を意味するのではないかと仮説を立てる。そして、さまざまな機会を捉えて、それを確かめようと試みる。

デイヴィッドソンはこれを承けて、ある理由から、「根本的翻訳」説ではなく、「根本的解釈」説として自説を展開する。そしてその作業のなかで、すでにクワインが注目していた「好意の原理」の重要性を、全面的に強調する。好意の原理とは、人の言うことを理解しようとするなら、その人の言うことはたいてい正しいと考えなければならぬというものである（つまりは、人の言うことを好意的に受け取れということである）。この原則は、デイヴィッドソンによれば、いくつもある選択肢の一つではない。この原理に従わなければ、人の言うことは理解できない。フィールド言語学者がもし現地人の言うことを好意的に受け取らなければ（つまり、現地人はおかしいことを言っているにちがいないなどと考えるなら）、ウサギがいるところで現地人が「ガヴァガイ」と言ったとしても、それが何を意味するかを推測することはできない。これでは、

仮説は立てられず、フィールド言語学者としての仕事はまったく進まない。

デイヴィッドソンは、ここからさらに、いくつかの重要な帰結を引き出す。たとえば、土星に、土星人が住んでいて、土星語を話しているという。ここで、土星人はわれわれとはまったく考え方が異なり、したがって、土星語は原理上われわれの言語には翻訳できないということがありうるだろうか。一見それは、ありそうに聞こえる。しかし、土星語がわれわれの言語に翻訳不可能であるにもかかわらず、土星人がわれわれとはまったく異なる考えを持っているということが、どうしてわれわれにわかるのか。土星人がわれわれとまったく考え方が違うということは、翻訳してみなければわからない。そうでなければ、せいぜい、「違うのではないか」という、単なる思い込みにとどまることになる。

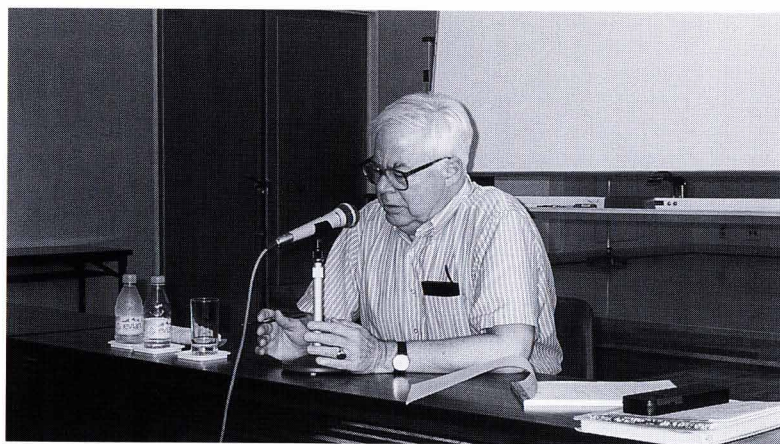
では、土星語がわれわれの言語に翻訳できるとしてみたらどうだろう。その上で、翻訳結果が、われわれとはまったく違う考えを示すような文ばかりになるとしたら。だが、それは、土星人がわれわれとはまったく異なる考え方をしていることを、証明しはしない。なぜかと言えば、われわれは、おかしい結果しか出てこない「翻訳」を、翻訳とはみなせないからである。

これに対して、翻訳のプロセスに問題がなければ、われわれはそのおかしい結果を正しい翻訳とみなさなければならず、そこから、土星人はおかしなことを実際に考えているのだと言わなければならないのではないか、そういった反論がなされるかもしれない。

れない。だが、そんなことはありえない。そもそも、土星語の翻訳においては、土星語の文法書と辞書が使われるはずであるが、文法書と辞書を作る作業は、フィールド言語学者の作業である。土星語を研究するフィールド言語学者は、好意の原理に従って仮説を立て、それを検証しながら、作業を進めたはずである。その作業においては、土星人もフィールド言語学者と同じように状況を把握しているのではないかと考え、不可欠の役割を果たしており、立てた仮説がうまく検証できなければ、別のものともらしい仮説を立ててみるという仕方、調整がなされていたはずである。したがって、そうした作業にもとづく翻訳プロセスによって翻訳した結果が、すべておかしいものになっているということなど、ありえないことなのである。

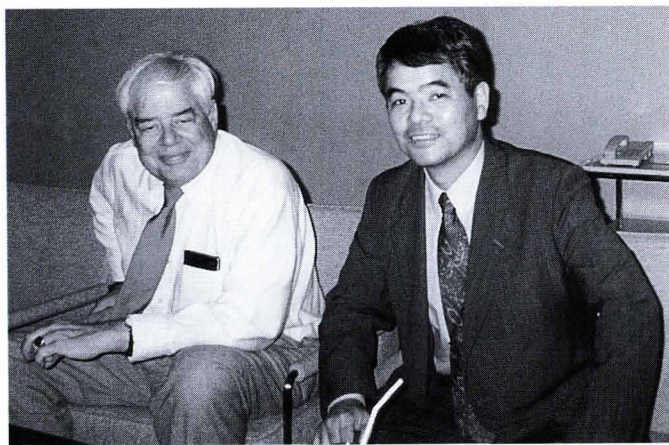
かくして、デイヴィッドソンによれば、われわれの言語に翻訳不可能な言語が存在し、われわれとはまったく異なる考え方を持ったものが存在するということは、ありえない仮定である。これはつまり、われわれは、自分たちと考え方がかなり重なるものでなければ、それを言語の使用者とはみなせないということでもある。

リチャード・ローティは、クワインやデイヴィッドソンのこうした主張のそれぞれに重きを置きつつ、反表象主義の立場を展開する。表象とは、何かを写すこと、あるいは何かを写すもののことであり、表象主義とは、われわれの正しい信念は、世界の在り方を正確に表象するがゆえに正しいとする立場である。この立場からすれば、科学



ローティ先生 1999年の秋、大谷大学の客員教授として京都に来られたときのもの

は、世界の本当の在り方を正確に表象しているがゆえに、真である。これに対して、ローティは、科学が真であることを説明するのに「表象」を持ち出しても無駄であると言う。すでにデイヴィッドソンとの関係で触れたことでもあるが、信念が何かを正確に表象している（言い換えれば何かに対応している）と考えても、信念が何を表象しているか（何に対応しているか）を言おうとすれば、それはわれわれが正しいと信じていることを述べることにしかならない。われわれの正しい考えは、われわれの考えならぬ何かを正確に表象しているがゆえに真であるというのは、一見もつともらしい



ローティ先生と筆者 1999年秋、京都にて

が、じつは何の役にも立たない考え方なのである。かくして、ローティの立場は、「反」表象主義となる。

だが、信念の真偽を信念ならざるものと突き合わせて確認しようとするのが無駄なことだとしても、何でも好き勝手に考えてそれを正しいと言っているというわけではない。世界は相変わらずわれわれに刺激を与え続け、それによってわれわれは、（たとえば「ウサギがいるぞ」という観察文に同意するように）ある信念を正しいものと考えよう余儀なくされている。しかし、同じ刺激を受けていても、その時点でほかはどういうことを信じているかとの関係において、「ウサギがいるぞ」を間違いないとしないといけないこともある。たとえば、「ウサギそっくりの作り物がそこに置

かれている」という信念をすでに持っている人は、そうでない人が「ウサギがいるぞ」と信じるような刺激を受けても、「ウサギがいるぞ」とは信じないであろう。つまり、われわれは、文脈のなかで生きており、刺激にどう対処するかについては、さまざまな可能性が、つねに開かれているのである。科学は、そうした対処の仕方の一つである。政治も詩作もまたしかり。表象主義が成り立たない以上、いずれかの知的・精神的営みが、世界のそれ自体としての在り方を特権的に言い当てているわけではない。科学も政治も詩作も、その意味で、認識論的には同等である。だが、それらは、それぞれの語彙を持ち、それぞれ独自の記述方法を用いるがゆえに、異なる目的を達するための手段なのである。

かくしてわれわれは、特権的知識を持つことなく、全体論的状况のなかで、刺激に対する多様な対処の可能性を持ちつつ生きている。とすれば、そこには明らかに、希望がある。われわれの置かれた現状がどれほど困難なものであるとしても、もしかしたら、われわれは、それに対処するための、もつといい考えに行き当たるかもしれないのである。それゆえ、ローティは、表象主義の欺瞞を捨てて、人間の創造性に最後の期待を掛けるべきだとする。むしろ、そんな期待は無駄だという敗北主義もあろうが、敗北主義からは何も生まれない。ローティが好んで言うように、「だめかどうかは、試してみなければわからない」のである。

有機物質・化合物の形・構造と性質・機能

山口良平 富山大学環境学同窓会 環境学専攻

物質の形・構造と性質・機能の関係を解明することは化学の永遠のテーマである。ここで言う形・構造とは、原子・分子レベル [nm (10⁻⁹m)] での話であるから、もちろん目には見えない。しかし、それが目に見える現象としての性質や機能を規定している。ここで重要なのは分子の幾何学的な形と電子の偏在や分散などに関係する電子構造である。

有機物質・化合物は、約一七〇年前に人工的につくられることが発見されて以来、今ではわれわれの生活に広く密着しているが、今後はさらに「環境と調和する」（グリーンな）性質・機能が求められている。

炭素原子に炭素、水素、窒素、酸素、ハロゲン、硫黄などの原子が結合してほとんどの有機物質・化合物が形づくられている。中心原子の炭素の結合の形はその数により四面体（四個）、平面三角形（三個）、そして直線（二個）と変化する。これらの形は理論的に説明されているが、直感的にも結合間の反発が均等になる形として理解できる。各々、メタン、エチレン、アセチレンがその例である。エチレンが三個連結した形のベンゼン環（平面六角形）が特に安定なのはその形と電子構造に由来する。

自分の鏡像と重なりあわない、ちょうど左手と右手の形の関係をキラリティー（掌性）と呼び、たとえばメタンの水素原子四個をすべて異なった原子・原子団に置き換えるとキラリティーが生じる。これが光学活性の原因であり、生化学現象に大きく影響する。タンパク質は一方の形のみのアミノ酸から構成されているので、これにフィットする形を持つ分子のみが作用を受ける。たとえば、デンプンとセルロースはグルコース（ブドウ糖）が重合した高分子だが、グルコース間の結合の形が右手、左手のみの違いで、ほとんどの動物の酵素は前者を消化できるが、後者はできない。

現代思想としてのマザー・テレサ

ベルクソン再発見

MOTOAKI SHINOHARA



篠原資明（しのはら もとあき）
一九五〇年、香川県生まれ。京都大学文学部哲学科卒。京都大学大学院文学研究科（美学美術史学専攻）単位取得満期退学。京都大学総合人間学部 同大学院人間・環境学研究科教授。専門は、哲学・美学。詩人、美術評論家。自らの活動を「まぶさび」の理念のもとに統括し、知・行・遊からなる「まぶさび庵」を主宰する。主な著書に『トランスエスティック』（岩波書店）『五感の芸術論』（未來社）『言の葉の交通』（五柳書院）『心にひびく短詩の世界』（講談社）などがある。

個人的な話になるが、一九九九年三月に完結した「現代思想の冒険者たち」（全三巻、講談社）というシリーズで、『ドゥルーズ』と『エーコ』の二冊を執筆した。要するに、ドゥルーズとエーコという、二〇世紀を代表する二人の思想家と格闘せざるをえなくなったわけだ。その仕事から解放されたいま、本来なら、ぼくの心は満足感にひたされているはずだろうが、じつはそうではない。肝心な問題は、これら二人の思想家によっても取り逃がされている。そんな思いが、ある種の途方もない不充足感をぼくに残すばかりなのだ。

哲学者、ドゥルーズの出発点はベルクソンにあった。ある意味でドゥルーズはベルクソンを徹底的に読みぬき、徹底させることで、おそらくはベルクソンが予想だになかったところまで推し進めたといえるだろう。その推し進め方にたしかに問題はあるとしても。

これに対してエーコの出発点は、トマス・アクイナスにあった。一三世紀のあのトマスである。ただ、エーコの場合、トマスの研究は、のちの思想の展開において、極端なあたりでの存在論に対する拒否という、いわば消極的なあり方でしか生かされていない。ドゥルーズにおいて、ベルクソ

ンが徹底的に咀嚼され組み直されたのとは事情が異なるのである。

ドゥルーズとエーコ、それぞれに感じた満たされない思いの一因は、どうやら、ベルクソンとトマスとがそれぞれに処理されるやり方そのものに対する不満にあるらしいことがわかってくるとともに、トマスとベルクソンという、一見したところなんの関係もなさそうな二人の哲学者が、ぼくのなかで、大きく再浮上することになった。いま再浮上といったのには、理由がある。今世紀初頭、ひとりの魅力的な人物において、トマスとベルクソンは、いわば劇的なたちでぶつかり合っていたからだ。その人物とは、ジャック・マリタンである。

マリタンの処女作『ベルクソン哲学』（一九二三年）は、じつのところ、ベルクソンからトマスへという哲学的回心のドラマを描き出したものにほかならない。一時期、世界に広まったネオ・トミスムの最大の立て役者と目されるマリタンの思想は、ネオ・トミスムの退潮と軌を一にするように読まれなくなったし、マリタンによるトマス解釈自体も、ほかでもないトマス学者たちにより手きびしい批判を受けることにもなった。しかし、ことさらにトマスに触れたこともないベルクソンの立場をトマス

の立場と対比して見せたのは、依然としてマリタンの功績であり続けるだろう。というのも、この対比は、二千数百年におよぶヨーロッパの哲学の歴史において、マリタンが意識しなかった意味で最大級の重要性をもつもののように思われるのだから。

ことは生成の問題にかかわる。いいかえるなら、創造論と存在論にかかわるだろう。この問題に、ひとつの典型的なたちを与えたのが、トマス・アクイナスだった。まゝるごとの存在を創造したのが神であるとする立場を確立することによって、トマスはアリストテレスに拠りながらも、アリストテレスを一步進めたのである。

トマスの立場は、いうまでもなく、キリスト教の教義を尊重しつつ確立されたものだ。そうであるかぎり、その立場は明らかに限界をもつ。おまけに、トマスが大文字で「哲学者」といえば、きまってアリストテレスを指し示すのを見てもわかるとおり、その立場は、彼が知りえたかぎりでのアリストテレスをまるごとかかえ込むものだった。一六、七世紀の科学革命が、アリストテレスの自然学を否定するものだったことを考えるなら、その点からも、トマスの立場の限界は明らかだろう。しかし、無からの創造、絶対的な始まり、というトマスの

立場は、近代以降の哲学者たちに、トマスを意識するしなにかかわらず、もともと執拗につきまとい続けたものだった。神の存在証明については、いうまでもないこととして、存在論の問題のそもその立て方についても、そう思われるのだ。

たとえば、ライプニッツによる存在論的な問い、すなわち「なにゆえに無ではなく、むしろ何ものかが存在するのか」という問いは、現代の存在論の教祖ハイデガーにいたるまで縛ることになった問いであるが、このような問いかけ自体が、すでに無を前提としている。無が存在に先行することが、暗黙の前提とされてしまっているからだ。神によるまるごとの存在の創造が語られるのも、そのような無の先在を前提してのことだろう。じつは、このような旧来の存在論的な問いかけの前提そのものに異を唱えたのは、ベルクソンなのである。その『創造的進化』（一九〇七年）の最終章の最初の部分は、その問題の検討に当てられていた。ぶちまけていえば、長い間、その部分の議論の意味がよくわからず、どうしてこんな問題に長々と言葉をついやすのだろうと、不思議に思ったものである。しかしマリタン、エーコを読み、そしてもつと決定的なかたちでは、山田晶氏による『トマス・アクィナスの《エッセ》研究』（一九七八年、創文社）を知るにおよんで、ようやく、その部分の議論の意味が了解されるようになったのだ。

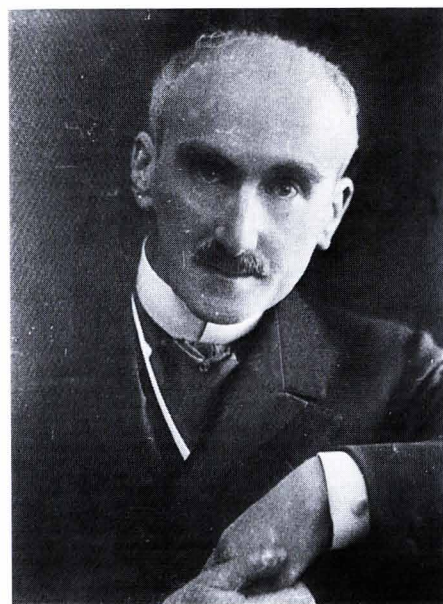
これは、はくにとつてまことに意外なベルクソン再発見だった。無から存在へという移行そのものを否定することにより、ベ

ルクソンは、無からの創造をつかさどる神を否定しただけでなく、旧来の存在論の前提そのものをもつきくずしたのである。

では、はじめに存在するものは何なのか。ベルクソンが『創造的進化』で提案したエラン・ヴィタールとは、生命の起源を名指すもので

はなかったのか。『創造的進化』に、生命の起源についての、いやそもそも起源そのものについての明快な答えを性急に求めようとしても、おそらくは失望するだけだろう。絶対的な始まり、起源といったものについての明確な答えがあるとしても、そういったものは、基本的にトマス哲学に帰趨せざるをえまい。それでも、はじめに何があったのか、とベルクソンに問うならば、どうだろう。あくまで推測によるほかに、はじめにあったといえるのは、現在と過去の差異そのものだと答えただろうと思われる。

ベルクソン哲学の処女作『意識の直接与件に関する試論』（一八八九年、邦訳名『時間と自由』）では、継起が語られるのは、過去を記憶する存在者にとってだけである旨が述べられていた。その立場は、以後の著作でさらに深化され、現在と過去との本性の差異、そしてそれゆえの、現在と



アンリ・ベルクソン

BERGSON, LA CONSCIENCE ET LA VIE, LE POSSIBLE ET LE RÉELより

過去との同時生成の主張へとおよんでいく。継起を時間のア・プリオリな形式としてすませているカント哲学は、そもその当初からベルクソンによって話にならないとされているようなものだ。ついでにいうならば、ドゥルーズがその主著『差異と反復』において、ベルクソンからカントへという道筋を示していることは、たとえいかに独自で冒険的なカントの読みを介するにせよ、ベルクソンの肝心な部分についての無理解を、さらには哲学的な不誠実さえも、うかがわせかねまい。

いずれにせよ、生命が全知全能の神により、無から創造されるという立場は、ベルクソン哲学においては拒否される。しかし、重要なのは、神の存在そのものが否定されるわけではないことだ。

ベルクソンの哲学は、一九世紀の生物学革命をうけるかたちで提案されている。そのことはとても重大で、しかもあまりにも

無視されがちなことだ。というのも、この生物学革命に誠実に、かつあくまで独自の立場から呼応できた哲学者は、いくら見まわしても、ほかにいそうもないからである。哲学史の記述者たちは、生物学という語が一九世紀初頭にはじめて創り出されたこと、植物の細胞と動物の細胞とが基本的に同じものからなるという確認が、同じ世紀の頃になされたこと、そしてまた、一九世紀後半の進化論により、生物種の構成が固定された不変のものではなく、種そのものが生成し進化するとされたこと、およそこういった事実をあまりにも顧慮しない。こういった事実をしかるべく評価できるかどうか、哲学者の評価になんの関係もないかのように。

ともあれベルクソンは、アリストテレス以来の直線的進化論に対して、一九世紀以後の進化論を分岐的進化論として特徴づけた。そして、それらの新しい進化論の立場を検討しつつ、そのように生命を分岐させつつ進化させる原動力を、エラン・ヴィタール（生の飛躍）と呼んだのである。それは、目的論ないしは生氣論とも、機械論とも違うところから発想された画期的なものだった。ベルクソンの生の哲学を生氣論として決めつける人は世に多いが、そういった人たちは、『創造的進化』の最初の部分さえ読んではいまい。

分岐的進化論によると、生命はいくつかの流れへと、つぎつぎに枝分かれしていくものと見なされる。動物の場合であれば、主に知性と本能の方向に分岐していったというのが、ベルクソンの基本的な見立てだ

った。知性とは、自己の有機体以外の素材により、道具を製作し使用する能力。本能とは、いわば、自らの有機体を道具とする能力をさす。ベルクソンにとつて実在するのは、動きそのものであることを忘れないようにしよう。それ自体は動かない固定されたものが動くこと概して考えられがちだが、このような考え方自体が、じつは知性のやり口である。動くものなき動きそのものこそ、ベルクソンの前提するもののなだ。知性は、それに対して、固定し分割し再構成するというやり方で対処する。だからこそ、いくらでも有機体の分節を無視した道具や機械を作り出せるわけだ。これに対して本能は、特定の有機体にしか働きかけることはできない。しかし、その限られた対象に対しては、有機体相互の共感により、絶妙ともいえる働きをやってみせるだろう。ベルクソンが、とりわけ膜翅類（蟻や蜂）に見て取った本能のとらえ方は、以後のたとえば動物行動学などからすれば、素朴すぎるように思われるかもしれない。しかし、そのような動き相互の共感なしには、なにごとも説明できないのも事実だろう。

ただ、知性的存在も、本能的存在も、同じ生命存在である以上、他の傾向を消し去ってしまうことはありえない。だからこそ人類にあつては、知性の周辺に本能の残滓が弱々しいかたちでながら存続するのである。このような本能の残滓が働くからこそ、芸術が生まれもする。このように、知性的存在のただ中に、本能の助けを得て発現する能力を、ベルクソンは直観と呼び、それを哲学的直観として方法的に拡張しよう

したのである。ただ、直観の働きは、それだけにはとどまらない。

その最晩年の書『道徳と宗教の二源泉』（一九三一年）において、ベルクソンは神秘的直観を語ることになる。同書で語られるエラン・ダムールというのも、実質的には神秘的直観と同じものを名指す。両者とも要するに、本能の残滓に含まれる共感能力が極度に拡張されたものと見ればよい。

生命の進化は、人類においていくつもの閉じた社会を作り出し、それらの社会をより完全に閉じたものとする静的宗教まで作り出すことになった。しかし、そんな中にあっても、社会や宗教の閉じたあり方を打ち破り、愛を人類全体へと押し広げようとする、開かれた動的宗教が出現してくる。

エラン・ダムールとは、そのような動きを生じさせる、愛の衝動のことと思えばよい。エラン・ダムールの担い手は神秘家と呼ばれるが、ここで神秘家といわれるのは、いたずらに瞑想や観想にふける人のことではなく、なによりも行動の人であり、行動の魅惑によって輪を広げる人のことである。神秘的直観というのも、あくまで、そのような行動との関連で語られるもののことだ。

エラン・ダムールの最初の典型的な体現者を、ベルクソンはイエス・キリストのうちに見て取った。キリスト以後にも、数々の神秘家の姿をベルクソンは見取取らう。たとえば一六世紀スペインの聖女、アビラのテレサも、そのようなひとりである。この哲学者が今日まで生き続けておれば、マザー・テレサのうちにも紛れない神秘家を見て取ることだろう。二人の聖女に共通



マザー・テレサ

和田町子著『マザー・テレサ』（清水書院）より

するのは、ありあまるほどの行動力である。アビラのテレサは、一六世紀という、カトリックにとって困難きわまりない時代に、カルメル会を刷新し、女子洗足カルメル会と男子洗足カルメル会を創設した。生涯に一六の女子修道院と一四の男子修道院を設立たとされている。マザー・テレサは、女子修道会「神の愛の宣教師会」と男子修道会「神の愛の兄弟宣教師会」を創設した。神の愛の宣教師会の修道院は、生前すでに一〇〇カ国以上の国で五百を超えるまでにいたったという。

確実なことは、二人のテレサによるこういった活動が、感動を呼び、人々を突き動かしたことである。ベルリンの壁の崩壊、ソ連邦の解体を経たいま、民族紛争が各地で再発し、それぞれの民族や集団が相も変わらず自らの閉じた宗教を掲げている。マルクス主義も、いまでは閉じた宗教の代替物としか映らない。世界各地に出現する宗教系カルトもまた、ベルクソンの語った閉じた社会、閉じた宗教の見本を繰り広げるばかりだ。カルトとは、フランス語でセクトと訳されることからわかるとおり、極端に閉じた集団のことにほかならない。問

題は、機械主義の現代的な現れであるメディアの進歩が、閉じた社会と閉じた宗教にも、開いた社会と開いた宗教にも、利用されうることだろう。現実の危険も、希望もそのことと不可分なのである。しかし、現代思想を語る人たちが、そのような危険と希望とを語る言葉を、いったいどれだけ持ちあわせているだろうか。マザー・テレサとメディア論をとともに語りうる言葉こそ、真に現代的な思想に必要とされるものだろう。二千年紀の区切りを迎えようとする今日、数年単位、数ヶ月単位で、ころころと変わる思想ばかりを、現代思想と呼ぶべきではあるまい。西洋世界というならば、ベルクソンのように、二千数百年の歴史にあつて、屹立する思想、マザー・テレサの積極性をも語りうる思想こそが、真に現代思想の名に値する。ベルクソン哲学は、本の初歩的な読み方も知らない自称哲学者たちが決めつけたように、素朴で時代遅れなのではない。それは、ただひたすら純粹で強靱なのである。

グレイコードと実数

立木秀樹（京都大学総合人間学部助教）

私の専門は計算機科学ということで、さまざまなものの計算機上での表現、すなわち、0と1という二つの記号の列としての表現に興味がある。

01111111...という自然数が、0・1・10・11・100...と二進法で表現できることは皆さんご存じだろう。しかし、これ以外にも方法がある。たとえば、0・1の後をひっくり返して11・10とする。その後は、110・111・101・100・1100...と続ける。この規則は、コ桁のコードを生成するのに、二進法ではコ桁目を1にしてコ桁までのコードを繰り返してたのに対して、コ桁目を1にしてコ桁までのコードを逆の順番に用いるというものである。このコードのいい点は、数が増えても一文字しか変化しないという点である。このコードはグレイコードと呼ばれており、電子回路の最小化や画像圧縮といった分野で応用されている。

一方で、実数は0と1の有限列としては表現できないが、無限列としてなら表現できる。この場合も、通常は二進展開が用いられるが、グレイコード展開というものも同様に考えられる。このいい点は、二進展開なら1.0を表現するのに1.00000...と0.11111...という二つの方法があるがグレイコード展開では1.10000...と0.10000...となり、同じ数を表現する二つの方法が一文字しか違わなくなる点である。対称的であり、いかにも連続な感じがして、筆者にはこちらの方が気持ちがいい。この表現を用いた実数の計算の枠組みに、今、興味を持っている。

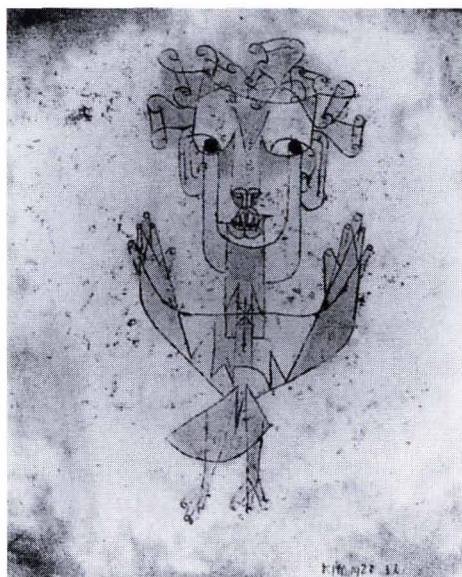
話は変わって、西暦二〇〇〇年を迎えた瞬間の最大の醍醐味はカウントダウンだった。三、二、一、〇の掛け声とともに四つの数字が同時に変化するのをみんなわくわくしながら見つめていた。この楽しみは、グレイコードで表記したのでは存在しない。

ヴァルター・ベンヤミン

「原状回復」の思考

道籐泰三 TAIZO MICHIHATA

「世界は没落の宿駅としてしか意味をもたない」(『ドイツ悲劇の根源』)。この陰鬱な世界観は、宗教的な解決と救済がもはや信じられなくなった一七世紀ドイツバロックの没落史観を総括したベンヤミンの言葉であるが、それはまた、彼が自らの時代に対して差し向けた仮借ない診断の言葉でもあった。幸福、技術、未来を賛美するいかにきらびやかな言説で辻褃合わせされようとも、われわれの歴史は、瓦礫の上に瓦礫が積み重なってゆく破局にすぎず、かりに歴史の一切を見通す天使がいるとするなら、その眼には一面の瓦礫の山しか映らないだろう。「われわれの眼には事件の連鎖と映



パウル・クレー：新しい天使 (1920)
ベンヤミンの「歴史の天使」のイメージの源となった。
Benjaminiana (Giessen, Anabas Verlag, 1991) より

ど世界が地獄の相を呈して迫ってきたとしても無理からぬところではあろう。だがそれだけではない。自ら土星生まれと称する彼の憂鬱は、もとより近代の人間の啓蒙理性に対する絶望的な不信に養われてもいた。「人類はなぜ真に人間的な状態に踏み入るかわりに、一種の新しい野蛮に落ち込んでゆくのか」といった

アドルノ、ホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』の陰鬱なテーマは、そのままベンヤミンのものでもある。彼には、社会の「理性的」進歩それ自体が、破局以外の何ものでもないこと映っていた。「進歩の概念は破局の観念のなかに基礎づけることができる。先へ先へと進んでゆくこと、それ自体が破局なのだ」(『セントラル・パーク』)。

世界は没落の一途をたどっているというのつぎきならぬ危機の認識、ベンヤミンの思考は、この危機的認識をばねにし、それをどこかで逆転させることをめざして紡がれてゆく。その逆転のありようは、悲惨な現状にこそ逆に神の介入と救済の契機を見出そうとするユダヤのメシア信仰に絡めて、



道籐泰三(みちはた たいぞう)
一九四九年、大阪市生まれ。京都大学総合人間学部(言語文化論)、同大学院人間・環境学研究所(現代表現論)教授。主として今世紀ドイツの文学・思想にかかわっており、現在とりわけ、ベンヤミンの認識批判や言語哲学、歴史哲学、あるいはアドルノの美学理論、社会哲学などに関心をもっている。主な著書に『ベンヤミン 解説』(白水社、一九九七年)など。



1929年(37歳)のヴァルター・ベンヤミン
シャルロッテ・ヨーエル撮影
Benjaminiana (Giessen, Anabas Verlag, 1991) より

こう神学的に定式化されている。「ある力がおのれの方向をめざすことによって逆の力を促進することがあるように、世俗的秩序はメシアの国の到来を促進することができる。世俗的なものはメシアの国のカテゴリーではないとしても、これが近づいていることを示す最適のカテゴリーでもある。なぜなら、この世のものはすべて、幸福のなかに自らの破滅を求めているからだ」『神学的・政治的断章』。世界は滅びに向かうほど救済へのポテンシャルを強め、それゆえ決定的な破局においてこそ、逆に「原・状・回・復」(同)へのチャンスが存在する。もちろん、ベンヤミンにとってこの「原状回復」は、世界の破れ目の修復といった生半可なものとは違って、「最後の審判」ないし「万物復興」^{アポカスタシス}、すなわち完膚なき破壊の上に成り立つ新たな再生として、過去の全体をも含めた一切のものの救済という、この上なくラディカルな社会革命を意味している。「かつて生じたことは何一つ、歴史から見ても意味なものとはみなされてはならない。人類は救済されてはじめてその過去を完全なたちで手にすることができる。……その日には、人類の生きた瞬間がすべて引き出して用いられるものとなる。これこそ最後の審判の日にはかならない」(『歴史の概念について』)。現実の破局のうちにこもる救済のポテンシャルを顕在化させ、逆転的にこうしたメシア的「原状回復」に結びつけること、それが多岐にわたるベンヤミンの思考を研ぎ澄ませ緊張させる原動力でもあった。

だが一口に「原状回復」といっても、何

か宗教的あるいは観念的なユートピアのごときを提示すればすむというわけではもちろんない。今さらのごとく聖書の樂園やユング的な集合的無意識などの類いを直接的に差し出したところで、何のインパクトも持ちえないどころか有害となるのが関の山だろう。遠く離れたどこかに何らかの理想状態を定立することが一九世紀までのユートピア思考の常套手段だったとするなら、二〇世紀は、マルクス主義的なそれも含めて、そうした素朴なユートピア思考の無効性ないし暴力性をいやというほど思い知らされている。それはベンヤミンも例外ではない。彼にとって「原状回復」とは、そうした伝統的ユートピア思考の形式を徹底して忌避しながら、今ここの生々しい現実と直接的にわたり合うなかに一つの確たる方向として浮かび上がる類いのものでなければならなかった。この困難な課題に因應するために彼がとったのは、世界と自己の首尾一貫性の破壊、生起するものの連続性の中断という方法であった。彼はこれをたとえば、思考の極みにおける「思考の停止」という言い方で表現している。「考えるということは、思考の運動のみならず、思考の停止をも含む。緊張の極みの局面においてふと思考が立ち止まるとき、そこにショックが生まれ、それが思考をモナドとして結晶させる。……この構造のなかに、生起するものを停止させるメシアの合図、抑圧された過去のための闘争における革命的チャンスの合図を認識するのだ」(『歴史の概念について』)。「思考の停止」とは、事象から「人間的あまりに人間的」(ニーチェ)

な意味を払拭した上で、死滅して空虚になったその事象にありつただけの緊張をもって向き合うことである。世の事象はすべて、恣意的な人間的意味づけのもとに疑似生命のごときを付与され、それによって人間社会もろとも破局の渦に巻き込まれている。それゆえ、それ以前の原状態なるものがあるとするなら、それは、この主観的意味付与をいったん停止させるなかに、謎の暗号として浮上してくるほかない。それはいわば思考の凝集点としての「モナド」であって、ベンヤミンはこの一瞬ひらめく謎のイメージのうちに、「原状回復」への突破口を見出そうとするのだ。アドルノの言い方を借りよう。「彼をとらえていたのは、化石となったもののなかに凝結している生命を目覚めさせることだけではなかった。彼は生きたものを、とつくに滅び去ったものとして観察することに魅了されていた。……重要なのは、総体としての市民社会を再構成することではなくて、それを自然的なもの、眩惑されたもの、散乱したものとしてルーベで拡大し観察することであった」(『ベンヤミンの特質』)。生きてうごめくものの疑似生命をいったん停止、排出させた上で、その残骸のなかに謎めいた生を呼び覚ますこと、それがベンヤミンの方法であり、したがって彼のいう原状態とは、確たる内容をそなえた理想状態などからはほど遠いものである。それは、ゲーテのいう「原植物」^{ウランツェ}のように、つねに現存しているがけつして現前化することがなく、あくまで解読という再構成によってのみ接近可能な内容なき謎の非実体にすぎない。彼はこ

うした原状態を、起源ないし発生と区別して「根源」と呼び、この「根源」なるものに未定のユートピアの可能性を託すことによって、ユートピア思考の壊滅した二〇世紀の現在に、その方向性だけでも残存させようとするのである。

やや大げさな言い方になるが、こうした異ユートピア志向は、ベンヤミンの思考にコペルニクスの転回とでも称すべき独自の方向をとらせることになった。それはすでに、思考の媒体としての言語についての独特の見方に顕著にうかがうことができる。彼にとつては、記号ないし概念としての意味伝達的な情報言語は、破局としての世界の進行を推し進めるだけの「あまりに人間的」なものであって、それはいったん破壊された上で「根源」に呼び戻され、最大限に謎をはらんだ意味凝集体へと再生されなければならぬ。この破壊と再生の作業は、強引な引用、文脈を無視した逐語的翻訳、中絶的、異化的なアフォーリズム、あるいは意味の無限の攪乱としてのアレゴリー的言語使用などの操作を通して実践可能とされる。たとえば引用についてはこう言われている。「引用文は語をもとの連関から引き離して破壊する。しかしまさにそれによって引用文は語を根源へと呼び戻す。語は新しいテキストのなかで、失っていた韻を取り戻し、響きを発しながら和音を奏でるのだ。……言語にとつては、破壊と根源という二つの領域が、引用文において立証され、この二つの領域が浸透し合う引用文において言語は完全なものとなる。引用文のなかに映り出るのは、すべての語を意味という

牧歌的な連関の眠りから目覚めさせ、神の創造の書における激動と化さしめたあの天使の言葉である」(『カール・クラウス』)。

原言語としてのこの「天使の言葉」は、伝達的な意味を払拭されていることによって、逆にある種の固有名のように意味の無限の充溢の可能性を秘めた創造的言葉であり、その意味で「言語がまだ認識的な意味のためにおのれの命名の品格を失っていない状態における原・聴取」(『ドイツ悲劇の根源』)とも説明されている。ベンヤミンはこの原言語を、バベルの言語混乱以降の世界ではもはや完全には奪回不可能であるとしても、現実のあらゆる言語が浸透し合い協同し合って接近すべき方向としての極点として掲げ(それは「純粹言語」と呼ばれる)、多数言語の積分のうちにこの「純粹言語」を響きださせることに「翻訳者の使命」を見る。その要請は、言語の崩壊状況のなかでのラディカルな言語革命に向けられたもののように響く。「翻訳の言語は意味に対して自由であつてよいし、自由でなければならぬ。翻訳の言語は原作の意味志向を再現として響かせるのではない。翻訳作品から言語補完への大いなる憧れが語りだされているということが、逐語性によって保証される忠実性のもつ意味なのである。真の翻訳は、強められた純粹言語の光をより豊かに原作の上に投げ返すのだ」(『翻訳者の使命』)。この言葉は、おのれの破局の姿を見つめ直すことなくますます閉鎖的に情報伝達の技術を膨れ上がらせてゆく現在のわれわれのコンピュター社会、およびそれに合わせてますます順応の度を

強めてゆくわれわれの情報处理的な思考様式に対して、まさに根底からの転換を迫っているとは言えないだろうか。

だがベンヤミンが思考のコペルニクスの転回なるものをもつとはなばなしく展開したのは、何よりも歴史の領域においてである。彼がそこで提唱するのは、言語の場合に似て、現在の支配的趨勢に無意識に感情移入する歴史家の偏った主観によって捏造的につづられてきた意味連続体(意味伝達の言語)としての歴史(彼に言わせればこれが近代の歴史主義の本質に他ならない)のなかで、歪められ地下の忘却の闇へと押しやられているもろもろの事象を、中断的追想という発掘作業を通してその似非連続性の桎梏から解き放つことによって、それに本来の生命と輝きを奪回してやることであつた。こうして奪回された事象には、ちようど原言語がそうであつたように、破局へと驀進してゆく列車を緊急停止させるような鮮烈な認識がはらまれているかもしれない。「埋もれた過去に近づこうとする者は、発掘する者のようにふるまわねばならぬ。それが真の追想であり、そこでのとるべき態度なのだ。……歴史的事実というものは成層ないし地層にすぎず、地中に潜む真に価値あるものをそこから掘り出すにはきわめて注意深い探索が必要である。こうして発掘されたもろもろのイメージは、かつてのあらゆる連関から解き放たれて、収集家の陳列室に並ぶ破片やトルソのように、のちの認識のための醒めた部屋に貴重なものとして保管されるのだ」(『ベルリン年代記』)。桎梏としての地層の奥深くから

発掘されて孤立のうちに謎めいた認識の輝きを発しているこれら貴重な破片や断片はしばしば、原言語ならぬ「原史」と呼ばれる。「原史」とは、歴史主義の網の目から漏れ落ちていった屑であり、「歴史に最初からつきまといっているすべての時宜をえないこと、痛ましいこと、失敗したこと」(『ドイツ悲劇の根源』、ないしは、これら痛ましいものをその時その時に支えていた砕け散った願望のことである。ベンヤミンは屑拾いとして、歴史の表面から抜け落ちていったこれらのボロ屑を、緊張した中断的追想を通して現在へと手繰り寄せようとする。「原史」には、夢の眠りのなかでひたすら破局に向かう歴史を根底から再生させるかもしれない救済のポテンシャルが秘められているからだ。彼が歴史の領域でもくろむ決定的なことは、こうした「原史」を危機的な現在に甦らせ、これを現在と瞬間的にシヨートさせることによって、過去もろとも現在を怠惰な眠りから目覚めさせることであつた。この現在を覚醒させる技法を、彼は自ら強いアクセントをこめて「歴史観におけるコペルニクスの転回」と呼んだ。「これまでではへかつてあつたこと」が固定点とされ、現在は手探りしながら認識をこの固定点へと導こうと努めているとみなされてきたが、今やこの関係は逆転され、へかつてあつたこと^①が弁証法的転回^②の場となり、目覚めた意識が突然出現する場となる。これが歴史観のコペルニクスの転回というものである。……歴史学の新たな弁証法的方法是、現在を目覚めた世界として経験するための技法であつて、われわ

れがへかつてあつたこと^①と呼んでいる夢はじつはこの目覚めた世界とかかわっている。夢を追想するかたちでへかつてあつたこと^①を経験すること！ 追想と目覚めとは緊密にかかわっている。目覚めこそ想起の弁証法的、コペルニクスの転回なのだ」(『パサージュ論』)。膨大な未完の断片におわつた『パサージュ論』は、そうした意味で「一九世紀の原史」を衝撃的に現在に甦らせる試みであり、梗概(『パリ——一九世紀の首都』)によればそれは、パサージュが出現しはじめた産業資本主義の興隆期のパリにおいて、資本と新しい技術によって触発された人々の気ままな幸福の願望が、ますます進展してくる圧倒的な商品経済の支配が産み出す万博やファッションなどの目も緩なるファンタスマゴリー(幻灯)に吸収されて潰えてゆき、ついにはボードレールの孤獨な反逆やパリ・コミュニケーションの絶望的なバリケード闘争へといたるさまをモントージュしながら、「一九世紀の原史」

としてのこの挫折した願望を現在と革命的にシヨートさせ、現在に認識と希望を呼び覚まそうとするものとして構想されている。——「原史」であれ原言語であれ、謎としての現状のうちに、進行中の破局を逆転させ「現状回復」への方向を指し示す革命的契機を探り当てること、それがベンヤミンの思考の核をつくるものであつた。現在の世界のありようを先取りに推進することに血道をあげるのではなく、これをラディカルに批判し見詰め直そうとする営為をかりに「現代思想」とでも呼ぶなら、二〇世紀もいよいよどんづまりに來た現在、もはや「一九世紀の原史」ならぬ、二〇世紀後期資本主義ないし世界資本主義(?)の「原史」の探求こそが焦眉の急となつているとはいえ、こうしたベンヤミンの「現状回復」の思考も、まさにそのような「現代思想」の一つの典型として、あらためてアクチュアルな意味をもって甦ってはこないだろうか。



パサージュ・ド・ボンソー
ジェルメーヌ・クルル撮影

公共性の逆説

大澤真幸

MASACHI OOSAWA



大澤真幸（おおさわ まさち）
一九五八年、長野県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。京都大学大学院人間・環境学研究科助教授。主な著書に「身体の比較社会学Ⅰ・Ⅱ」（勁草書房）「意味と他者性」（勁草書房）「電子メディア論」（新曜社）「虚構時代の果て——オウムと世界最終戦争」（ちくま書房）「恋愛の不可能性について」（春秋社）「戦後の思想空間」（ちくま新書）「行為の代数学」（青土社）「増補新版」『不気味なもの』の政治学」（新書館）などがある。

私は、一九九八年夏から翌年の夏までのおよそ一年間、アメリカのサンディエゴで生活した。その間に見聞した最も衝撃的な社会的事件、アメリカ国民にとっても最も重大だった国内の事件は、コロラド州リトルトンで起きたスクール・シューティングであった。九九年四月二〇日の昼頃、コロンバン高校の二人の男子生徒が、突然校内で銃を乱射し、教師一人を含む一三人を射殺した。直後に犯人二人は自殺したので、結局、死者は一人であった。犯行の動機も原因も、よくわからなかった。確実なことは、ただ、彼等が「トレンチコート・マフィア」なる、ヒトラー崇拜者の集団に所属していた、ということだけである。四月二〇日はヒトラーの誕生日だった。

これは、たいへん不可解な事件だったが、まさにその不可解さにおいて、われわれ日本人には、既視感を与えるものがあつた。というのも、この事件は、基本的には、九〇年代に入ってから日本でも何度か見られた、若者たちによる不思議な事件と非常に類似していたからだ。つまり、この事件がオウム事件や酒鬼薔薇事件とよく似ている、ということに気づくのに、特別な洞察力はいらなかった。おそらく、リトルトンの事件と東京や神戸で起きた事件との間には、

何の影響関係もなかっただろう。それにもかかわらず、日米のほぼ同一世代に属する若者が引き起こした諸事件が犯罪の同じカテゴリーに属しているということは、日米両社会が同一の困難に直面しているということと、両者が言わば地続きのひとつの社会だということを示唆しているだろう。この事件は、資本主義の密度の高いコミュニケーションに全地球が覆われている現在、日本とアメリカを分離された二つの共同体として概念化する見方は適切性を欠いており、両者を、若者たちのごく「個人的」な苦境すらも類似してしまうほどに緊密に結びついた、同じひとつの地球規模の社会の二つの部分として、捉えなくてはならない、ということを教えているのだ。

リトルトンという小さな町で起こった、アメリカ史上最悪のスクール・シューティングに、アメリカの国民は大きなショックを受けたようだ。このことは、事件後、何週間にもわたって、——日本でもオウム事件や酒鬼薔薇事件の後にそうであったように——、マスメディアが、この事件をめぐって洪水のように報道を流し続けた、という事実によく示されている。この事件は、私が滞米中に最も注目された国内の事件だと述べたが、ちょうど同じころ、最も注目

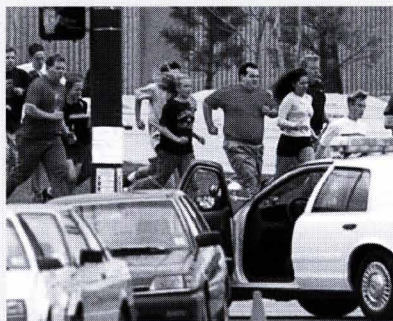
された国際的な出来事も進行中であつた。アメリカ中心のNATO軍による、ユーゴスラヴィア空爆である。それゆえ、全国規模のマスメディアは、主要なレポーターをリトルトンとコソボに派遣し、一日中、両者を、そして両者のみを報道しつづけた。二つの地域をひっきりなしに往復する、CNNやMSNBCの映像を眺めた者は、本来は無関係であつた二つの出来事が、不思議な仕方で符合しているかのような印象をもたざるをえなかっただろう。

ところで、私はリトルトンの事件がもたらす既視感から、日米の基本的な同一性を推定した。だが、事件後の報道は、やがてまったく反対の印象をも、つまり日米がまったく異なる、ほとんど相反するほど異なる伝統を背景にした異質な共同体である、という印象をもたらすこととなった。事件そのものは類似しているが、事件後の報道や討論が——その内容というよりもそれを支える態度に関して——日本とアメリカではまったく対照的だったからだ。簡単に言えば、アメリカでの議論は、日本でのそれと比べて、冷静で、客観的で、ある種の節度に貫かれていた。たとえば、確かに、酒鬼薔薇事件の後の日本と同じように、アメリカでも親の責任を主題とする討論が何

度も行われたのだが、しかし、アメリカでは、誰一人として、これらの犯人の特定の親を個人的に攻撃する者はいなかった。酒鬼薔薇聖徒の親に差し向けられたような、あの感情的な叫びに似た攻撃は、リトルトンの報道には現れなかった。

日米のこうした印象の相異をもたす要因を、多少、理論的な語で表現すれば、次のようになるだろう。アメリカの報道に冷静な客観性を与えているのは、犯罪者へのある種の「寛容」である。日本でも、アメリカでも、犯行が、ほとんど疑問の余地のない「悪」であることへの認識は共有されている。その上で、アメリカにあつては、犯行や犯罪が批判され、否定される場合であつても、なお、その否定の身振りの前提として——まさに否定や批判が有意味でありうるための前提として——、否定され批判されるべき者が、最小限、肯定されている——その存在そのものが許容されている——のである。このように、否定が、肯定を——存在への承認を——前提にしている状態を、われわれは「寛容」と呼ぶことができるだろう。

こうした寛容の極限的な事例を、犠牲者の一人レイチェル・スコットの両親の、NBCのレポーターに対する応答のうちに、見ることが出来る。それは、滞米中私がテレビで見たシーンの中では、最も感動的な瞬間だった。インタヴューは、事件から一週間ほど経たときに開かれた追悼集会の中で偶発的に行われたものと思われる。レポーターが、レイチェルの母親に、「あなた方は、犯人の親に責任があつたと思います



1999年4月20日にコロラド州リトルトンで起きた高校銃撃事件で報道された写真
（「ニューヨークタイムズ」のホームページより）

か」と問うたところ、母親は、断定的に「ノー」と答えたあと、「それならばあなた方は犯人の両親を許すのですか」というレポーターの畳みかけるような挑発的問いに対して、さらに、「私たちは、犯人その人さえも許している」と言い切ったのである。その上、父親がその話を受けて、「もしレイチェルが生きていれば、彼女こそ、最初に犯人を許したにちがいない」と付け加えた。彼はまた、こうも言った、「われわれは犯人の両親よりははるかに幸せである」と。

ちょうど同じ頃、日本では、地域住民たちによる、オウム真理教信者への排斥運動が高まりを見せていた。自治体は、信者の住民票の受け取りを拒否し、その子弟の小

学校入学を拒否したのであつた。それは、明らかな憲法違反だったが、マスメディアの報道も、住民たちに同情的であつた。少なくとも誰もオウムの味方はしなかった。

＊

リトルトンの事件とその周辺で進行していた出来事を簡単に概観してみたのは、ここに、今日の思想上の課題が、独特な布置のもとに結集しているからである。

犯行や犯人に対する態度の日米間の相異を、とりあえず、普遍的な「公共性」の概念の有無によって説明することができるだろう。日本社会が現在のオウム信者に対して示している攻撃性は、日本の前近代的な村落共同体における「村八分」が、国民全体の水準で発揮されたものだ、と解釈する

ことができる。それは、共同体の規範＝善を受容しない者に対する、非常に単純な排除である。それに対して、公共性とは、複数の特殊な（私的な）善の間の公正な共存を支持する原理である。それは、異なる善の特殊構想に対する寛容や承認を要請する。ハンナ・アーレントによれば、西欧における「公共空間」の起源には、古代ギリシアのポリスの政治体験が、すなわち複数の家父長的な共同体（オイコス）の平等な参加によって特徴づけられていた政治の空間があった。古代ギリシアのポリスでは、それぞれの家の首長が平等な資格で参加することができる直接民主政によって政治的な意志決定がなされていた。公共性は、各オイコスの私的な空間に対立する、ポリスの政治空間の原理である。それゆえ、古代ギリシアのポリスは二つの原理を内部に抱えている。このことをよく示しているのが、ソフォクレスの『アンティゴネー』である。ヘーゲルによれば、この劇において、新王クレオンがポリスの公共性を代表しているとすれば、クレオンによって禁じられた、反逆者である兄の埋葬に、悪魔的な激しさをもって固執するアンティゴネーが、オイコスの私的空間を代表している、と解釈することができる。

アーレントは、このように、西欧における公共性の起源を、ギリシアのポリスの経験に求めているが、たとえば、リトルトンの事件におけるレイチエルの両親の態度が暗示していることは、西欧のキリスト教——とりわけ近代初期における原理主義的なキリスト教の分派（プロテスタント）

——が、公共性のもう一つの源流であったかもしれない、ということだ。いずれにせよ、ユルゲン・ハーバーマスは、一八世紀の啓蒙期の体験に、市民的な公共性の原点を求めている。ハーバーマスによれば、近代とは、啓蒙の勢力を未だに引き出しつつてはいない「未完のプロジェクト」である。このプロジェクトは、公共性を、それが本来含意している完全な普遍性において実現したときに、完成する、というのである。さまざまな善の可能な限り多様な共存を許容する、普遍的な公共性を、制度が立脚すべき「正義」の原理と見なしている点で、ロールズのようなリベラリストも、ハーバーマスと同じ指向性を共有している、と言えるだろう。

オウム信者への過剰とも思える排除の運動をその内部に生み出している日本社会にとつては、それゆえ、こうした公共性を思想的に確立し、かつそれを社会構造上の条件によって保証することが、緊要な課題だということになるのかもしれない。

だが、現代の先端的な思想によって、住民によるオウムの排除を——正当化とまではいわないが——いたし方のないこととして消極的に容認することも、できないわけではない。たとえば、マイケル・サンデル、マイケル・ウォルツァー、チャールズ・テイラー等コミュニタリアン（共同体論者）ならば、オウムと住民の対立を避けがたいものとみなすにちがいない。コミュニタリアニズムを動機づけている基本的な前提は、さまざまな特殊な善の公平な共存を許容する普遍的な公共性の水準は存在しえない、

という認識である。コミュニタリアンの主張によれば、「自我」は、共同体の伝統のうち埋め込まれており、そこで培われてきた共通善——公共性の立場からすれば私的な善——を受け入れている。しかし、この特殊な善を、他者にとつても妥当なものとして説得する際に依拠すべき、公共的な正義は存在しない。こうした理解に立脚すれば、一般の住民とオウムは、たがいに通約しえない特殊な善の構想をもって対峙しあっている、と見なすこともできよう。彼らに可能な唯一の共存の方法は、相互に隔離された並存以外にはありえないことになろう。

＊

それゆえ、もしオウムと住民の間に、コミュニケーションを伴う実質的な共存を確立しようとすれば、日本の共同体の閉鎖性に、西欧の——とりわけアメリカ的なもの——の内に代表されている——公共性を対置し、後者の視点から前者を克服するほかない、ということになる。だが、西欧が構築した公共性に、過大な信頼をおくべきではない。このことをあからさまに示したのが、NATOによるユーゴスラヴィア空爆である。

この度の空爆は、内戦によって主権を事実上失っている国家への介入ではなく、完全に主権を維持している国家への最初の介入であった。つまり、介入は、国民国家の共同性を超えた、公共的な正義の名において——つまり人道の名において——正当化され、支持されたのであった。だが、少しばかり冷静に情勢の全体を概観するならば、

ミロシエヴィッチが悪の権化であるとする判断は、西欧を中心におくグローバルな資本の利益に奉仕するものであることも、明らかではないか。つまり、空爆は、グローバルな資本主義の秩序を擁護するものであったことも確かではないか。

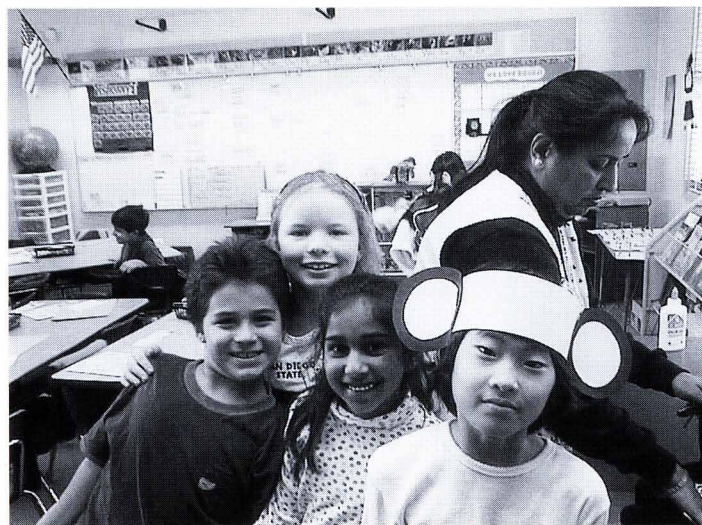
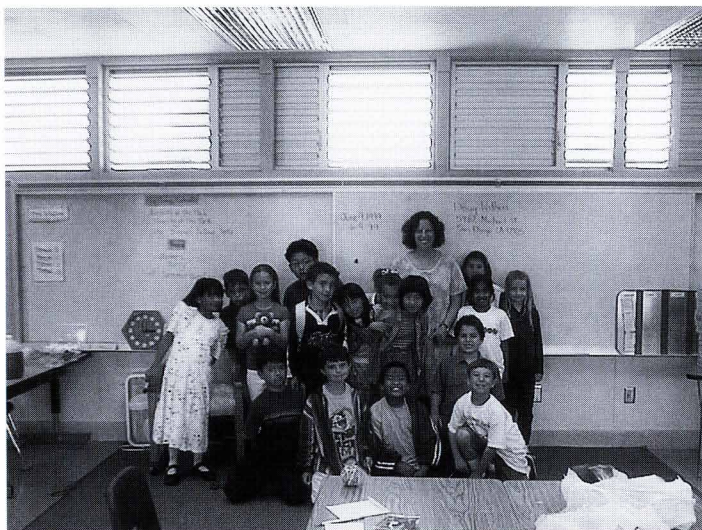
すると、われわれは次のような事態に遭遇していることになる。公共性は、本来、規範・善の多様性を可能なかぎり包括する普遍性を指向している。ところが、実際には、その「公共性」が、ある具体的に限定された特殊性の水準で——つまり西欧を中心とする資本主義の秩序を正当化する水準で——停止してしまい、それ以上は包括化しない容量の限界に到達してしまっているように見えるのだ。こうした結果に終わるのは、現在の「公共性」が、啓蒙の「未完のプロジェクト」だからではない。つまり、目下のところ実際には限定されている「公共性」が、やがて、その概念の本来性の水準にまで高められ、真に不偏不党の完成された普遍性に到達することになるだろう、と考えてはならない。というのも、ユーゴ空爆を公共的な正義の名において支持した論者こそ、まさに「未完のプロジェクト」の唱導者ハーバーマスや、ピエール・ブルデューなど、近代的な公共性を擁護する良心的知識人たちだったのだから。それゆえ、むしろ、われわれはこう考えるべきである。普遍的とされる公共性は、ただ、ある具体的な特殊性に限定された形式においてしか、実現しないのだ、と。未完の公共性（ある具体的な特殊性の水準で停止してしまった公共性）を離れたならば、われわれは公共

性そのものを失うのである。

こうした認識をベースにすれば、われわれは、今度はポストモダニストの主張の方に話題を自然に移行させることができる。たとえばリオタールは、ポストモダニティを「大きな物語」の終焉によって特徴づけている。大きな物語とは、普遍的な公共性を有する正義や理念を前提にした物語である。大きな物語が失われたとすれば、そこに残るのは、小さな物語を奉ずる細々とした言語ゲームの分散である。つまり、異なる規範、異なる善によって互いに分割された多様な局所的な共同体の集合のみが残され、それらの集合を統一化する全域的な言語ゲームの水準が失われている、というわけだ。こうした世界観は、デリダの影響を

受けた脱構築主義者の了解ともよく整合するにちがいない。もし普遍的な公共性が特殊な共同性や私性へと収束しているのだとすれば、理論は、まさにこの収束の回路を暴くことによって、公共性を装う言説を「脱構築」することができるのだから。

こうしたポストモダニズムの主張の実践的な含意は何か。それは、多文化主義である。多文化主義は、多数多様な文化や共同体が全体化されず、基本的には相互に分離された形式で並存している状態を、望ましい社会状態として肯定する。ここで、われわれは気づかざるをえない。ポストモダンの左翼が支持するであろう多文化主義とは、前近代以来の共同体の伝統を擁護するコミュニティアンによって肯定されるよう



多文化主義なアメリカの小学校

な社会状態とよく類似している、ということ。実際、コミュニティアニズムは、多文化主義の哲学的な基礎として、しばしば利用されてきた。要するに、近代性を突き抜けた後に現れてくるポストモダンの相貌は、近代性に先立つ前近代の相貌と少しばかり似ているのである。

なぜ、こうしたメビウスの帯を辿るような反転が生ずるのか。そのからくりは、ほぼ次のように説明することができる。少し前に述べたように、普遍的な公共性は、実際には、つねに、特殊な具体的共同性に仮託するような形でしか——つまり「未完のプロジェクト」としてしか——実現しない。公共性の名のもとで、特定の共同体が——たとえばミロシエヴィッチの体制が——恣意的に排除されることがあるのは、このためである。そうであるとすれば、公共的な正義を積極的に主張することを放棄してしまい、さまざまな善の構想や規範のもとに置かれた多くの共同体を、相互の干渉を極小化しつつ、それぞれに適合的な場所が存在することを許容する方が、より一層、真の公共性の理念にかなっている、ということになるだろう。これが多文化主義である。この意味で、ポストモダンの多文化主義は、近代主義者の公共性の理念を放棄したのではなく、それを否定的な形式で保持しているのだということができる。ここに言語行為論の視角を適用すれば、事態は、発話された内容と発話が帰属するポジションとの間の不一致として記述できる。すなわち、発話された内容からすると、共同体ごとに異なる特殊な善がシニカルに肯

定されているのだが、そうした内容それ自身が、普遍的な公共性に対して素朴に信頼を置いている立場から発せられているのである。それは、発話された内容に着眼すれば、前近代的な伝統主義者だが、発話が帰属する立場に注目してみれば、近代を通り越したポストモダニストとして現れるだろう。

それゆえ、ポストモダンの多文化主義もまた、結局は、公共的な正義を直接に掲げる近代主義の困難を引き継ぐことになる。どのような普遍的な公共性も、特殊な具体性を身にまとわなくては実効性をもたず、そこに包括されえない他者への過激な排除を帰結せざるをえないという逆説を、である。厳密に言えば、ポストモダニストは、さらに性質が悪い。というのも、彼らは、この逆説を隠そうとはしていないからである。初めから見えてしまっていることほど強力な秘密はない。そういう秘密は、暴露してしまうことで失効させることができないのだ。

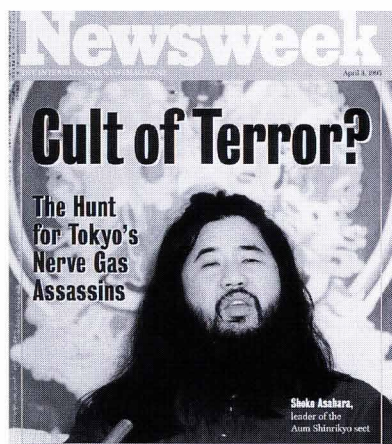
だから、ポストモダンな状況のもとでは、公共性の逆説は、増幅されてその姿を現わす。リトルトンのスクール・シューティングに代表される「憎悪犯罪」を、そうした逆説の現象形態として理解することはできないか。アメリカでは、今日、憎悪犯罪の名のもとで分類される犯罪が頻発している。この名に反して、この種の犯罪は、加害者の被害者に対する個人的な憎悪とは何の関係もない。憎悪は、しばしば人種主義的な表現をとり、非合理的で、被害者の視点からするとまったく言われのないものである。

「ユダヤ人」を敵視したオウムへのテロもまた、憎悪犯罪の一種と見なされるだろう。

*

だから、リトルトンの事件と、それと並行していた他の諸事件は、現代思想の三つの可能な立場とその困難を映し出していたのである。第一に、前近代的な伝統主義的な態度——たとえば日本の地域住民の村八分的な手法——を容認する、コミュニティアンのような立場がある。第二に、普遍的な公共性への古典的な信頼を基礎におく近代主義者がいる。それは、レイチェルの両親に見られるような、人間の最も崇高な態度にもつながっているが、しかし、ユーゴ空爆に見るように、突然、限界につきあたる。そして第三に、公共性を否認することにおいて保持する、ポストモダニストがいる。だが、そこに伏在している逆説は、憎悪犯罪のような絶望的なやり方で露出しているかもしれない。

それならば、今日のわれわれの思想と実践の真の課題は何か。それは次のような問いの形式を取るだろう。公共性が述べたよ



ニューズウィーク April 3, 1995 より

うな悲劇的な逆説を随伴しているのだとすれば、こうした逆説を乗り越えた、もう一つの別の「公共性」はありうるのか。この点について、最後に一言しておこう。

オウムの犯罪は、典型的な憎悪犯罪であり、彼らは、その敵をユダヤ人と呼んでいたと述べた。だが、その「ユダヤ人」を人種や民族についての通常のカテゴリとして理解しても意味はない。たとえば、彼らにとつては、普通の日本人はしばしばユダヤ人（の手先）なのだから。オウム信者の敵についての感覚をていねいに観察してみると、彼らは、敵と見なした他者に対して非常に独特な見方をしていたことがわかる。たとえば、出家信者たちは異様なまでにスパイを恐れていた。彼らの説明によると、敵は教団施設に潜入して、内部から毒ガスを噴霧していたのだ。要するに、敵なる他者は、彼方にいるのではなく——たとえば冷戦期の敵のように壁の向こう側にいるのではなく——、あらんかぎりすぐ近くにいるのだ。敵なる他者は、彼らの共同体に在しており、もつとはっきり言ってしまうば、本当は彼ら自身なのである。

こんな奇妙な倒錯が生ずるのは、敵そのものが、オウムの信仰に信憑性を与えている社会的なメカニズムと同じメカニズムの産物だからだ。このメカニズムを、ここでは、「公共性」の概念が辿る展開・転回として抉出したのであった。ポストモダンのに転回した公共性は、必然的に、普遍的であるはずの公共性のもとに包括されえない、それゆえ存在するべきではない「特異性」——特異的な他者——を生み出してしまふ

その特異性に敵としての相貌が与えられたのである。そうした敵こそが、徹底した排除の標的になるのだが、実はこの敵は、これを排除しようとする者たちを駆動しているメカニズムから内発的に生み出されたものなので、決して、完全には排除されない。

だが、公共性の内に統合されたり、表象されたりしない、こうした特異性の現存にこそ、公共性についての真実があるのではないか。それは普遍的な公共性が不可能であるということ、そのことを表現しているからだ。そうであるとすれば、強迫的に自身の内部に現れる特異性を、敵として外部に投射して、排除するのではなく、まったく逆に、まさに、自分自身が内属する包括的・普遍的な社会性の具現として扱うこと、このことだけが、真の〈公共性〉を保証する、ということになるのではないか。普遍的な公共性が不可能だということのみが、普遍的・公共的に承認されうる真実だからだ。このやり方は、多文化主義者のように、多様な他者たちを、包括的な社会のそれぞれの局所に割り振る方法とは違う。ここで提案しているのは、公共的な表現に頑固に抵抗する徹底的に逸脱的な特異性を、社会の包括的な全体と同一視することである。そうだとすれば、ポリスの公共性の中で位置づけられえない、特異で私的な欲望にいつまでも固執しつづけたアンティゴネーにこそ、〈公共性〉に連なる態度のヒントが隠れていたのかもしれない、と考えることもできるだろう。

スローガンとジョーク
のかなたに

三原 弟平 (京都大学総合人間学部・同大学院人間・環境学専攻教授)

昏迷のさなかにあつて発せられた一言が、すべての展開を可能にする。そのような言葉は、状況の逼迫性と、そのなかで呻吟する人間の思いを最もよく救ひあげている言葉なのだらう。幕末に右往左往している人々から、「尊皇攘夷」、さらに「富国強兵」という言葉が生みだされ、それは「時の声」としての力をもち、ついさきほど「えじやないか」と踊りあつていた人々も、ハーメルンの鼠さながら、引きさらわれていくのだ。これはしかし、スローガンとしての言葉。多くの思つている言葉ではない。

金縛りにあつた状況を、上からではなくみずから解くのに、フモールとしての言葉がある。中国のミサイルに「労働一号」「労働二号」という名がつけられているというニュースが流れたとき、対抗する日本のそれには「過労死一号」「過労死二号」と名づけられているというジョークがあつたが、状況のどうしようもなさを表現しながら、われわれのなかで煙りつづけているものを解く働きを、たしかにこれらの言葉は含んでいる。しかし、解かれた思いはどこに向うのか。フモールとしての言葉は方向を指さないのだ。

レーカンなどをみると、アメリカではスピーチの合間にうまくジョークを飛ばせることが、上に立つものの資格のひとつとなっているようだ。しかし、人心収攬という結果だけをあがめたてまつたようなジョークの尊重は、フモールとしての言葉さえも非権力者たちから収奪してしまおうという意図のあらわれか。

「えじゃないか」のアパシーではなく「過労死一号、二号」を越え、混沌のなかにあつて、展開を可能にする言葉を自分たちのなかから見つけるかどうか、いずれにしてもぼくらの命運はかかっている。

インドの職人

金谷美和

MIWA KANETANI



はじめに

私はインドの西部、パキスタンと国境を接するカッチ地方で、染色を生業とする職人カーストと彼らの作る布の調査をしている。彼らはイスラーム教徒で、カトリ（Khatu）と呼ばれる人々である。従来のインドの人類学的研究においては、職人カーストはいわゆる「ジャジマーニー関係」のなかで農業者にもはやサービスを提供し、支払いとして農作物を受け取る存在として書かれてきた。つまり、農村という閉じた狭い社会において、自給自足的な経済活動を担う一員として捉えられてきたのである。たしかに彼らは、特定の顧客に特定のデザインに染め柄を提供するというような、布の狭い需要供給の関係において仕事をしている。しかし同時に、職人たちは、私が先行研究から思い描いていた職人像を裏切るような、進取の気性に富んだ商人でもあることがわかってきた。

カッチ地方は、インドの首都デリーからはまったくの僻地である。デリーから夜行の急行列車で一七時間、それからさらに夜行バスで一晩かけて行き着く先がカッチの首都ブージである。砂漠のなかに点在する村々を訪れるためには、ブージからおんぼろバスでたがた道を砂埃にまみれながら何時間も座っていなければならない。陸路

からみると大変不便な土地である。しかし、カッチ地方は南と西はアラビア海に面していて、少なくとも一四世紀頃から海路を用いた交易の要衝に当たっており、また西暦一八〇〇年頃からはオマーンや東アフリカに移民を送り出していた地であった。移民先でも伝統衣装を求める人々のために、カトリはそれらの地域に布を輸出していたのであった。現在でも職人たちが広い交易圏を軽々と行き来して商売をしている様子に、最初私は驚いたが、それは不思議でも何でもなかったのである。

「月光」という名の絞り染め

さて、そのカトリがどのような布を染めているのかを紹介したい。カトリは、代々近隣に住む自分たちや他のコミュニティの衣服を染めるのを仕事としてきた。それぞれのコミュニティは独自のデザインをもつ衣服を着ており、衣服はいわば指標として、着る人がどのコミュニティに属しているか、既婚か未婚か、夫は生存しているかなど社会的ステータスを示すものとして機能している。また、婚姻儀礼の際の重要な贈答品として布は機能している。カトリは木版型染めやろうけつ染めも行いが、ことにカッチ地方で有名なのは絞り染め（バンダニ bandhani）である。

金谷美和（かねたに みわ）
一九六九年、奈良県生まれ。京都大学大学院人間・環境学
研究科博士後期課程を経て、現在学術振興会特別研究員。
専門は文化人類学。インドの職人カーストの社会組織、経
済的ネットワークについての博士論文を準備中。物を作る、
交換する、使うなど人と物の諸関係の解明を目指す。

カトリの染める布はどれもすばらしいが、私が最も惹かれているのはチャンドロコニ（月光）と呼ばれる布だ。今のようサリが普及する以前には、ヒンドゥー教徒もイスラーム教徒も、花嫁は体をすっぽりと覆うほどの大きな布を頭から被って結婚するのが習わしであった。今ではすっかりファッションが変わってしまったが、昔はカトリの花嫁は、チャンドロコニという黒地に赤の総絞りの布を被ってお嫁に行つたそうだ。

アーメダバードの骨董屋で見せてもらったチャンドロコニは、すばらしかった。その店は絞り染めのとても良いコレクションを持っており、私が一番良いものを見せてくれと頼むと、包みを解いて次々と私の目の前に絞り染めを広げてくれた。そのなかの一枚は、地がぬめつとした光るような黒色をし、模様を作る絞りはくつきりとしていて、カッチの職人が「カンコロワリ（黒光りする）」と形容するまさに逸品であった。見てみると背中がぞくぞくとするような不思議な力を持った布であった。色もすばらしいが、何よりも絞りがすばらしい。どうして人はこのような美しいものを作ることができるのだろうか、という問いが私の頭をよぎり、私は調査の傍ら、この問いを時々取り出しては考えてみるようになった。幸運にも、職人に直接話を聞く機会がやつ

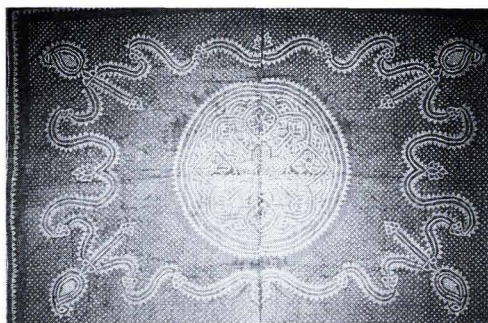


図1 チャンドロコニ（月光）という名の絞り染め。
50年前にカトリの花嫁が着用したもの



図2 絞り染めを被って顔を隠した、カトリの花嫁
（中央）。婚姻儀礼のニカの際に、書類にサイン
をしている



図3 新婚の花嫁（中央の2人）が絞り染めを着て、
親戚の挨拶回りをしているところ

（一）インドの社会集団の基本単位はカーストであるといわれ、結婚、食事、職業に関する厳格な規制をもっている。なかでも手工業に従事するカーストを職人カーストと呼ぶ。

（二）特定の顧客世帯との間で、慣習によって定められた種類、数量のものやサービスと報酬を定期的に授受する関係のこと。主に農村においては、土地所有者や自作農と、サービスカーストや職人カーストとの間に結ばれた関係である。

美しいものを作るのは誰か

てきた。

絞り染めの起源について、何人かの職人から同じ話を聞いた。カトリは絞り染めを知る前には、ただ模様のない布を染めているだけであつた。あるとき、食べ物を乞いにファキールがやってきて、カトリはそのファキールに食べ物をあげた。ファキールはイスラーム教徒の聖なる乞食とでも説明できる人たちで、人の与えるものを食べて生きている。そのファキールは、カトリの染めようとしていた布の端を何気なしに結んだ。カトリは知らずにその布を染めて、結び目をほどこしたところに模様を発見し、結び目を作ることから絞り染めの技術を発展させたのだという。

ある人間国宝の職人にも、その話を聞いてみた。彼はしばらく黙っていたが、

次のように言った。その話のことは知らないが、そのようなことはあつたかもしれない。人が何か新しいことを始めるときには、ひとりでそれが起こるのではなく、神によって誰かが送られる。そのときは、ファキールが神から送られてきて、絞り染めが始まったのだ。彼はとても腕の良い職人で、自分の五本の指を使っておこなう仕事である絞り染めを、本当の手仕事だと言つてとても誇りにしている。その彼でさえ、何か新しい技術を生み出す力に、人間の力を越えた存在をみている。

また、別の職人から同じような話を聞いた。その職人の父はとても腕の良い絞りの職人であつた。彼は一つ絞るたびに、神の名を一回唱えていた。一日に四百回唱えるとすると、一日に四百回神の名を唱えることになるし、それはとてもよいことだと言う。布を絞る作業は、根気と集中力のいる仕事である。カッチの村では、職人たちが戸口

に座って、一人黙々と絞っている姿が見られた。絞るごとに神の名を唱えることで、集中力を持続させることができたのである。うし、手のリズムを作ることでもできたのである。しかし何より、神に仕事を委ねることで、よい仕事ができると職人たちは考えていたのではないかと思う。

美しいものを作るのはもちろん人の手であるが、カッチの職人は、そこに人の手を越えた神を想定している。人間の創意工夫を職人たちは否定しているわけではない。ただ伝統に従って、昔のままに作っているわけでもない。先に述べたように、職人たちは商人でもあり、消費者の好みに合わせてデザインを変えてゆくしなやかさも持っている。しかし同時に、ものを作る態度にみられる謙虚さが私の心を打った。

ものの美しさは、人の心を捉える。私の調査の主目的は、職人カーストの社会組織や経済的ネットワーク、布の儀礼的役割の解明である。しかし同時に、なぜ人は美しいものを作ることができるのかということもつねに考えてゆきたいと思っている。元はといえば、人間の生活に不可欠な、布や器といったものの持つ美しさに惹かれて、もの作りの調査を始めたのであつた。その答えは、問うて得られるものではない。度重なる会話のなかで、ふと出てきた話のなかから、そのことについて考える糸口を教えてくれたカッチの職人たちに感謝したい。そして職人たちに話を聞くことを楽しみに、また私はフィールドに出かけるのである。

敦煌莫高窟調査記

北田裕行

HIROYUKI KITADA



八足の起源を求めて

私は一九九八年九月から十一月の三ヶ月間、朝日新聞社の朝日敦煌研究員派遣制度により敦煌莫高窟の調査をすることができた。調査の目的は壁画に描かれている机を観察することだった。

私は以前より八足と呼ばれる、現在でも神社の神事などで用いられている八本足の机の系譜に関心を抱いていた。八足は正倉院所蔵の多足几と呼ばれる机が祖形と考えられ、同様の机の部品は平城京跡からも出土している。ところが、敦煌莫高窟中の維摩經変と呼ばれる壁画にも、その正倉院所蔵の多足几に似た机があることに気づいた。維摩經変とは維摩経に説かれる、病気を装った維摩居士が文殊菩薩と問答する場面を表したものであるが、維摩が座っている床の前にその多足机が描かれている。近年莫高窟の壁画が広く出版されているが、まだ公表されていない窟も多い。維摩經変は『敦煌石窟内容総録』によると、榆林窟を含めて七十二窟の壁画に描かれているとされるが、実際に公開された写真で確認できたのは一六窟であった。未公開の分を含めて、ぜひとも自分で確認をしたいと思っていたので、この制度はまさしく渡りに船であった。

多足机の起源は古く、紀元前六〜七世紀

にまで遡る。中国では唐代以前には椅子を用いず、坐具上に平坐していたため、机の高さは低かった。背丈が高い多足机は初唐の維摩經変図で最初に見られる。なぜ突然背丈が高い机が登場したのであろうか。維摩詰が座っている高い床は仏教の講経や論議の儀式で用いられる高座を模したものであり、その前に置かれた高い多足机は高座の前机であると私は考える。

正倉院の多足几は、仏具として用いられていた唐代の机の形式が伝えられたのであろう。九世紀後半の文献には祭祀具として「八足」が見え、以後神祇用の八本足の机として定着し、現在に至ったと考えられる。

高座は四世紀初めには西域から来た僧が用いており、背丈が高い多足机の出現も仏教文化の伝播にその要因が求められよう。騎馬民族による椅子の普及も机の卓への発展の原因と考えられている。現在日本では神祇に用いられ、ともすれば日本独自のものと思われがちな八足も、その源流をたど



図1 栴檀寺石窟。ダムの影響で水位が上がり、劣化してきたため、保存修復工事を行っている

れば中国、そして遙か西域にまで由来するものであることがうかがえよう。

敦煌研究院での三ヶ月

蘭州に敦煌研究院の分院があり、九月と十一月にはそこで史韋湘先生や賀世哲先生ら、敦煌研究院の専門家を中心とする、一二人の敦煌研究の専門家による研修を受けさせていただくことができた。その間蘭州大学留学生という身分で蘭州大学敦煌研究所の鄭柄林教授のお世話になり、学生寮に宿泊した。蘭州滞在中、栴檀寺石窟や麦積山石窟を見学することもできた。

北田裕行（きただ ひろゆき）
一九六八年、大阪市生まれ。京都大学大学院人間・環境学
研究科博士後期課程に在籍中。考古資料を中心に古代東ア
ジアの宗教文化を考察したいと考えている。

(一)『中国石窟 敦煌莫高窟』一、五(平凡社・文物出版社)によるが、最近敦煌研究院編『敦煌石窟芸術』(江苏美術出版社)が出版されはじめ、窟ことにより詳しく壁画を見ることのできるようになった。

(二)彭金章・沙武田「敦煌莫高窟北区洞窟清理発掘簡報」『文物』一九九八年第一〇期。また北区洞窟の番号について王健軍・胡嶺「敦煌莫高窟北区洞窟新編号説明」『敦煌研究』一九九九年第二期が公表された。

蘭州から敦煌までは蘭州大学のジープで行き、途中で石窟寺院を見学した。中原から敦煌に至るルートは河西回廊と呼ばれ、古来より交通路として発達した道である。ジープは一直線の道路を走り、右手はゴビ砂漠で見渡すかぎりの地平線が続き、時折、道と並行して漢代の長城が見えた。左手には祁連山脈が延々と連なり、この山脈の山麓には多くの石窟がある。

まず武威で雷台漢墓、酒泉では文物管理处と交渉して金塔寺石窟を見学できた。最近できたという山中の道路を通ったが、道ができるまでは馬に乗って行っていたそうである。実際に見た人は研究者でもあまりいない。また嘉峪関では文殊山石窟、魏晋壁画墓、嘉峪関などを見学し、翌日には安西の西南にある榆林窟を見学することができた。ここは敦煌研究院の管轄で、研究員の人に案内してもらった。

莫高窟は一般の観光客にも一応開放されているが、敦煌研究院が決められた窟を案内するという形になっており、自分で窟を自由に見られるわけではない。また、後世の重修を大きく受けた窟や、その他保存状態の悪い窟は一般には公開されていない。しかし私たちはそのような窟も見学することができた。最終的には榆林窟や西千仏洞を含めて一〇〇窟以上の窟を見学でき、私が目的とした維摩経変図も、かなり実見することができた。そのなかでも特に初唐の第三三三窟の維摩経変は私にとって大きな発見であった。この窟は構造上全体写真が撮れず、公表されていなかったが、正倉院

所蔵の多足几と極似する机がそこにも描かれていたのである。

滞在中、敦煌石窟文物保护研究陈列中心主任の彭金章研究員に莫高窟北区洞窟の案内をしていただいた。莫高窟は大きく南区と北区に分けられ、一般に知られているのは南区である。北区は全長七〇〇mの断崖上に何段かにわたって蜂の巣のように掘られている。一九八八年から一九九五年にかけて敦煌研究院考古研究所によって発掘調査が進められ、昨年には概報も出た。正式な報告書も来年公刊されるそうである。これらの窟は僧が修行し、生活をしていた窟で、なかには修行僧の墓(瘞窟)もある。また漢文をはじめ西夏、ウイグルなど多種

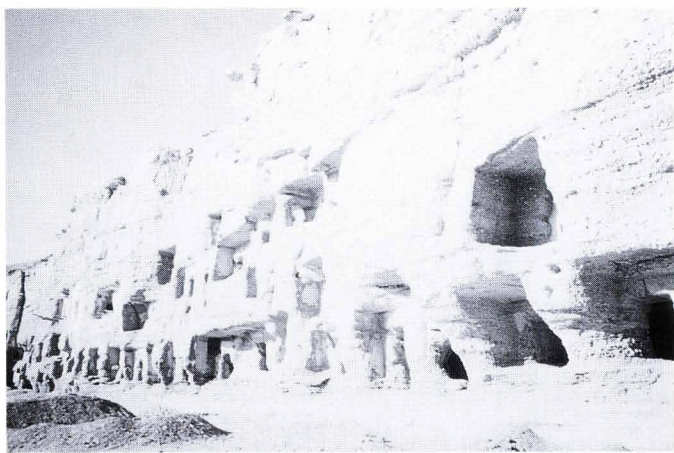


図2 莫高窟北区 手前の窟が浸食されている様子がわかる

の文字史料、またペルシャ銀貨や唐・宋・西夏の銭貨、木俑や埴仏など、多くの重要な遺物も出土している。しかし北区は保存整備が遅れており、窟の前を流れている川の氾濫のため、最下部の窟が大きく壊されている。早急な対策が必要に思われた。

十一月に入り敦煌を離れて蘭州に戻る頃には、樊錦詩院長は忙しいなか、質問の時間を設けてくださり、私たちのいくつかの質問に答えていただいた。その後、樊錦詩院長、彭金章氏らと昼食会も催していただいた。敦煌の冬は厳しく、研究員の多くは蘭州で冬を過ごす。観光客は減り、次第に寂しさを増していくなかで、私たちも敦煌を去った。

蘭州へ戻り、また一〇日間ほど敦煌研究院の研究員による講義を受け、最後に報告会が行われた。私は多足机について報告したが、先生方からは厳しいコメントもいただいたが、敦煌研究の専門家たちに聞いていただいただけでもありがたく思った。報告会の後には敦煌研究院や蘭州大学の先生方が集まって送別会を催していただいた。現地の研究者の交流にも役だったようである。非常に意義深い、貴重な三ヶ月間であった。最後に敦煌研究院や蘭州大学の先生方、講義の通訳をして下さった賀小萍さん、同行した早稲田大学の濱田珠美さん、朝日新聞社の方々、その他関係者の皆さん、ありがとうございました。この場を借りてお礼を申し上げます。

生物の多様性

——とくに関係の多様性について

川那部浩哉

HIROYA KAWANABE



川那部浩哉（かわなべ ひろや）
一九三二年、京都府生まれ。京都大学理学研究科博士課程修了。京都大学博士（理学）。現在、滋賀県立琵琶湖博物館長。主な著書に『川と湖の魚』（全二巻、保育社、一九八九年、九〇年）、『生物界における共生と多様性』（人文書院、一九九六年）、『暖味の生態学』（農村漁村文化協会、一九九六年）などがある。一九九六年、日本学士院エディンバラ公賞受賞。

京都大学大学院人間・環境学研究科の新入生を歓迎する講演会で、話をするようお招きをいただきましたので、自然科学と人文社会科学との双方から議論できるような話題にしたいと考えました。しかし私は元来、生態学という生粋の自然科学の、しかも虚学である理学出身の人間ですから、人間に関することはなかなかうまく考えられません。そこで、「最近の学生さんは、漫画以外には余計な本は読まない」との噂をよいことにして、きつと私の書いた本や雑文は読まれたはずがないと信じ、過去に書いた話したりしたこと、寄せ集めで、今日はお茶を濁したいと思います。どこかで読んだり聞いたりした人が万一あれば、どうぞ眠っててください。

地球は閉鎖系

停年退官した一九九六年の四月に、「京都大学環境フォーラム」の第一回公開講演会が開かれました折り、いわゆる地球環境問題が科学ないしは哲学にどのような変化を迫ってきたか、それに対処する道は何かについて、四つばかりの話をしました。この内容は、井村裕夫総長のご挨拶、同時に講演した石弘之さん、梅原猛さん、それに

当研究科の福井勝義さんも加わった討論などとともに、『創造の世界』という雑誌の同年秋の号に載っています。先ずはそれを、ほとんどそのままにお話ししましょう。

一つ目の話題は、地球は明らかに閉鎖系だという認識です。これが開放系であると見なした時代においては、たとえば汚染物質を濃度で考えerと言うことが可能でした。しかし閉鎖系のもとでは、とりあえずは集めて拡散してしまえば何とかなるという考え自体が、全くできなくなりました。つまり濃度ではなくて、総量を考えなければならぬわけです。

関係の連なりは複雑

第二は、自然界におけるものごとは、私たちの想像以上に複雑にからまっているということです。ふつう科学というものは、いろいろ絡み合っているものごとを一つずつ、あるいはせいぜい二つずつ取り出して、その二つの間の関係がどういうふうになっているかを一所懸命解析し、その結果を言わば足し算してゆくと、全体が判る、いや判るにちがいないという考えかたを、つねにしてきたと思います。

しかし、じつはどうもそうはならなくて、

この二つのものの間に三つ目のものが入ったとたんに、関係がさつと変わってしまうということが、最近多くのところで判明してきました。たとえば、二つの種が同じ場所、同じものを食っているという状態で、長くいっしょにしていると、多くの場合、片方が死に絶えてしまう。つまりそこに競争によって互いに相手を排除する「競争排除則」が成り立っている。そういう現象を土台にして、生物の社会あるいは群集を解釈してゆくとというのが、従来のやりかたでした。しかし、そのところへもう一つ、たとえばその両種を食う第三の種が加わると、全体が生き残るという現象が生まれます。これはじつは一九五〇年代の初めに、当時京大の農学部におられた内田俊郎さんが実験的に、見事に明らかにされたのですが、その後二〇年以上、これはあまり注目されてこなかったわけです。それが一九八〇年代までに、アフリカのタンガニイカ湖での魚を中心とする調査をはじめ、各地で、またさまざまな生物の関係のなかで、こういう現象が見つかったのです。ともかく、こういうふうな三者関係があると、従来の考えてきた種間関係が大いに、いや基本的に変わるということが、だんだん明らかになってきました。

ここで改めて思い浮かぶのは、一九六二年に出た、レイチェル・カーソンさんの『沈黙の春*』です。これは今から言えば、以上二つの話題を広く世間に知らしめようとした、いちばんはじめのものではなかったかと思います。この本は、一九六四年に翻訳も出たのですが、日本だけではなく他所の国も含めて、出た当座は悪評紛々たる作品でした。私自身も、書きはしませんでした。が、「かなりおかげさだ」とか、「これはジャーナリストの見方だ」と思ったのが正直なところです。

しかし、それから何年か後には、このような事態が大きく問題になりました。私が私淑しておりましたイギリスのチャールズ・S・エルトンさんが、この本が出た直後にこれをたいへん高く評価をして、失意のカーソンさんをたいへん喜ばせたという話が、それからしばらく経って知られるようになりました。

カーソンさんは、農業にかぎって語ったわけですが、こういう問題は、科学のすべての部分で少しずつ明らかになってきたわけで、今はそれを全面的にどう取り扱うかが、きわめて重要になってきているのです。

個々の最適解と全体の最適解

そこで直ちに三番目の問題が出てきます。それは科学技術の発達というのは、少なくとも当分の間は自然のごく一部分しか解決しない、つまり、判っていることはまだまだ非常に少ないということです。

日本のさまざまな公害問題に関して、そ

れを解決するために工学が大きい働きをしたというのは、他国のいろいろなところから高く評価されているそうです。それはその通りかも知れませんが、しかし、たとえばそういうものが複合的に働いたとき、個々のことに対する最適解を足し算すると、全体の最適解になるものかどうか、その保証は全くありません。それどころか個々の最適解の集合が、全体としては最悪解になる場合すらありうるわけです。心ある工学者のなかには、この問題を解決する「総合工学」の試みこそが必須だと論じている人もあり、私はその意見に大いに共鳴しているところ です。

歴史に刻印されている自然現象

それから四番目には、多くの自然科学は今まで時間を考えないように、一所懸命努力をしてきたと言ってもよいでしょう。つまり、時間もがゼロにかぎりなく近いという状態のもとで何が起きているかと言うことで、できるだけ議論をするように努力を重ねてきました。時間を考えざるをえないときでも、こういう瞬間瞬間の積分値で考えるように努めてきました。これがとりあえず、自然科学に大きな成功をもたらした理由の一つですが、どうもその行き着く先がいまや見えて来たのです。

たとえば、現在の地球上の酸素の量は、過去三五億年にわたる生物の営々たる働きによって作られてきたものであることは、先刻ご承知のとおりでしょう。生物の性質が、過去の他の生物との関係によって、あ

るいは非生物的環境との関係によって作り上げられてきた結果であること、別の言葉で言えば同じところにも棲んで来た歴史によって刻印されていることは、言うまでもありません。



琵琶湖湖岸の風景

(写真撮影：杉山雅人、以下同)

単純な例を一つだけ挙げましょう。ヨーロッパアナウサギという動物がいます。ずっとヨーロッパオオカミなどに襲われて過ごしてきたわけで、「オオカミが存在しなければ」と思いつづけてきていたかもしれない。しかしオオカミは厳然と存在しつづけてきましたから、それへの対抗手段として、穴のなかで多くの数の子どもを産んで育て、少々食われても存続しつづけられるように、自分の性質を作りあげました。断っておきますが、このような言い方をしたからと言って私は、ウサギが意識して形

*レイチェル・カーソン『沈黙の春』青樹義一訳、新潮文庫

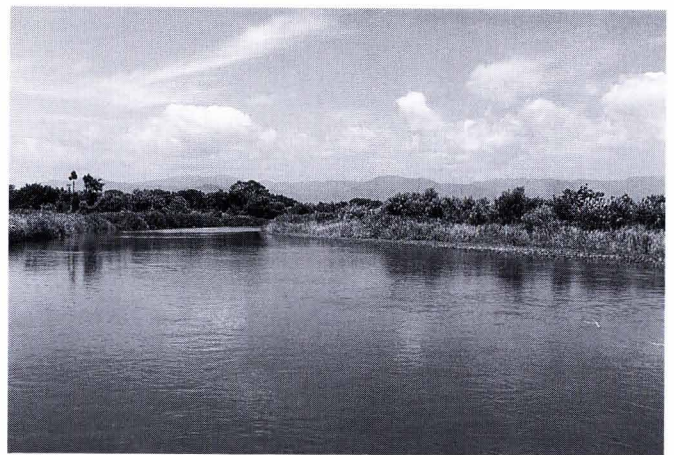
質を変えたと申し立てしているわけではありません。正統的な生物学的立場に立てば、突然変異のなかからそのような性質が自然淘汰の結果として固定したわけです。

ところでこのアナウサギを、人間がオーストラリアへ運びました。肉食性の有袋類も比較的少ないこの大陸で、アナウサギはきつと大喜びをしたことでしょう。産んだ子どもの生存率は飛躍的に上昇しました。その結果深刻な餌不足に陥り、少なくとも一部の集団は全滅するにいたりました。オオカミに食われることを言わば「予定」して作り上げた自分の性質が、その非存在条件下では、逆に絶滅に大きく寄与してしまったのです。性質は、過去の具体的な相互関係の産物なのであり、自分の性質を変えたいとかりに思っても、それを変えるには長い時間がかかるのです。

川などという完全に非生物的なものにおいてすら、その河道は周囲の地形によって具体的に決められ、逆に地形は川の流れによって長い時間のなかで変化を受けます。「どこを流れたい」などと勝手に思うことがあったにしても、それは叶えられません。このように生物のみではなく、地球の上に存在する自然現象はほとんどすべて、長い時間における相互関係によってその性質が決められてきたものなのです。「歴史とは時間の共有である」と言った歴史学者がいるようですが、そういう意味では、自然現象は単なる時間を持つているのではなく、歴史を持つているのです。逆に言えば、全然会ったことのない生物どうしの間には、それまで歴史がなかったわけであって、じ

つは彼らは互いに、どうしたらよいものかは、全く知らないはずなのです。

もう一つ、イギリスのある本を読んで面白く思った話があります。「ブラウン・ラウトが棲んでいる小川が屋敷内にあって、用水を取るための留め板がいくつか入っていた。あるとき洪水が起これ、このマスも水浸しになった庭のほうに大量に出てきた。そこで、川へ早く戻してやろうと、洪水の引き際にその留め板を外して、水を早く引かせるようにした。ところがマスは、その小川に帰れずに、庭に残ってしまつて、結局多くの個体が死んでしまった。すなわちマスは、へ洪水は、出るときは水位が急上昇するものだが、収まるときは徐々に水位が下がるものである」と、進化の中でそのような知つてきていた。ところが親切心を出して、洪水をへ急激に納めたために、マスは水位の下降に追いつけずに死んでしまった」わけです。この本の著者は、「私が何もしなかったならば、マスはちゃんと川に帰れたはずだ、少なくとも大部分の個体は」と結論を下しています。お判りのようにこの例もまた、歴史が性質に刻印されていることを示しているもののなのです。



だんだんと推移するのが自然

昨今の人々は、何事によらずものごとをきつちりと決めたい、あるいは境界をはっきりさせたいという、奇妙な執念に取りつかれているのではないのでしょうか。空にある星座は互いに重なりあっているものと、私は最近まで思っていました。「蛇座」と「蛇使い座」の関係は極端な例かもしれませんが、蛇座は頭の部分と尾の部分に分割され、蛇使いの体の前にある胴体の部分は、蛇座には属さず、蛇使い座にのみ配当されているのです。いや、それどころか、すべての恒星はいずれか一つの星座に属するのであり、その境界はまさに幅の全くない線で区切られているのです。

霞ヶ浦は、陸と湖とが完全に人工護岸で区切られていて、しかもその九五パーセント以上は垂直壁から成り立っているのだそうです。そこまではないにしても、琵琶湖でもはっきり分けたと思うているにちがいないと邪推したくなるほど、陸と湖との境界は判然としているところが多いのです。ところで本来、自然の岸なるものは、どこからが陸かどこからが水か、はつきり区別できないのがふつうなのです。

日本語には昔から「べ」と言う言葉があります。「山辺」とか「野辺」とか、「海辺」とか「岸辺」とか、いずれも「そのあたり」と言う意味です。最近では「水辺^{みずべ}」なる語もあります。これはここ三、四〇年内に出来た新語のようです。「ず」などと言う堅い濁音に「べ」が直接に連なるのは、音韻的に汚く感じられるからかもしれません。いずれにせよこの語は、従来は「すいへん」または「みずのはとり」と読んだようです。もちろん、日本語にはさつちり分けられる言葉もあり、それは「水際^{みずぎわ}」ないし「汀^{みぎわ}」です。これは陸側や船側から見たときの、水のぎりぎりの境界のことを言います。「水際立つ」との派生語でも判るように、くつきりと分れているとの感じの強いことはお判りでしょう。

それはともかく、自然の岸はそもそも「辺」でした。生態学的な用語を使えば、「推移帯」ないし「移行帯」です。森林から草原を経て、水が被ったり被らなかつたりする地域を通り、挺水植物・浮葉植物・沈水植物の各帯を経て、湖の泥底にいたる、こういう連続性が本来の自然でした。次々

と棲息場所が変化し、それを棲み分ける多くの生物たちが存在していたのです。そしてまた、このような推移帯、とくに沿岸や内湖、そこに生えているヨシや水草、さらにそれに付着したりしている動物や微生物の作用が、水質の浄化などにも大きい役割を果たしていたのです。推移帯の持つ作用や意義は、まさにいろいろのことがさまざまに起こっていた点にあります。その多様でかつ多面的なありかたそのもの、それを大切にするそこそが重要なのです。斜めになっている通常の岸の場合は、水位が上がったり下がったりしますと、水際は水平方向にも動きます。それに対してたとえば鉛直にコンクリートや矢板を打ったりしますと、水際は鉛直方向すなわち上下へは動きますが、水平方向には全く動きません。前者ではともかくにも「辺」の成り立つ余地がありますが、後者には全く存在しえないのです。

生物の種間関係のあいまいさ

生態学の分野でも現在まで、ものごとを右か左か、正か負かと言うように、判然と分類するのが好まれていました。二種の生物の相互関係を得か損かで判定して、++、+-、--というように分けたこともあります。++、すなわち両方が得すると協同あるいは相利共生、どちらかが得をして、もう片方は得も損もしないというのは+0で、これは片利共生、などというわけです。しかしほんとうに、ある種とある種との関係は、そのように一義的には

つきり決められるものなのでしょうか。

私たちの仲間がやった例を、ここでも一つだけ挙げてみましょう。アフリカのタンガニカ湖には、藻を食う魚が何種かいます。それには二類あり、一方は石面に口を大きく開けて当て、櫛のような歯で藻を梳くように食います。もう一方はハサミのような歯を使って、藻を切り取ります。この両類の個体のなわばりは互いに重なり合っていて、その間では争いは起こらず、それぞれが切り取るほうの魚は、梳き取る魚がすでに食った場所を選んで食います。また、梳き取るほうの魚を獲り去りますと、切り取るほうの魚がその場所から姿を消したのです。じつは、梳き取る種は餌の量を減らすけれども、藻に付着する細かい泥などを取り去るので、切り取る種にとっては質的にはかえって良好になる、これが実状



だったのです。

これは一九七九年頃に現在は国立環境研究所に在る高村健二さんの発見したことで、数年経って別の場所では、この両者の間に全く違った関係が成立していることが、今は大阪市立大学理学部にいる幸田正典さんによって見つけれられました。そこは流れの比較的速度いところで、泥などのゴミが藻の表面やあいだに付着しないのです。そこでは切り取る種にとって、梳き取る種は餌の量を減らすだけで、質を高めてくれるわけではないのです。こうしてそこでは、なわばりは互いに重ならず、その境界付近では互いに争う結果となっていたのです。すなわち、切り取る種にとって梳き取る種の存在は、ある条件下では＋、他の条件下では－だったわけで、一義的には＋－を決められるものではないのです。そしてこのようなことは、決してこの種間だけに止まることではありません。あえて言えば、人と人との付き合いでも、つねに＋、あるいはつねに－というような関係は、本来きわめて珍しいのではないのでしょうか。

先ほどの話には、じつはまだ先があります。それは梳き取る種にとって、切り取る種はどういう役割をしているかです。十なのか0なのか－なのか、そしてそれはどのような条件下で現われるのか。残念ながらまだ純粋に科学的な結論ははっきりしていません。切り取る種の歯は、掃除魚として知られるホンソメワケベラのものに似ているのですが、高村さんは実際に、梳き取る種の鰓のところを掃除していたのを、一度だけ見たそうです。ところでこの人は一週

間に六日潜って約三〇時間、それを二年やりましたから、膨大な時間を観察に費やしているのですが、その期間中にわずか一度の記録です。「梳き取る種には大損だ」と申しましたところ、「川那部は、真の友情というものが判っていないのではないか」と嗜められました。「ほんとうに助けを必要とするのは、一生に一度あるかないかではないか」というわけです。この意見には完全に降参しましたが、これを証拠立てる科学的方法を私はまだ全面的には見つけていません。ある程度できているのは、「疑似科学」的なものだけです。

しかし考えてみれば、一生に一回ではなく何世代かに一回起こることでも、致命的な内容に関するものであれば、そのような性質が遺伝的に固定されていることを否定する根拠はありません。いやむしろ、それは存在するはずと考えるほうが、むしろ自然なのではありませんまいか。

琵琶湖の魚たちをめぐって

私はいま、琵琶湖博物館というところに行きますので、この湖の魚について少しお話して見ましょう。琵琶湖では昔からさまざまな漁業が発達して来ましたが、一種の魚を獲るにも、季節により場所により、あるいは魚の発育によって、漁業のしかたはいろいろ違います。そのうえ、在来魚も四〇数種に達しますので、漁法は見事なまでに多彩です。

粟津湖底遺跡からの貝塚、琵琶湖博物館のすぐ近くから出土した定置網「えり」、

さらには湖東地方の川に架けられていた「やな」など、数千年前の遺跡はもちろんのこと、琵琶湖では七世紀からの文書が連綿と残っており、漁業などの状態もよく判っています。このあたりに特に興味のある向きは、一九九七年に開いた「世界古代湖会議」に関する、今年秋に出る予定の本でも参照して下さい。

最近はずっと、一般的ところで琵琶湖の魚の話をするとき、二つの俳句を材料に出すことにしています。今回もそれを繰り返させてもらいます。

一つは鮒鮓（ふなずし）の材料になる、ニゴロブナと言う種のことで、これは世界中でこの湖にしかない種、すなわち固有種です。そのニゴロブナが近年非常に少なくなってきた、今では他の種で代用しています。残念ながら味はうんと落ちます。では、どうしてニゴロブナはとくに減少したのでしょうか。フナ類も、産卵は沿岸の水草帯で行ないます。数日で孵化した子魚は、水草にくっ付いたり離れたりするミジンコの類を餌にするのですが、ニゴロブナの子魚は水草帯に長く留まりますし、これに依存するところがうんと強いのです。以前は沿岸に、内湖と呼ばれるものがありました。水の流れがあまりない水草の密生した空間、フナの子がその餌を充分に食うことのできるこの内湖が、なくなってしまったのです。私どもは一九六〇年代の前半に、琵琶湖生物資源調査をしたのですが、琵琶湖中のフナ全部の何と二一パーセントが、長浜と尾上のあいだにある小さい早崎内湖で産卵したのです。その頃までに、周りの



* Ancient Lakes: Their Cultural and Biological Diversity, Gent. KENOBI Productions, 1999.

内湖はつぎつぎに干拓されてゆきました。残った良好な場所は、ほとんどここだけになってしまったのです。しかしこの早崎内湖も、一九七〇年代になくなりました。そしてその頃から、ニゴロブナの漁獲量は一挙に下がり始めたのです。

江戸時代に画家でかつ俳人の与謝蕪村さんという人がいました。この人の句に「鮎鮎や 彦根の城に 雲かかる」と言うのがあります。彦根の城の周りには、私の知っているところにもまだ、松原内湖などがありました。白の勝る彦根の城に黒い雨雲がかかっているさまを、鮎鮎と対比させたものです。彦根の城の周りの内湖を掘り返せとは、いくら私でも申しませんが、かつてあった内湖のなかには、掘り返して内湖として復活させたほうがよいものがあるようにも思います。食い意地のほった私としては、フナも喜び、景観も良くなり、鮎鮎という古くからの文化も継続できるような政策を採るべきではないかと、申しあげたくなります。

もう一つの蕪村さんの句は、「瀬田降りて 志賀の夕日や あめのうを」というものです。この「あめのうを」というのは、ビワマスのことですが、これはサクラマスの仲間が古い時代に琵琶湖に入って、琵琶湖で進化したもので、この湖特産です。

瀬田とはもちろん唐橋のある瀬田で、「近江八景」の中の「瀬田の夕照」で知られています。瀬田は夕映えではなくて雨にすることによって俳を効かせ、他方、天智帝の都ですぐに荒れてしまった志賀の里に夕日がきれいに見えています。こうして、

産卵期のビワマスの背の黒を、体側の虹色に対比させているのです。

それでは、この句はどこで詠んだのでしょうか。瀬田と比叡の南の志賀の里とが見えるわけですから、そう、琵琶湖博物館のある烏丸半島のあたりではないかと私はひそかに思っています。それはともかく、これは長浜や近江八幡ではなく、南湖の東岸で詠んだものであることは確かでしょう。またこれは、膳の上のビワマスではありません。最近出た『蕪村全集』には、「今や漁師が網からとり上げたところ」との注がありますが、生きたビワマスであることに間違いはありません。

しかし今、ビワマスが主に獲れるのは、姉川、安曇川の北のようです。今は数年に一度遡る程度で、新聞種になったりする野洲川は、昔はビワマスの名産地でした。琵琶湖の水質が格段に回復して、蕪村さんの句のとおり、南湖でその風景を賞でながら、ビワマスを食べられるようになることを、私はこれまた願っているのです。

生物多様性の危機

生物の種は、地質時代のいつの代にも絶滅を繰り返してきました。したがって、ある種がいなくなるということ自体には、多くの人に叱られるかもしれませんが、私はじつはそれほど驚きを感じません。しかし、今の絶滅の速度は、尋常ではありません。みなさんがご存じの恐竜の絶滅した白垩紀最後のものよりも少なくとも三桁ないし四桁、地球始まって以来最大の絶滅と言

われる二畳紀終りのものに比べてすら、それよりも二桁ないし三桁大きいのだと聞きます。これはどう考えても、尋常ではありません。生物が作りなす網目全体が崩壊するかどうか、すなわち生態系機能とも呼ばれる自然全体が崩れてしまう可能性が、いちばん危惧されることです。網目と言う譬喩を進めて言えば、魚を獲る網の場合、それに一つや二つ穴が開いた程度ならば、まだそのまま「だましだまし」使うことが可能です。その段階では、網を繕うこともできます。しかし、大きな穴がいくつもいくつも開いてしまうと、網としての役割を全く果さなくなり、また繕うことすらできなくなってしまうのです。

私自身は、せいぜい長生きしてもあと二〇年くらいでしょうから、それまでに地球が破壊されることはないでしょう。しかし、生物の一種としての人間すなわちヒトは、もし近い将来に絶滅するならば、とても短期間しか地球上に存在しなかった種ということになります。さらに、地球上においてここまで超優占的になってきてしまいましたから、ヒトの絶滅は地球全体にも、まさに甚大なる影響を与えることでしょう。せめてあと十万年くらいは、ヒトは生きつづけ、地球にも大きな影響を与えないほうがよいのではないかと、そのように思っております。

(一九九九年四月二二日、京都大学人間・環境学フォーラムにおける講演にもとづく)



フロンティア ■水圏における有機炭素の循環を探索 ■杉山裕子 YUKO SUGIYAMA

地球表層において物質は、気圏（大気）・水圏（海洋）・岩石圏（陸・堆積物）の間をさまざまな形態をとりながら循環している。それぞれの元素がどこに、どの程度存在し、それがどのような法則に支配されているのかを探るのが地球化学の大きな研究目的の一つである。筆者は炭素の地球化学に興味を持ち、その地球循環について研究を続けてきた。炭素は生物活動を介して地球圏のなかを最も活発に移動している元素であり、昨今、注目を集めている地球温暖化の問題も炭素の地球循環が鍵を握ると考えられている。

炭素の形態は大きく無機態と有機態の二つに分けられる。二酸化炭素に代表される無機炭素は植物の光合成により有機炭素へとその形態を変換される。一方、有機炭素は動植物の呼吸によって無機炭素へと戻される。炭素の形態変化にはこのように生物活動が大きく関わっている。

気圏では炭素は二酸化炭素、一酸化炭素などの無機炭素として主に存在する。岩石圏においては炭酸塩鉱物や粒子状有機炭素（生きた生物体や生物の死骸などの堆積物）が主である。そして水圏では溶存二酸化炭素や炭酸水素イオン、炭酸イオンなどの無機炭素に加え、プランクトンやバクテリアの形をとったいわゆる懸濁態有機炭素、そしてそれらの分解生成物とも言える溶存態有機炭素（DOC）が存在している（懸濁態が溶存態かは、具体的には孔径 $0.45\mu\text{m}$ のミクロンのフィルタを通過するかどうかによって分けられる）。

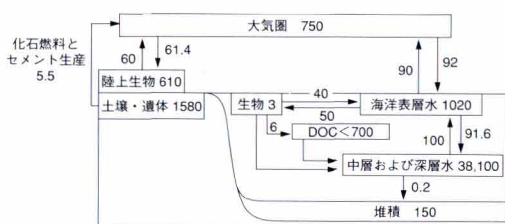
炭素の地球循環を論じる上で気圏、水圏、岩石圏のそれぞれの現存量を明らかにすることが大切なことはもちろんであるが、それと同時に圏間の移動量を解明することにも必要不可欠である。この意味から生物活動に介在されて、その形態をさまざまに変えながら三圏を活発に移動する有機炭素についての知識はきわめて重要である。なかでもDOCは水圏中全有機炭素の九パーセント以上を占め、見逃すことができない成分である。しかし、その大部分は未同定の化合物であって、組成や由来には不明の部分が多く残されている。

DOCは海洋深層水中に $0.6\sim 0.8\text{mg/L}$ 、ミリグラム／リットルの一定濃度で存在し、平均六千年の長い滞留時間を有する。このことから、海洋に存在するDOCの大部分は生物分解に耐性を持つ、いわゆる難分解性有機化合物であると言われている。一方、表層水中ではこれに加えて、滞留時間の短い、いわゆる易分解性の溶存有機炭素が存在している。この種のDOCは、生物による生産から間もないものが主で、海域や季節によって濃度を変える。

筆者は天然水中のDOCの循環を論じるに当たって、それが有する化学的性質により、DOCをいくつかの分画に分けて考えるのが有利であると論じてきた。そして、その一つの方法としてDOCを水酸化鉄吸着剤に容易に吸着するか否か（actとint）と過マンガン酸カリウム酸化剤によって容易に酸化されるか否か（ox）と「un」によって四分画するという手法を

杉山裕子（すぎやま ゆうこ）

一九六八年、京都市生まれ。一九九七年京都大学大学院人間・環境学研究科単位取得退学。京都大学博士（人間・環境学）。現在、兵庫県立姫路工業大学環境人間学部助手。



炭素の地球循環 (IPCC, 1994)
図中の数値の単位は $\times 10^{15}\text{gC}$

提案した。この手法によれば、湖沼や河川のDOCの分布と変動の特徴をうまく説明づけられる。

たとえば琵琶湖では、act-DOC「un」とint-DOC「un」は年間を通してほぼ一定濃度（それぞれ $0.5\sim 0.8\text{mg/L}$ ）で存在するが、四ミリグラム／リットル）で存在するが、act-DOC「ox」は、季節の変化と水域に依存して $0.1\sim 0.8\text{mg/L}$ の範囲で変動する。一方、安曇川河川水のact-DOC「un」はほとんどゼロに近いが、int-DOC「un」は $0.2\sim 0.4\text{mg/L}$ の範囲で変動する。またact-DOC「ox」は、地点により異なった濃度を示す。すなわち、湖と同様に河川でもこの分画（act-DOC「ox」）が地点によるDOC濃度の変化を支配しているのである。

湖水と河川水の結果から、act-DOC「un」は停滞した水のなか、すなわち湖の中で初めて生成するものであることがわかる。また、これとint-DOC「un」の含量が、いわゆる難分解性有機炭素の正体であることも自ずと示唆される。

この分画法によって湖水や河川水の溶存有機炭素を、季節や水域により変動する成分とそれらに関わりなく常在（長く滞留）するものに分けることができるようになった。今後は、本法を海水へ適用して各分画の分布と、それぞれに含まれる有機化合物分子の特徴を調べることによって、従来不明であった水圏における有機炭素の循環機構の解明にさらに近づきたいと考えている。



図1 立方体、菱形12面体、正8面体

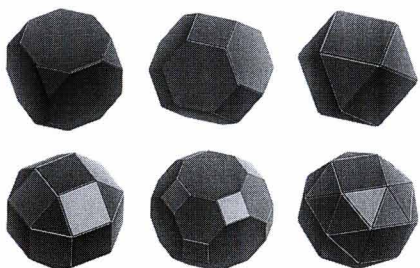


図2 立方体・正8面体系の半正多面体

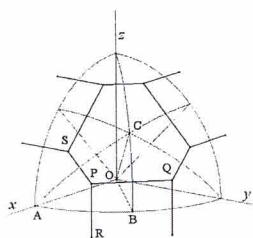


図3 26面体の一部

三次元にはもつとも対称性の高い多面体として五種類の正多面体があります（たとえば図1の立方体と正八面体）。これにそれぞれ対称性を持つのが、半正多面体で、通常は一三種類とされています。そのうち立方体と正八面体から作ることのできるもの六種類を図2に示します。これらは、稜線の長さがすべて等しくなっています。

これらのうち、右下の「ねじれ立方八面体」は省いて残りの五種類、すなわち立方体や正八面体と同じ対称性を持つ半正多面体のことを、立方体・正八面体系の「単純半正多面体」と呼ぶことにします。

次に、「 n 次元の半正多胞体」について考えます。これらをすべて求めるのは難しい作業ですが、正多胞体と同じ対称性を持つ「 n 次元の単純半正多胞体」に限定すると、かなり簡単になります。

たとえば、三次元の場合についていえば、まず図1のような、三種の立体を用意し

ます。これら三種類を中心を重ねて置き、大きさを変化させて、その共通部分からできる立体を考えます。一般に、得られる図形は図3に部分を示すような二六面体となります。

点Pは三つの立体の各表面の交点で、位置はつぎのようにして決めることができます。図3の二六面体には、七本の稜線があります。長さは三種類だけで、P、Q、R、Sの長さのいずれかに等しくなります。ここで、すべての稜線の長さを等しくすると図2の右下以外の五種類と、図1の立方体、正八面体になります。

これは四次元以上にも応用できる有名な方法です。私は稜線の長さの比を座標値とみなし、それに行列をかけることで、点Pの座標を求める方法を考えました。これにより、五次元や六次元でも、単純半正多胞体の形状モデルをコンピュータで作成することが現実的なものとなったのです。



石井源久（いしい もとなが）
一九七〇年、和歌山県生まれ。京都大学理学部卒業後、一九九九年京都大学大学院人間・環境学研究所博士後期課程修了（京大博士）（人間・環境学）。現在、株式会社ナムコ パーチャル・テック研究室に勤務。



図4 4次元の半正多胞体の一つ

ところで、図1や図2では、裏側に隠れた面は描かれていません。これは隠面消去と呼ばれ、三次元コンピュータグラフィックスの世界ではすでに研究されつくした技術です。そこで、三次元の場合を参考に、四次元以上の場合も隠れた部分を帰納的に消去していく方法、つまり一つずつ次元を落としながら隠れた部分を消去していき、最終的に二次元の図を得る方法を考えだしました。これで、隠れた部分を見せないソリッドモデル表示で、六次元までの単純半正多胞体をCGで示すことができました。四次元の場合の例を図4に示します。

さて、このように私は、多次元の図形の基礎的な研究を行い、その成果を表現するためにコンピュータグラフィックスの力を借りてきたわけですが、そろそろその恩返しをしたいと思っています。すなわち、今度は多次元の図形の力を使って、三次元のコンピュータグラフィックスの表現の幅を広げよう、計算を速くしたりすることに貢献しよう、というわけです。具体的には、物体の変形や動きを表現するのに使えるのではないかと考えています。お楽しみに。

フロンティア ■ 議会制は果たして意義ある存在なのか? ■ 山崎充彦 MITSUHIKO YAMAZAKI

病院では決して治療できない「病」に罹っている人を救うために、あることが年中行事として執り行われる。その病気とは「大臣病」、年中行事とは「内閣改造」である。

一九九九年一〇月、折しも、東海村での原子力事故のさなか、小渕改造内閣が発足した。戦後内閣の大臣在任期間は一年程度であるから、こうした改造行事はまさに年中行事。大臣就任記者会見では、多くの新任大臣たちが、「図らずも大臣に任命され……これからよく勉強して……」と繰り返し、所管事項については、官僚作成の書類の棒読み。われわれは、こうした人たちに政治を委ね、彼らが日本と日本人の行く末を決定している。

「われわれは、議会制が……専門知識を持つ大臣の代わりに政党人が大臣に任命されることと同義とされるのに、これ以上堪えられない」。

これは、ドイツ・ヴァイマル時代に活躍した右派の思想家メラ・ファン・デン・ブルックが議会制を批判した遺著『第三帝国』（一九三三年）の一節である。（なお後年、民族社会主義ドイツ労働者党「蔑称・ナチ党」が、この名称を掠取し自らの国に冠したのは有名。）

メラ・ファン・デン・ブルックの指摘によるまでもなく、日本においても大臣の素人さはかなり深刻である。一九八〇年一月の自衛隊スパイ事件に際し「重大な問題なので、防衛局長から答弁させます」と、答弁した大平内閣の久保田円次防衛庁長官。一九九一年の湾岸戦争の折り、わが国の外

交・防衛政策に根本的転換をもたらす重要案件であった国連平和協力法案の審議で、二転三転の無責任答弁を繰り返した海部内閣の中山太郎外務大臣など、笑うことさえ叶わぬ素人大臣の不勉強ぶりは枚挙にいとまがない。

不勉強なのは大臣だけではなく、大臣を追及する野党議員の国会質問を作成するのが、（追及される側の官庁の）官僚であるというのも珍しくはない。国会審議は、素人大臣と不勉強議員の下、官僚の自作自演と化している。議員の仕事は、権力闘争と利権あさりだけとなり、国会への出席や審議など儀式にしかすぎない。ゆえに議員たちが船を漕ぐのも無理からぬところかもしれない。議会とは、公開性と理性的討論によって成立する（C・シュミット）という議会制の理想型など望むべくもない。もちろん、議会の形式化・空洞化は今に始まったわけでもない。

「議会は、今日たいいていの国家ではもはや、一部の議員が他の議員を論証によって納得させ、そして公開の全員集会の決議が討論の結果であるという可能性が存するところの相互の理性的説得の場ではない」。

ヴァイマル時代、シュミットはこのように議会の現状を分析・批判し、独裁制を正当化した。議会制を全否定したシュミットやメラ・ファン・デン・ブルックらによる議会制分析の論点が、現代の議会制全般にも当てはまること少なからずなのが悲劇なのかも知れぬ。

山崎充彦（やまざき みつひこ）

一九九九年九月京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。京都大学博士（人間・環境学）、政治学専攻。桃山学院大学・龍谷大学非常勤講師。主要業績に『カール・シュミットとその時代——シュミットをめぐる友・敵の座標』（共著）、『国民代表と議会制』（共訳）、『主権論』（共訳）。



(1) Arthur Moeller van den Bruck, Das Dritte Reich, Zweite Auflage, Berlin 1926, S.165.
(2) Carl Schmitt, Verfassungselche (1928), Berlin 1993, S.319. カール・シュミット、阿部照哉・村上義弘訳、『憲法論』、みすず書房、一九七四年、三六九頁。

だが、いかなる政治体制も自らが民主主義的であると称せざるをえなくなった二〇世紀という時代において、議会制が、民主主義に不可欠な制度なのも確かである。

大量虐殺の規模と陰惨さにおいて、ナチをはるかに上回るといわれるスターリン治下のソ連共産党体制のような「自称民主制」でしかない独裁体制でさえも形式上は議会を有していた。

あらゆる政治制度のなかでもとりわけ議会制は、あるべき理想像と現実の姿との狭間でしか存在しえない。現代において、果たして議会制はいかなる存在意義を持ち、いかなる機能を果たすべきなのか。さらには、西ヨーロッパ起源のこの制度を普遍的な制度とすることが可能なのか否か。外来の政治制度をいかに自らの血肉とし、自らの理念と運営指針を確立するか。これらは、議会制がかかえる本質的な問題点である。

理念としての民主主義ないし議会制は、究極的には、それを担うべき当該国民の自己責任によって立つものであり、本来的に欲望の塊で性悪なる人間を前提とする。あらゆる権力と利権の巣窟である国家を眼前にしながら、「大衆への信頼」なり、人間の良識や理性・合理性だけに訴えることは、傾国への一里塚にほかならぬ。政治的選択において、人間が合理的・理性的に行動するの一面であるが、同時に、「非合理的な存在としての政治的人間」という側面を忘却しては、政治学は学問として成り立たないのである。

フロンティア ■適切な公共政策を実現するには？ ■佐野 亘 WATARU SANO

現在わたしたちは数多くの社会問題に直面しています。環境問題、高齢化・少子化の進行、教育の崩壊など、数えあげればキリがないほどです。こうしたさまざまな問題に対して、わたしたちはそれぞれ自発的に解決に取り組むことができます。環境問題を例にとれば、わたしたちは、消費者として、環境に配慮した商品の購入を心掛けたり、資源の無駄遣いを避けたりすることができなのです。

けれども、残念ながら、こうした自発的な取り組みによって、あらゆる社会問題を解決することができないわけではありません。人々にはつねに善意をもって、正しく振舞うとはかぎらないからです。それどころか、そのように振舞うことは多くの人にとってむしろ例外的なことでしょう。実際、わたしたちは、自動車に乗るのを控えることで、希少資源としての石油の消費をおさえ、二酸化炭素の排出を抑制することができることをよく知っています。しかし、ほとんどの人は、「自分一人自動車に乗ることを控えたくらいで、資源枯渇や温暖化の問題を解決できるわけではないのだから」と考え、自動車に乗りつづけるのです。

政府が必要とされるのはまさにこのような場面においてです。政府は法律によって一定の行動を禁止したり、経済的インセンティブによって一定の行動を奨励・抑制したりすることで、解決を試みることででき

ます。再び環境問題を例にとれば、燃費のよい自動車に対する課税を低くし、鉄道会社に対して補助金を与えることで電車の運賃を低く抑えることができます。人々は経済的に得になる方を選ぶ傾向にあるので、このような政策によって問題を解決していくというわけです。

では、これで「万事解決」なのでしょう。残念ながらそうはいきません。わたしたちは、ここで次のような問題に突き当たります。このような方法は、もしかしたら人々の私的欲望を強化することになるかもしれません。人々の道徳心や公共心ではなく、私的利益に訴える方法は、そうした私的利益の追求を正当化するものとみなされてしまうかもしれないのです。また、あるいは、そもそもこうしたインセンティブの仕組みが機能しない状況もありうるでしょう。実際、たとえば、いかなる政府もあらゆる「ゴミのポイ捨て」を取り締まることはできません。もちろん、ゴミをもつてきた人にお金を与えることで「ポイ捨て」をなくすことはできるでしょうが、これではゴミそのものは増えるばかりです。

ここで重要となってくるのが、やはり、人々の行動を内面から規律するもの（倫理観・道徳心・公共心など）です。そして、このことは必ずしも政府が不要であることを意味しません。政府はさまざまなインセンティブを用いる際、私的欲望を強化しな

佐野 亘（さの わたる）

一九七一年、名古屋市長生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。現在、岡崎学園国際短期大学助教授。二〇〇〇年四月より人間環境大学助教授。専攻は公共政策学。



いよう配慮し、場合によっては道徳心や公共心を育成することができからです。

では、こうした困難かつ微妙な政策設計を現在の政府はおこなっているのでしょうか。残念ながら、そうではないようです。これはおそらく政府の行動を規定している政治システムの側に問題があるからです。では、どのように政治システムを設計すれば適切な政策を実行することのできる政府が生まれるでしょうか。ここで再びわたしたちは同じ問題に戻ってくることにあります。わたしたちは適切な政治システムを設計するにあたって、政治の場においても人々が私的欲望にもとづいて行動することを前提とし、にもかかわらず全体の利益にかなう政策が実現されるような政治システムを構想していくべきでしょうか。あるいは、人々の公共心をいくらかなりとも育成していくことを目指すべきでしょうか。適切な公共政策のあり方について考えるにせよ、公共政策を産み出す政治システムのあり方について考えるにせよ、わたしたちは、わたしたち自身がどのような存在であるのか、あるいはあるべきなのかという古典的かつ根本的な問題に突き当たることになるのです。

ゲルの破壊

宮本嘉久

YOSHIHISA MIYAMOTO



1953年、兵庫県生まれ。京都大学理学研究科博士課程修了。京都大学総合人間学部・同大学院人間・環境学研究科助教授。主な研究分野は高分子物理。

「破壊」という言葉から連想するのはどのような現象だろうか。環境破壊や破防法が思い浮かぶかもしれないが、ここでは物体の破壊に関する最近の研究を、経緯を振り返って紹介させていただきたい。

破壊に関しては材料としての重要性から、金属を中心に硬い物質について調べられてきた。三次元の物体が壊れると破断面が対でできる。破壊進行中は破断面の縁、すなわち破壊された部分と未破壊部分の境界、は一次元で、これを破壊進行線と呼ぶ。消しゴムの中央にカミソリで切れ目を入れたつもりになって、この亀裂から破壊を進行させることを考えてみよう。消しゴムの歪ませ方としては、①切れ目の両側を左右に引き離す、②段差ができるように切れ目の

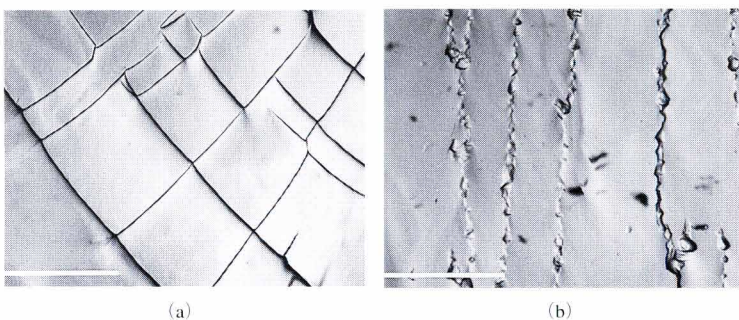


図1 ゲルの破断面の規則的模様。角柱状のアクリルアミドゲルの上面に切れ目を入れ、その左右を一定速度で引き離す（モードI破壊）、切れ目が上面から下面まで広がり、ゲルが左右に破断されたときに、片側の破断面に現れた模様である。破壊は図で上から下へ進行した。図中の白線は5mmである。破断速度は、(a) 0.03cm/s、(b) 3.2cm/s

両側を上下にずらす、③引きちぎるように切れ目に平行に前後にずらす、というそれぞれモードI、II、IIIと呼ばれる三つの基本モードがあり、一般の変形はこれらの成分の合成によって記述される。破壊力学では、このように破壊進行線に沿っての応力の状態は一樣として、三次元の破壊を二次元の問題として扱ってきた。

ゲルの破壊研究は、非常に柔らかな固体であるゲルを破断したとき、図1のような巨視的な規則模様がその破断面に現れるという観察がきっかけとなった。図1aは破断速度が遅いとき、図1bは速いときの模様である。読者の中には、ゼリーをすくった後にこのような模様が見られることをご存知の方もおられるだろう。これらの模様は何を語りかけてくれているのだろうか。この例に限らず、日常生活で経験する破壊、巨大な材料や地層の破壊においても、その破断面全体が滑らかな面で構成されていることは稀で、大小の凹凸や、複雑な模様が観察されるのが普通である。金属材料を中心におこなわれてきたフラクトグラフィ³⁾は多くの成果を生み出してきたが、破断面の形態を形成する基礎的な機構までは明らかにされていない場合が多い。ゲルの破断面に模様を描いている線は破断面の段差である。単純に考えると、稲妻形の破壊進行線が描いた軌跡となる。図1の平坦に見える部分はほぼモードI破壊と考えられるが、線を描いた特異な部分はモードII・IIIの合成で表せるのだろうか。できないならば破壊力学で見過⁴⁾されている重要な要素があるのではないか。また、この要素から、破断面の形態を作る素過程を語る「言葉」が得られるのではないか。これらが、ゲルの破壊研究を進める動機となった。

このように大風呂敷を広げてみたものの、連続体として扱うと応力が発散する破壊進行線上における特異構造周囲の三次元応力場が求められるとは思えない。物質の個性が反映される破壊物性ははるか彼方にありそうである。そこで、この構造の普遍性を調べるために、図1aの交叉模様について、破断面に段差を作っている亀裂先端構造の幾何学的特徴づけから始めることを研究方針とした。

ゲルとは三次元分子網目が大量の溶媒を抱え込んだものである。ゼリーや寒天、人体も大部分がゲルである。ミクロな過程には触れないので、ゲルとして

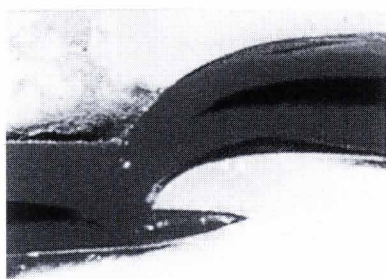


図2 交叉模様を描く破断面の段差部分の形態。破壊を途中で止め、破断面を染色し、破壊進行線のすぐ上でゲルを切り、亀裂を少し開いて顕微鏡により観察した。図の上下がゲルで、中央部は紙面内では空間である。破壊は紙面に垂直に奥の方向に進行しており、破壊進行線はほぼ左右方向で紙面奥にある

- (1) 小稿は田中良巳氏の学位論文(人間・環境学)の内容の一部を、タイトルを含めて借用したものである。
- (2) 応力とは物体内部の単位面積当たりの力である。
- (3) 破断面の形態観察から破壊原因や破壊機構を解析する手法。
- (4) 亀裂は、破壊進行線とそれが残す破断面を含めた構造を指す。

は弁当箱を型にして作ったゼリーを想像していただければいい。ゲルを実験に用いた利点は、硬い物質に比べ破壊進行が遅いので、破壊条件を制御しやすいこと、透明であるから光学的に種々の方向から破壊進行をその場で観察できるということにある。

図1の破断面と対になる破断面とは、巨視的にはびったりと重なることができる。

破壊進行中は大きく弾性変形しているが、塑性変形はなく、ここでのゲルの破壊は脆性破壊と分類される。破断面の段差の構造を詳しく見るために、破壊方向と垂直にゲルを切り出し、破壊進行方向に沿って、段差の形を拡大して見たのが図2である。下側のゲルの段差の付け根部分に切れ込みがあるのが、特徴的な点である。段差部分は、対の破断面で切れ込みがある側とない側が必ず対になっている。この部分の形がギリシャ文字のタウ τ （の逆さま）に似ていることから、亀裂先端の段差を生じさせる部分の構造を τ 構造と名づけた。図の配置と左右、上下に対称な形もむろん存在し、また、 τ 構造は破壊進行とともに、必ず切れ込みのない方へ移動する。すなわち、四種類の向きをもつ τ 構造のうち二つは破壊進行とともに右へ、他の二つは左へ動く。こうして図1aの交叉模様を描かれていることが分かった。

亀裂先端付近の構造を、破断面と垂直に表と裏から観察した写真が図3である。ここで注目して欲しいのは図3bにおいて、左側から（図2、図3aでは右から）の破壊進行線が右側の破壊進行線とつながっておらず、右側の破壊進行線によって作られた破断面上に端点をもっていることである。これらのことから τ 構造を模式的に描くと、図4aのようになる。この構造の特徴は、

破壊進行線がその部分で不連続になっていることである。左から点P1までの破壊進行線によって作られた破断面を、その破断面上に端点P2をもつ右からの破壊進行線が切り開くような形で破壊が起こり、破壊の進行と共に点P1とP2がこの形をほぼ保って左に動いていき、図1aの模様が作られることになる。

物体が二つ以上に分かれるには、破断面は連続でなければならない。破断面の連続性と破壊進行線の不連続性の要請を満たす構造は、次のようにして幾何学的に構成できる。図4bのように二つの独立な亀裂を準備する。破壊進行線の不連続性を保ったまま破断面をつなぐには、一つの亀裂の破断面と他方の亀裂の縁をつなげばよく、これは τ 構造と等価である。図4bでP1、P2に対応する片方の縁を、他方の亀裂のどちらの破断面につながるかによって4通りの結合の仕方があり、これは実験で観測された τ 構造の四種類の向きに対応している。ただし、実際の τ 構造は図4のbからaと生成されるわけではなく、図1aに数ヶ所見られるようにモードIで進行していた亀裂中に τ 構造が自発的に生成される。

τ 構造を亀裂先端部の「欠陥」と認識して、硬い物質を含む多彩な破断面を見ると、 τ 構造と同相の「欠陥」から生成したと考えられる破断面の形態が遍在している。 τ 構造は破断面の解析に一つの「言葉」を提出できた。モードI・IIIの合成だけでは記述できない構造の存在を示したが、 τ 構造が破壊力学においてどれだけの重要性をもつかは未知である。ゲルの破壊固有のテーマに関しては、交叉模様の交点の解析、破壊エネルギーの測定までは研究が進んだ。しかし、 τ 構造がなぜ破壊進行方向とほぼ

四五度の方向に安定に進むのか、また、 τ 構造が生成する過程や、破断速度の増加によって生じる動的不安定性の機構等、力学的な問題には手つかずのままである。本稿では研究の動機や方針を順序立てて書いたが、現場では当然ながら試行錯誤のくり返しである。幾何学的特徴づけから攻めようというのも、 τ 構造についてある程度の見通しがついてからであった。具体的な研究例を通して、「サイエンティストの眼」の一面を読み取っていただければ幸いである。

この研究では、発想や研究の進め方についても基礎物理学研究所の関本謙氏に負っている。ここに感謝いたします。

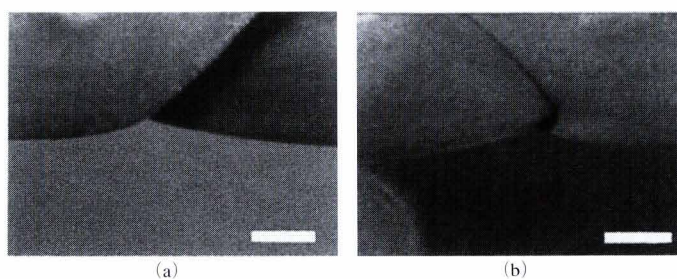


図3 亀裂先端の側面からの観察。図2と同じ亀裂を、破断面と垂直に、ゲルを通して観察した。図中の白線は0.3mmである。(a)は図2の下から、(b)は上から見た図に対応する。上部が破断された部分、下部が未破壊ゲルであり、斜めの線が段差で、図1aに描かれている線の1つである

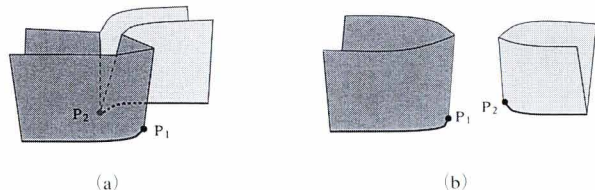


図4 (a) τ 構造の模式図。点P1より左、P2より右の太線で示した部分が破壊進行線である。点P1より上に伸びる線は、P1までの破壊進行線によって作られた破断面の縁（点P1の軌跡）であるが、この線からはこれ以上破壊は起こらず、破壊進行線ではない。(b) 2つの不連続な亀裂によって作られた仮想的な破断面。このまま破壊が進行しても物体は二分されない

(5) 花びんの破片を合わせると元の形が再現できるように、永久変形をともしない破壊。

社会科学は現代に 何ができるか

佐伯啓思

KEISHI SAEKI



1949年、奈良県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。社会経済学。著書に『隠された思考』（ちくま学芸文庫、1993年）、『アメリカニズムの終焉』（TBSブリタニカ、1995年）、『現代日本のリベラリズム』（講談社、1996年）、『市民とは誰か』（PHP新書、1997年）など。サントリー学芸賞、読売論壇賞など受賞

今日は「社会科学は現代に何ができるか」というテーマで話をしたいと思います。社会科学という言葉がよく流通していますが、Social Scienceというわけですが、ある意味で社会科学という言葉は無意味な言葉なんです。無意味というのが言いすぎだとすれば、形容矛盾というか、あまり意味をなさない言葉だと思っています。近代の社会科学は、自然科学のやり方をまねて、自然科学の方法を社会現象に適用する、という風に考えています。それはもちろんずいぶん長い歴史があるわけです。たとえば一八世紀の始めにニュートンが自然科学のものを作り出したとされていますが、彼の力学が依拠した客観的な自然法則という考え

方は当時の知識人に大きな影響を与えた。最初に経済学をつくったとされるアダム・スミスは明らかにニュートンの方法を意識していた。実際にはスミスのやり方は決してニュートン主義的なものではないのですが、それから、少し時代はさかのぼりますが、政治学の基をつくったホッブズは、デカルトの影響などによって、明らかに自然科学の方法を適用しようとしています。それ以降社会科学の基本的な方向は、できるだけ自然科学のやり方をまねしようとするものでした。



撮影：藤田糸子（以下3枚同）

では自然科学のやり方をまねするということはどういうことか。二つのことに注意しておかなければなりません。ひとつは、客観的な事実があって、理論というものは、その客観的な事実に合わせて、あつてるか間違つてるか判定される。そうして初めて

客観的な理論というものが得られる。こういう考え方です。実証科学的方法といつてよいでしょう。それからもう一つは、途中の客観的なものにたどり着くまでに、いろんな推論のプロセスがありますが、その推論のプロセスをできるだけ論理化する。簡単に言えば、数学的手続きを可能な限り導入しようとする。その二つです。その二つの意味で一番過激なことをやったのが経済学です。だから経済学という学問をちよつとひもといてみればすぐ分かることですが、やたら数式がでてきます。経済学の抽象的な論文などほとんど数学の論文かと思ってしまうぐらいです。で、そういうやり方でやって、経済学は実証科学であることを自負している。

実証科学というのは、繰り返しですが、理論はつねに仮説で、その仮説をつねに事実と照らしあわせて検証する。つまり、できるだけ、研究者の個人プレーというか、個人の主観性や個人のやり方とか、あるいは、イデオロギーとか好みとか、そういういたものを遮断することを目指しています。

しかし、このこと自体、じつはかなり問題を含んでいます。それは二つのことがあつて、一つは、この実証科学の成立ということ、ある意味で大変な革命だったということ、大変な革命だという意味は、実証科学は、それまであらゆる知的営為の目的とされてきた真理の探求を放棄するということを意味している。それはもはや、真理の探究などとはいえない。真理などというものがこの世にあるのかどうかもわか

らないわけです。実証科学はもはや真理の探求などと大それたことは言わない。あるかないかも分からない真理を探究したって意味がないし、そんなもの人間の力で分かるはずがない。分かるのはせいぜいある理論がある領域の事実と照らし合わせて、その事実にあつてどうかで、つまり求めるのは仮説にすぎない。あくまで仮説です。次の日にはひっくりかえるかもしれない。もはや真理など探究しないという態度は一見謙虚です。だけど、私自身はこれはかなり深刻な問題を含んでいるという気がします。とりわけ社会科学の場合には。

もし学者が真理というものを探究しない、あるいは真理というものに関心を持たないとすれば、そしてわれわれはいったい何のために勉強するのか。何のために学問する必要があるのかという問題がどうしてもでてくる。だから本当は、仮説を作っただけじゃつまらないんです。仮説を作って、事実にも多少あつたとかあわないかって、そんな話をしたってつまらない。あんまり元気が出てこないんですね。私は、二〇世紀の社会科学がおしなべて衰退していつている一つの理由は、実証科学のやり方をあまりに無条件に導入してしまった点にあるように思います。科学的精神の背後で、言ってみれば、人間を突き動かすような、そういう真理の探究というものを放棄してしまった。そんなことなんてどうせできないんだ、ということになってしまった。

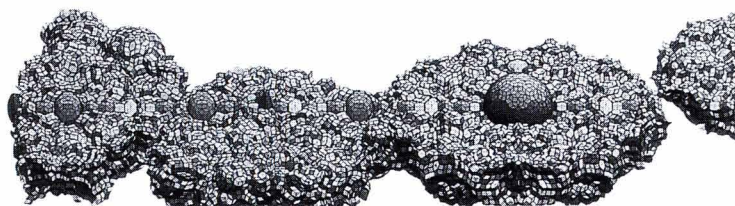
真理というものはひとつの世界観です。それは、われわれが世界を見る基本的な構造を与えるものだし、またわれわれの生に

意味を与える源泉でもある。むしろ、真理をあまりに安易に、しかも強引に唱えることが、一種のイデオロギーとなったり、全体主義的政治に結び付いたりする危険は承知していますし、実際にそうした歴史事実があつたことも無視するわけにはいかない。そこに実証主義が誕生した理由もあることは分かつています。しかし、それでも、われわれがそれに触れることによって戦慄を覚えるような真理、何か、世界や人間の本質に触れたという感覚をあらかじめ排除してしまったのでは、科学はわれわれの生の現実からどんどん離れて行ってしまうわけです。

そしてさらにいえば、これはじつは実証科学を導入した今世紀の学者たちの責任というよりも、二〇世紀という時代の必然といった方がよいのかもしれない。なぜなら、われわれは、もはやニュートンやスミ

スが持ちえた、神の作った自然秩序という思い込みも、ヘーゲルが持ちえた理性の狡智という歴史観も、マルクスのような唯物史観もはや持てないからです。社会は断片化され、歴史は目的を持たない事実の羅列となり、それらに意味を与えることはできなくなつた。なぜなら意味とは、それらの断片を、事実を、総合する試みにほかならず、しかし、それをあらかじめ総合する神も法則もはや存在しないからです。

すでにいったように、これはありがたいことでもあります。もはやわれわれは、マルクス主義者たちがやったような歴史の必然という奇妙なドグマに強制されることはないのですから。しかし、同時に失ったものも大きい。知識を得ることが、何らの生の指標も充実をも与えてくれないからです。これはまさにニーチェが予告したニヒリズムにほかなりません。ニーチェは、科学、



CG：山口哲（以下同）

合理的科学こそがニヒリズムをもたらすと予言したのでした。

さてそれがひとつです。それからもうひとつは次のようなことです。それは事実と理論は、社会科学の場合、実際にはそんなにきれいに分かれるものじゃないんですね。理論仮説をつくって、それを事実にあてはめる。だけど、事実にあっているかどうかなんて普通そんなに簡単には検証できません。しかも社会科学の場合には、社会についての何かを知ったり、何かの知識が得られたりしたとたんに今度はその知識が社会を動かしてしまう。われわれだって、その社会のなかに生きてるわけですから。われわれが社会についてある知識を得ることは、そのまま社会に影響を与える。つまり知識そのものがすでに社会的存在なんです。ですから、社会科学そのものがじつは社会的存在ということになる。ということは、社会科学そのものが社会を動かすということが、十分に起こりうる。つまり、社会科学の場合、向こう側に客観的な事実があつて、こちらに理論があるというふうな、そんな分け方はできない。要するに、社会科学においては実証的科学というものは成立しようがないのです。

だから別の言い方をすると、社会科学はつねに、現実のなかに入り込んでしまつて何らかの作用をするわけです。簡単にいえば、社会科学はイデオロギー的な作用をせざるをえない。これは社会科学の宿命です。ところが、さきほど述べたような世界観ならともなく、実際には、それが真理である

かないか、そんなこととは無関係なただか一つの仮説にすぎないものが、現実に関きかけてしまう。真理というやつかいなものを拒否した謙虚なはずのものが、ここでは横暴にも科学という客観性を装って現実に関きかける。イデオロギー的な役割を果たす。

これはかなり一般的な話です。一般論として、まあそういうことも言えるかということとは了承していただけたと思います。だがこれは実際の現実世界ではかなり重要なことで、しかももしかしたらかなり深刻な問題を生んでいるのかもしれない。

一足飛びに結論だけ言っておきますと、現代社会を対象にした社会科学をやるのはものすごく大変なことなのです。社会を、政治とか経済とか、何らかの断片に切り取って、それぞれの分野で何かを論じることは可能ですが、それでは社会の理解にはならない。実際には、どんな事象でも多様な側面を持っているし、他の事象と相互にからんでいる。一体それをどこで切り取ったのか、どの範囲の議論をしているのか、つねにそういうことに対する自覚が必要なのです。そこで少し具体的に一体どういうことがあるのかという話をしましょう。



ご存じのように、この数年間、日本では、経済改革論が大きな世論の流れを作ってきました。経済改革論でいわれたことは、現在の日本の経済システムは、アメリカなどの市場経済に比べると歪んだものである、

ということでした。銀行が企業に対して大きな力をもっていて、その銀行は大蔵省が統率している。銀行、大企業、それに中小企業の間に系列やグループができていて市場競争をしていない。それを統率するのは中央官庁で、官僚は市場の原則にも従わない

し、民主主義の原則にも反している。つまり日本の経済はまともな市場経済ではないし、政治はまともな民主主義ではない、というわけです。この官僚支配と馴れ合い構造はどこから出てきたのかというと、戦時中、戦争遂行のための国家統制の中から出てきたものである。つまり戦時体制、一種の全体主義体制が、現在までずっと続いている、という議論が出てきました。そこで経済改革の必要が叫ばれる。規制緩和をやり、官僚支配を廃止し、日本的経営という特異なものをやめ、市場の自由な競争にまかせるべきだ、という議論です。

これは、一見、正しそうに聞こえます。容易には反論しにくい。どうしてかという、経済学は、自由競争すれば概して市場はうまく機能するという考えを提供するからです。市場は、個人が自分の能力を自由に発揮できる場で、能力のあるものはそこで自分の能力を生かせる。しかもそのことは社会全体の活力につながる、と経済学は言う。だからこれは一見正しそうに聞こえる。一見正しそうに聞こえるけれども、本当にそれでうまくいくかというところではない。たとえば今言った規制緩和をし、外国資本でも何でも自由に商売できるようにすれば、地方都市の田園地帯は大規模ディスプレイスカウト店やその風景と全く調和しない開発の結果、美的なものも田園的豊かさもすぐに失ってしまうでしょう。あるいは効率の悪い商店街はつぶされてしまう。あるいは通信の規制緩和は一気に携帯電話を一般化した。これは便利な面もあるが、明らかに若者の文化や行動を変えた。これから

金融自由化で、アメリカ並に普通の人が自己責任で資産運用をしろ、という。これは確実に日本人の倫理観や金銭感を変えてゆくでしょう。つまり、ほんの少し考えただけでも、経済改革は、日本社会の構造や文化、地方都市の景観や生活のありかた、さらには日本人の精神のありかたに影響を与える。これは当然のことです。私には、概してこの影響はよい方向を向いているとは思われない。しかしそれを譲っても、経済の改革が、文化や精神や生活に影響を与えることはまちがいない、しかもそれがどのような種類のものかは基本的には科学的には予測不可能なものなのです。それにもかかわらず、経済学の立場から経済改革が必要だというとなれば、それはもはや科学でもなんでもなく、一つのイデオロギーです。しかも無責任で尊大なイデオロギーにはかなりません。

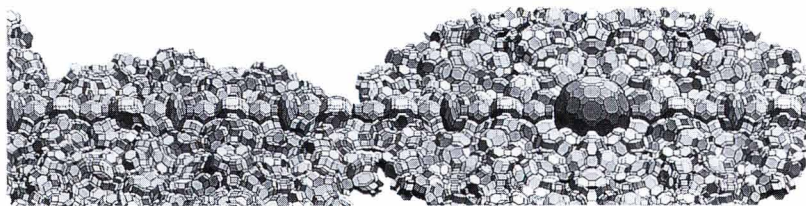
ではどうしてこうしたイデオロギーがそれほどまことしやかに流通してしまったのか。経済学者が誰かが強引にこのイデオロギーを吹聴したのか、そう問われるとそういうわけではないのです。だからことはもっと難しいのです。

たとえば流通経済学者がいて、流通を研究していると。この人は、日本の流通機構は不透明だから競争原理を導入すべきだと提案する。これはこれで流通経済学から導かれる結論でしょう。次に金融経済学者がいて、この人は、日本の金融システムは非効率だからこれを透明化して競争すべきだという話をする。さらに労働経済学者

がいて、かりに、日本の終身雇用は非効率で、もっと移動を自由にすべきだというとする。これらはかりに、そのかぎりではみんな経済学から出てくる結論だとします。(実際にはそんなに単純ではないのです。が。)これはすべて、部分的な話にすぎないのです。この局所的な話を全部足しあわせて、それで全体がうまくいくなどという保証はどこにもないのです。

実際には、たとえば、金融市場を自由化すれば、産業にまわるはずの長期的な資金がヘッジファンド的な短期の国際資本市場へ流れてしまう。これは産業に大きなダメージを与える。労働にも影響を与える。こうしたことは考慮されていないのです。ましてや、金融の自由化が、人々の心理や金銭感に影響を与えるなどということは一切考慮されていない。銀行システムを不安定化して、人々の不安心理をおおるというようなことさえ考慮されないでしょう。それも当然です。こうした、定量化できないもの、因果関係を法則化できないものは科学の方法になじまないからにはかなりません。だから、部分的には、かりに、経済学的に意味だとしても、それで全体を構成し、実際に実行すると、全体が変わってしまうんですね。全体がどういうふうになるかは誰も分からない。全体に対して経済学者は、誰も責任を持たない。誰もそこまで分からないんです。

だからたとえば、金融の自由化は、市場競争という観点からすれば、一応よさそうに思われる。しかし、それを、今この場合にこの日本で、この世界状況の中のこの日



本においてやるかどうかはまた別のことで、それが経済の全体にどういった影響を与えるか、社会生活にいったい何をもちたらずか、日本人全体の心理にどういったふうな影響をもたらすか。外国との関係で資本の流れがどうなるか、銀行家たちの心理にどういった影響を与えるか、そういう全体的な状況のなかで考えていかないと駄目だと思うんです。

さて、しかし、実際には話はそれでは終わりません。なぜなら、もしも、それぞれの分野の専門家がそれぞれの領域で発言しているだけならば、それぞれの分野の改革にすぎないはずだからです。しかし、現実には、そんな単純な話ではなく、経済改革は日本社会全体の大改革という話にまで膨れ上がってしまった。では一体ここには何があったのか。

ここにはもうひとつ奇妙な、イデオロギー作用というのか、もっと目に見えない、半ば無意識の情報操作のようなものがあつたと思うのです。それは、市場経済は効率的でよいのだ、という抽象理論がかなり単純化されて、そのまま現実にあてはめられてしまったということです。これはせいぜいのところかなり非現実的な抽象理論ですが、市場はうまくいく、というふうな抽象的な理論から出発して、それは科学的に証明されるんだという話になり、それを日本経済に適用してしまうと、一体、何が起るか、予想もつかないようなことになってしまう。本来、社会科学あるいは社会についての学問は、社会を動かしているシス

テム全体を視野に入れ、そのシステム全体がどういったふうに関連しながら動き、それが人間生活にどういった影響を与えるかを考察しないと駄目です。ところが、科学が完全に分断化され専門化されてしまつて、それぞれのところでそれぞれの人達が、自分のやつてゐることは正しいんだと思つてゐる。そして、それを合成するときには、きわめて分かりやすい単純化された考え方が便宜的にそこに当てはめられるのです。金融理論はこれで正しいんだ、労働のほうはこれで正しいんだと。それらをまとめる大きな枠組みはというと、抽象的な市場論を単純化して、官僚支配対自由競争というような単純な図式を構成し、そこにこの全体像を押し込んでしまふ。マスコミやある種のジャーナリズムがこの種の単純で一般受けする図式を宣伝し、大きな方向を決めてしまふのです。

実際には、この市場競争の経済理論はアメリカ経済学のなかで作られ、それは当然ながらアメリカという社会の事情を反映している。しかし、それをいったん抽象化して、科学の名を与え、客観的な装いをほどこしているために、アメリカ経済学だとは誰も思わない。むしろ、アメリカという土壌を越えて普遍化できる部分はあります。しかし、その全体の構図はアメリカ社会に最も適合的だし、その個人主義的前提、自由競争、情報公開や自己責任といった考えはやはりアメリカ社会の価値観と最も適合的であることはまちがいないでしょう。ところがそれを日本にそのまま適用しようとしてもそうはうまくいかない。うまくい

かないのは当然です。そもそも市場が、人間の生活の在り方や価値観と切り離されてあるなどということはありえないからです。そして人間の生活や価値観は、それぞれの社会のありかたや文化や歴史と切り離せない。むしろ、価値観や文化を固定的に捕える必要はないのですが、少なくとも、数百年程度で大変化を起こすものでもないし、また経済の部分だけを、日本人の価値観や文化と無関係に動かすこともできません。これは善し悪しの問題でもないし、好き嫌いの問題でもないのです。そのことを前提条件として考えなければ大変な誤りを犯すと言いたいだけです。

ところが、実際には、市場競争対官僚的規制、個人の自由競争対国家的・集团的経済、民主主義対官僚主義といったような、あまりにわかりやすく大衆受けするキャッチフレーズのような図式がここに当てはめられて、全体の構図を決めてしまつたのです。この背景には、社会主義が崩壊した冷戦以降の時代は、もはや国家主義的、官僚主義的経済運営は終わり、世界的に市場競争と民主主義の時代になったというフランス・フクヤマ的なこれまたあまりに単純化されたヴィジョンがありました。九〇年代の冷戦以降の世界は、グローバルな市場競争時代だという、それこそ科学的でもないでもない、もっと端的に言えば、アメリカ的イデオロギーがここにかぶさつたわけです。

このあたりのことはそれ自体が大きなテーマでまた別の機会でもあれば論じたいと思いますが、今日はあくまで、社会科学と

現実との関係を中心にお話してきたので、もうそろそろおしまいにしましょう。

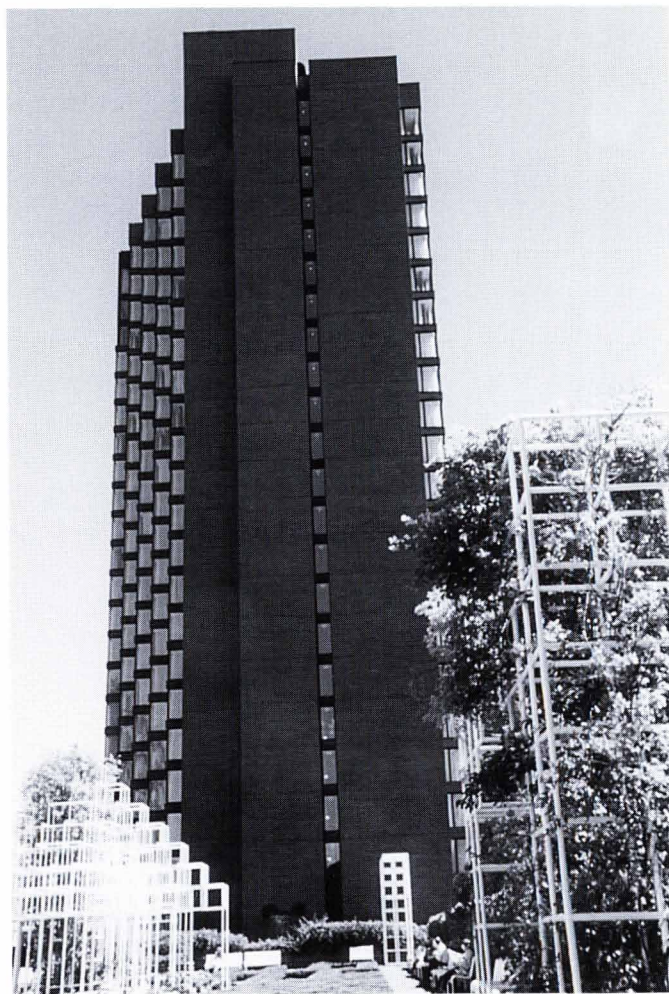
おおよそ私の言いたいことはお分かりいただけたのではないかと思います。結論として言えば、社会科学をやるということは、そういう、特定の状況、自分のやっていることが、その社会全体のシステムのなかで、一体どういうような役割を果たしてしまうのか。そのことを、まず第一に反省的に知るといことです。それから同時に、自分自身のやっていることも含めて、その社会の全体的状況、つまり本来、それから独立しているはずの経済学や政治学といったものが、そのなかに取り込まれ、しかもそれによってある方向に動かされてゆくような、社会全体というものの動きをどうい

うふうに理解するのか、どういうふうに捉えるのか、そういう見方をもっておかなければならないということでしょう。

ではそういう目を養うのは科学を通してかという、そうではないのです。これは、もう、いわゆる科学ではありません。ましてや、自然科学的な方法の科学でやれることではないのです。じゃ、それはどういうふうにやればいいのかというこれは難しい。本来、解答はないでしょう。しかし、少なくとも、学問それ自体を取り込んでしまう社会の在り方を、同時にどこかで眺めていなければならぬ。そのためには、特定の科学にこだわるのではなく、そうしたものの認識論的な限界を知った上で、それらを総合化する視線をもっていなければならぬ

い。そのためには、思想的、歴史的なものの方が根底になければならぬだろう、と私は考えます。これはたしかに大変難しいことでしょう。そういう意味で、私は今の社会科学というか、社会についての知識に課されている仕事は、非常に大きい、大事なものがあると思っています。志のある人は、こうした困難なことを少しずつ一緒にやってゆければ、それはそれで楽しくも有意義なことでしょう。これで私の話は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(一九九九年四月一二日、京都大学人間・環境学フォーラムにおける講演にもとづく)



橋をかける

——当麻寺の練供養をめぐる——

西村謙司

KENJI NISHIMURA



奈良県北葛城郡当麻町に当麻曼荼羅で知られる当麻寺という寺がある。この寺には、年に一度、長さ一〇メートル程の橋を境内に架ける慣わしがある。橋は、境内の東西を貫いて架けられ、練供養という法会の舞台となつて「極楽堂」と「娑婆堂」をつなぐ。年に一度しか架けられることのない仮設の構築物であるが、それゆえに、橋を架けることの意味が端的に表わされ、宗教建築の意味を考える手がかりを与えてくれる。

の中間にあり、奈良盆地の西域を限定づけている山である。その雌雄双峰の姿は、大和平野のどの位置からも望まれ、古くから陽昇る神山、三輪山と対照的に、陽の沈みゆく山として、大和平野に住む人々の世界を限定してきた。

また、二上山の西側には、孝徳天皇陵、推古天皇陵、用明天皇陵、小野妹子の墓など、飛鳥時代とよばれる時代を形成した天皇と貴族達の墳墓が集まつており、山々によって囲われてできた盆地の外側にかれらが埋葬されたことがわかつていく。おそらく当時の人たちは盆地の内側を此岸、盆地の外を彼岸と見ていたのであろう。盆地を形づくる山々を「境界」と見ることによつて、大和平野の人たちは自分たちのいる場所を、彼岸ではなく此岸として、意味づけていたのである。白鳳時代にまでその創建の歴史を遡ることができる当麻寺が建てられているのは、そのような大和平野の人々の世界を限定し意味づける「境界」という性格をもつた二上山の東麓であり、当麻寺の橋が架けられるのは此岸としての盆地の内側からである。

また、二上山の西側には、孝徳天皇陵、推古天皇陵、用明天皇陵、小野妹子の墓など、飛鳥時代とよばれる時代を形成した天皇と貴族達の墳墓が集まつており、山々によって囲われてできた盆地の外側にかれらが埋葬されたことがわかつていく。おそらく当時の人たちは盆地の内側を此岸、盆地の外を彼岸と見ていたのであろう。盆地を形づくる山々を「境界」と見ることによつて、大和平野の人たちは自分たちのいる場所を、彼岸ではなく此岸として、意味づけていたのである。白鳳時代にまでその創建の歴史を遡ることができる当麻寺が建てられているのは、そのような大和平野の人々の世界を限定し意味づける「境界」という性格をもつた二上山の東麓であり、当麻寺の橋が架けられるのは此岸としての盆地の内側からである。

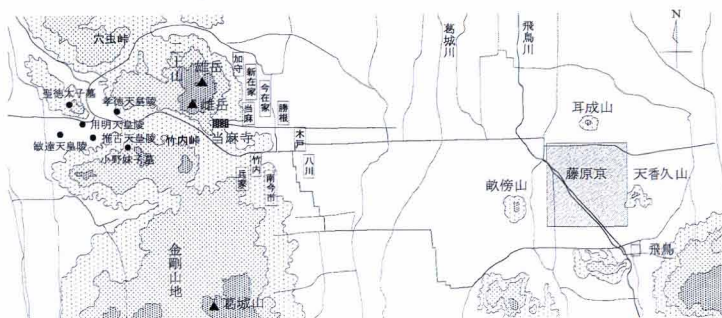
来迎橋

当麻寺に橋が架けられるのは、「二十五菩薩練供養」と呼ばれる行道が行われる五

月一四日である。「来迎橋」と名づけられたこの橋は、練供養のために特別に仮設されるもので、脚のついた幅一・四五メートル長さ二・七メートル程の長方形の板片を三六個つなぎ合わせてつくられている。この仮設の橋は、境内の西方に位置する「極楽堂」の高さ二メートル程の床面から、水平方向に、板片をつなぎながら一〇メートル以上離れた東の「娑婆堂」の方に伸びている。板片をつないだ橋の全長は九六・五メートルであるから、現実には、橋の東端は「娑婆堂」に接しているわけではなく地面につけられており、橋の東端から数メートル東へ離れたところに「娑婆堂」が位置している。この橋は、通常われわれが眼にする橋と違って同じ高さの水平面の間をつないでいるわけではない。橋の西端を床面に、東端を地面につけ、西から東へゆるやかに傾斜している橋なのである。来迎橋は、そのような特殊な形をもって橋の両端の意味の差異を顕わしながら、極楽世界と娑婆世界との境を強調するとともに、断絶した両者をつなぐ支えとして造形化されている。

二十五菩薩練供養

二上山の西に陽が傾きかける午後四時頃、大勢の人々の間をかきわけて輿に載せられ



当麻寺周辺の略図 枠で囲っているのは講の名前（作図：三浦健史）

二上山と当麻寺

当麻寺は、二上山東麓に位置し、西から東へ緩やかに傾斜した扇状地の一帯、当麻の地に建てられている。寺地の標高は約一〇メートルである。境内に立ち、西方へ目をやると、二上山の二つの峰、雄岳・雌岳（標高約五四五メートル）の頭が不思議な親密さをもってあらわれ、東方を眺めると、奈良盆地の底にひろがる町の家並みと大和三山の姿がおぼろげに望まれる。二上山は、生駒葛城山系

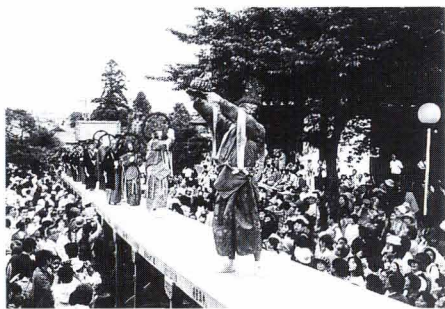
西村謙司（にしむら けんじ）
一九六九年、広島県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程に在籍中。日本の浄土教建築を中心に宗教建築の場所論的研究を進めている。



練供養の舞台の配置 (作図：三浦健史)

た中将法如尼像が娑婆堂に入り、練供養が始まる。五月一日は旧暦の三月一四日にあたり、この日は当麻寺で中将姫が阿弥陀聖衆に迎えられ往生したと伝えられる日である。娑婆堂の中にいる中将法如尼像は生死の境のただなかにいて弥陀の来迎を待つ中将姫を表している。

しばらくすると、極楽堂から菩薩聖衆が橋を渡って娑婆堂へ向かってくる。まず面や装束を身に纏った聖衆が介添に導かれ来迎橋を列に歩む。この菩薩聖衆が娑婆堂につくころ、観音・勢至が旋舞の型をくりかえしながら橋を渡って娑婆堂に向ってくる。娑婆堂に到着した観音と勢至は地に立ち、堂内の中将法如尼を極楽浄土へ迎え入れる。次の瞬間には、法如尼化生像と名づけられた尊像が現れ、中将姫の極楽往生の奇蹟が知らされる。そして化生像とともに観音・勢至は向きを変え、二十五菩薩を引き連れて再び橋を渡って西の極楽堂へ帰っていく。

来迎橋を渡る菩薩聖衆
(筆者撮影)来迎橋を渡る化生像と観音菩薩
(筆者撮影)

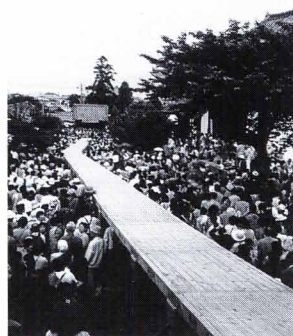
練供養は当麻寺に伝来する中将姫物語を視覚化する往生劇である。練供養に集まる人々は、一連の往生劇を見ることによって、娑婆世界において極楽往生を願いながら死を迎える中将姫の臨終と往生の現場に立ち会う。この世の命を終え、極楽世界へ往生するという奇蹟の一瞬をともにするのである。橋を舞台とし、虚構としての往生劇が演じられることによって、現実の世界が質を変え、現実世界と虚構世界がとけ合う時が生起する。この練供養のなかで来迎橋は、その往生劇を支える舞台としての役割を果たし、虚実入り交じった時を生起させる跳躍板としてはたらいっている。

「境界」とは、此岸と彼岸、娑婆と極楽、現実と虚構のように世界を二分する側面をもつが、境界の上に橋が架けられることによって絶対的に異なる二つの世界が、異なったままにとけ合う事態が起こりうることになる。ともすれば平板な状況に陥ってしまうがちな日常世界の中に、橋が架けられることによって、日常世界が単なる有限の閉塞した世界ではなく、境界によって限定されながらも境界を越える世界へと通じゆく可能性をもつ世界として現わされて

くるのである。来迎橋はそうした日常世界の境界に秘められた世界の重層性をわれわれに垣間見せ、日常世界に厚みのあることを知らせてくれる導きの橋なのである。

橋と講

最後にもう一点、来迎橋について追記しておきたい。この仮設の橋を形づくる三六個の板片の一つ一つを見ると、それぞれに「当麻講中」、「勝根講中」などと記されているのを確かめることができる。橋は当麻寺を中心として広がる「講」と呼ばれる組織によって奉納されてできているのである。練供養自体も講組織の講員によって行われるが、来迎橋が架けられるのも、これらの講組織の支えによっている。当麻寺の練供養やそこでの架橋は、講組織との密接な関わりをなかで成立しうる事態なのである。逆に、練供養を行い、来迎橋を架けることが、これらの講の組織形成の紐帯となっているとも考えられる。今後は、この講組織のシステムと来迎橋の架橋の関わりを明らかにしていきたいと考えている。



極楽堂から来迎橋、娑婆堂をのぞむ (筆者撮影)

成人T細胞白血病ウイルスとは何か

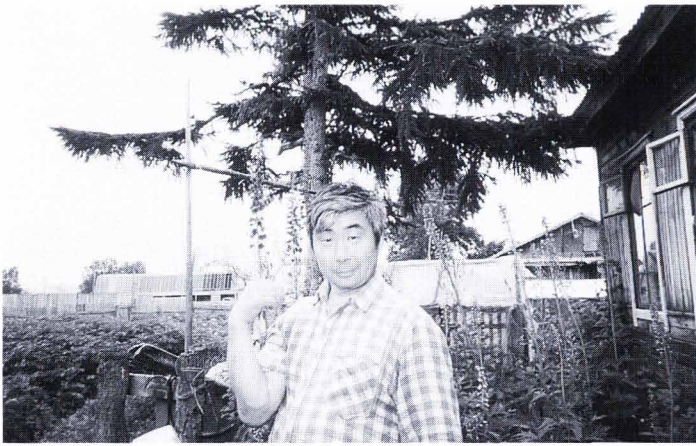
——ロシア先住民族における疫学調査
山下満左裕

MASAHIRO YAMASHITA



ロシアにはシベリアを中心として約三〇のモンゴロイド系先住民族が住む。彼らはロシアの先住の民としてコーカソイドがシベリアに来る以前から独自の文化を守り暮らしてきた。われわれ、ロシアと日本の共同研究チームは一九九四年と一九九五年に成人T細胞白血病ウイルス（HTLV）の疫学研究を行うためにカムチャツカとサハリンを訪れた。

HTLVは主に成人において重篤な白血



サハリン少数民族のニブヒの男性。採血後の様子

病をおこすウイルスである。HTLVは人で初めてその存在が確認されたレトロウイルスであり、しかも癌を起こすことから世界的な規模でその研究が行われた。成人T細胞白血病は当初、九州などの日本の西南部に多く見られ、その後の調査によりこのウイルスの世界分布は非常にユニークなものであることがわかった。日本西南部に始まりアイヌ、南米先住民族、オーストラリアのアボリジニやピグミーなど世界のさまざまな少数民族がこのウイルスに感染している。HTLVは非常に感染性が低く母乳を通じて母子感染をし家族集積性があることから、このウイルスの伝播は過去のウイルスキャリアーの移動と密接に関連していると考えられている。たとえばカリブ海に住む人々のウイルスは西アフリカに広がっているウイルスと遺伝子レベルにおいて類似が著しい。これは過去の奴隷貿易によって大量のアフリカ黒人がカリブ海諸島に強制移動させられたためであろう。では南米の先住民族が保有するウイルスはどこからやってきたのであろうか。

世界各地から得られたウイルスの遺伝子解析を比較した結果、南米先住民族が持つウイルスはカリブ諸島のHTLV-Iやアフリカに存在するウイルスとは著しく異なり、むしろ日本のHTLV-IIに類似することがわかった。南米の先住民族は日本や

山下満左裕（やました まさひろ）
一九六九年、大阪府生まれ。神戸大学理学部卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。日本学術振興会の特別研究員として京都大学ウイルス研究所においてレトロウイルスの伝播に関する研究に従事。

東アジアの人々と同じくモンゴロイドである。彼らの新世界への拡散は数万年前にそのころ陸続きであったとされるベーリング海峡を渡ったことによるとされる。それからウイルスの残存がベーリング海峡近辺にあるのではないかという疑問が浮かぶ。新世界側ではやはりカナダの先住民族やエスキモーが低い頻度ながらウイルスを持っていてという情報がある。このような状況のなか今回のわれわれの海外調査の目的は、シベリアのロシア先住民族でのウイルスキャリアーの存在の有無を明らかにすることであった。

ウイルス感染を確認するためには、血液中にウイルスに対する抗体が存在することを抗原抗体反応を用いて調べなければならぬ。その他にもウイルス感染細胞である白血球におけるウイルス遺伝子の検索や感染性のウイルス分離などが必須とされる。そのため、われわれの調査・研究には血液の収集が必要となる。調査対象国の共同研究者の研究施設が整っている場合は現地での抗体検査が可能であるが、そうでない場合はひたすら血液サンプルの回収に時間を費やすばかりである。ロシアのカムチャツカの状況は残念ながら後者であった。そのためわれわれは採血バッグと呼ばれる針とビニール袋が一緒になった採血器具を大量にスーツケースに押し込み、海外調査のた

めに旅立った。

伊丹空港から新潟を経由してウラジオストックでロシアに入国した。当地で一泊し、調査対象場所のカムチャツカの州都のペトロパブロフスクカムチャツキーに向けて出発。到着後、共同研究者との打ち合わせを行った。旅費をなるべく安く上げたかったし、ホテルがなかったためもあった、ここでは共同研究者の病院の病室に宿泊。次の日は休暇の意味もかねて打ち合わせの後は天然温泉に車で行った。七月下旬にもかかわらず少し肌寒く、温度の低い温泉に入っても一向に体は温まらなかった。両替や航空券の確保などの雑用をこなしつつ、三日後には二つのチームに別れて別々の場所に向かった。

私とロシア人二人のグループは飛行機でさらに北に向かった。われわれの次の拠点となるオソロという村はカムチャツカ半島の付け根に位置する。そこでも病院長室のソファで三、四泊した。道路は舗装されておらずジープに乗って町まで採血に行く。対象となる人からの聞き込みにより当地ではコリヤクが主要な民族であることがわかる。アレウトやイテリメンなどの民族の幾人からも採血ができた。結果的に一週間で別グループと併せて四〇〇人の少数民族からの血液を集めることができ、充分な量の検体を得ることができたと安心した。

ペトロパブロフスクカムチャツキーで別働隊と合流。サハリン行きの事務処理をしつつお互いの状況の情報交換を行った。別グループはヘリコプターや戦車に乗ったと

いうおもしろそうな話しをした。このグループに採取した血液を託し（彼らは先に日本に帰国した）、われわれは次の目的地であるサハリン島に向かった。

サハリンの中心地のユジノサハリンスクに着いた後、例によって共同研究者の病院の病室に滞在した。採血ならびに調査活動が円滑に運ぶよう行政関連の役所に赴き、われわれの研究を説明し便宜を図ってもらえるように折衝した。

二、三日後に夜行列車に乗ってサハリン北部にあるノグリキという町に一晩かけて行った。ノグリキにはニブヒと呼ばれる少数民族が住み、前調査でHTLV-Iの感染キャリアーがいる可能性が指摘されていた。その知見の確認のためにさらに今回およそ一〇〇検体の血液を採取した。サハリンでは関係者の家にホームステイさせてもらったりして、サケ料理を中心としたサハリンの家庭料理なども堪能できた。

極東ロシアの貴重な血液サンプルを日本に無事に持ち帰った。翌日からは検体処理。研究室のメンバーのほとんどすべてに助けをもらいながら血液の処理を行い、抗ウイルス抗体を検査した。カムチャツカの検体はすべて陰性。サハリンでは数は少ないながらも四人のHTLV-Iキャリアーを確



サハリンにて。漁船に乗せてもらい、ニブヒ族の村を訪ねる。前方に写っているのが集落

認した。ウイルス遺伝子を調べてみたところ予想通り南米や日本人などと類似するウイルスであることが明らかになった。

今回のカムチャツカの調査ではウイルスの感染は広がっていないことがわかったが、チュクチ半島などシベリアにはいまだ調査されていない少数民族も多く、HTLVの過去の伝播を明らかにするためにはさらなる調査が必要であろう。

豊饒なるニューヨーク

水野尚之

NAOYUKI MIZUNO



水野尚之（みずの なおゆき）
一九五四年、岐阜県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程中退。京都大学総合人間学部、同大学院人間・環境学研究科助教授。ヘンリー・ジェイムズを中心に、十九世紀から二十世紀にかけてのアメリカ文学を研究。訳書に『ヘンリー・ジェイムズ自伝―ある少年の思い出』（共訳、臨川書店、一九九四年）など。

大学院生としてニューヨークに住みはじめた私は、まもなく下宿の近くの奇妙な建物に興味を持った。ニューヨーク市に現存する最古の建物と言われるその屋敷は、一六六一年にジョン・バウン（John Bowne）というクエーカー教徒が建てたものだという。そばにはクエーカー教徒たちの集会所も、おびただしい数の墓とともに残っている。ジョン・バウンの苦難の生涯は、ニューヨークの歴史と密接に関わっていたのだ。

当時この地はまだ「ニューヨーク」では



バウン・ハウス。年代不詳。建物はほぼこのままの形で現存する

BOWNE HOUSE

From an old print in the Phelps Stokes Collection
NEW YORK PUBLIC LIBRARY より

なく、オランダ人総督ピーター・スタイヴザント（Peter Stuyvesant）が統治するニュー・ネザールランド（New Netherland）植民地だった。総督は、自宅でクエーカー教徒に集会を行なわせていた農夫ジョン・バウンを逮捕した。そしてジョンがいかなる懐柔策や脅しにも屈しないと見るや、総督は彼を植民地から追放する。病床の妻や何人もの子供たちを家に残しつつも、この敬虔なるクエーカー教徒は一切の抵抗をせずに追放を受け入れている。

皮肉なことに、ジョンを追放したいきざつを記したスタイヴザント総督の書簡によって、本国のオランダ西インド会社はニュー・ネザールランド植民地における宗教的迫害の実態を知ることになった。そして総督の方針が植民地における人口の減少をもたらし、移民の流入を阻害すると判断した西インド会社は、総督に行動を改めるよう指示する。またジョン・バウンに対しても、ニュー・ネザールランド植民地へ帰るのを許可している。そして追放から一年半ぶりに、ジョンは植民地の家族のもとへ劇的な帰還を果たすのである。

植民地をめぐる状況は、本国のオランダ西インド会社の子想を上回る形で進展する。ジョンが戻ってわずか五か月後の一六六四

年八月、この植民地はイギリス軍の侵攻を受ける。そして翌月には、スタイヴザント総督がほとんど何の抵抗も試みることができぬまま、オランダは植民地の支配権をイギリスに明け渡すことを余儀なくされる。これとともにニュー・ネザールランドという名称は消滅し、この植民地はニュー・ヨークと命名されるのである。

時代を下って一九世紀に移ろう。ニューヨーク生まれの作家の活躍が目立ち始める頃である。ハーマン・メルヴィル（Herman Melville）は一八一九年にマンハッタン島の南端で生まれた。彼の大作『白鯨』の冒頭近くの文は、ニューヨークが何よりもまず大西洋に面した港であるという事実を、あらためて思い起こさせる。

夢みがちな安息日の午後、この港町を歩いてみたまえ。……町中いたるところ、物言わぬ番兵のように、何千という男たちが、海のまぼろしに憑かれたようにぼんやりと立っているではないか。杭にもたれている者、突堤の先端に腰をおろしている者、中国から来た船の舷壁にこしている者があるかと思うと、少しでもよく海を見たいのか、索具のなかの高いところまで登っている者もいる。……と

(1) *Moby-Dick; or, the Whale*, 1851.

(2) *A Small Boy and Others*, 1913.

ころが見よ！ もっと多くの人々が、まっすぐ海を目指して歩いて来る。まるで海に飛び込みそうな勢いではないか。

陸に住む者たちが目の前の海に対して抱く漠とした期待感や焦燥感を、見事に表現した一節と言えよう。また『白鯨』が、エイハブ船長がモービー・ディックという白い鯨を追いかけるだけの作品ではないことも、この文章から十分に予感されよう。何かやむにやまれぬ力につき動かされるように、語り手は、そして物語も船出していくのである。

メルヴィルに遅れて生まれること二九年。ヘンリー・ジェイムズ（Henry James）にとってもニューヨークは幼少期を過ごした大切な場所である。一八五〇年代のニューヨークは、まだ田舎ののどかさを残していた。後年ジェイムズが幼少期を回想して書いた『少年と他の人々』²⁴には、当時のニューヨークの姿が少年の感受性を通して生き生きと描かれている。

もちろん断然面白かったのは、もし間違っていなければ一八丁目の北東の角にあった、農園、と私が思ったところだった。「構内」には大きな茶色の家があり、さまざまな動物がいた。……見えるのは、草を食むもの、つつくもの、行列をなしているもの、数は多くないが色々な動物で、すべて立派な面構えをしていた。優れた体格と色合いで気品のある牛が二、三頭おり、子山羊が二、三頭何かをかじっている。とりわけ覚えているのは、も

っと数の多い孔雀やほろほろ鳥である。

動物が草を食む光景をこのように柵越しに見ている少年の姿は、傍観者たる宿命を背負って成長していく自分のその後の人生を暗示している、とジェイムズは書いている。しかし彼はやがて、小説を書くことを天職と自覚し、人生の傍観者たる自らの立場を、強烈な想像力によって創作へと結びつけていくのだ。ニューヨークももちろん彼の小説の重要な舞台のひとつになる。

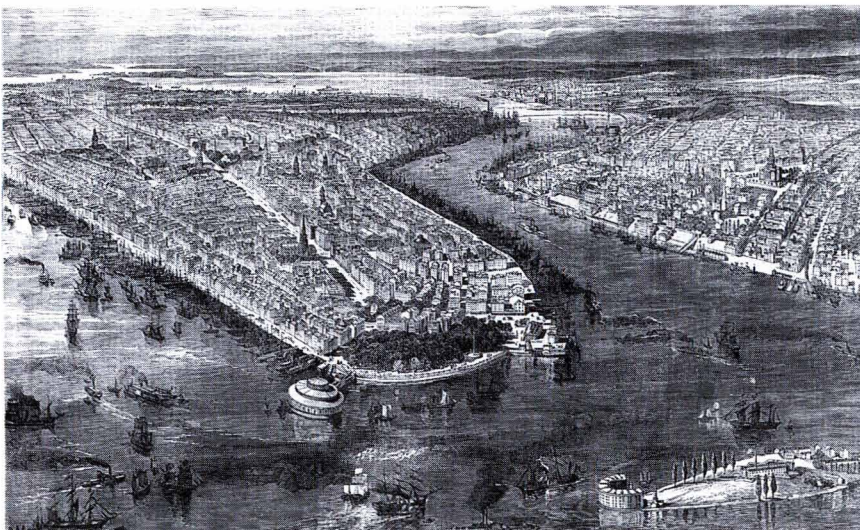
二十世紀に入ればもう、ニューヨークはおなじみの摩天楼のそびえ立つ大都会である。その繁栄の影にかくれた虚無感や、都市に住む人間が感じる疎外感を扱った文学作品が登場してくる。それらを正面から描きだす作品にはもちろん迫力を感じさせられるが、なかには深刻なテーマをお洒落に扱う作家もいる。ポール・オースター（Paul Auster）もそのような現代作家のひとつである。

ニューヨークは果てしない空間、無限の階段のある迷路だった。どんなに遠くまで歩こうと、またどんなによく隣人や街路を知るようになろうと、彼はいつも自分が迷子になった気持ちがあった。……気分よく散歩している時には、自分がどこにも存在しないように感じられた。これこそ彼が求めてきた状態だった。つまりどこにも存在しないことだ。ニューヨークはまさに、彼が自分のまわりに作り上げた非存在の場所だった。そして彼は二度とニューヨークから離れまいと思

った。

この小説の題名『シティ・オブ・グラス』²⁵が示すように、ニューヨークは林立する摩天楼のガラスが人間を取り巻く都市である。そしてこのガラスは、歩く人を映す鏡にもなる。ここでは人間は、鏡に映すことによってしか自分の姿を確認できない。オースターの小説ではしばしば、主人公が観察する他の人間が鏡となるのだ。

ニューヨークは、一週間ほどのバック旅行の旅行者にとっても、さまざまな種類の「クールな」エンターテインメントを提供してくれる場所である。しかしこの都市はまた、この文化を一生の研究対象としようと志した者にとっても、知的好奇心を無限に刺激してくれる文化の宝庫なのである。



1850年代のニューヨーク

(23) City of Glass, 1985.

参考文献

・ Herbert F. Rindard transcribed and edited, *Journal of John Bowne, 1650-1694* (New Orleans: Friends of the Queensborough Community College Library and Polytechnic, 1975).
・ Philip Horne, *John Bowne and Freedom of Religion in New Netherland* (New York: Bowne & Co. Inc, 1973).

推理小説と学芸員……………泉 武夫

TAKEO IZUMI



泉 武夫（いずみ たけお）
 一九五四年、宮城県生まれ。東北大学大学院文学研究科博士
 課程後期中退。文学博士。京都国立博物館学芸課主任研究官。
 京都大学大学院人間・環境学研究科客員教授。主な著書に
 『絵は語る』と『涅槃図』（平凡社、一九九四年、『仏画の造形』
 （吉川弘文館、一九九五年）、『み仏の絵に近づく』（新潮社、
 一九九九年）などがある。

博物館美術館の学芸員（キュレーター）

や館長を主人公にした推理小説がある。ア
 ーロン・エルキンズの『偽りの名画』『一
 瞬の光』『画商の罟』（ハヤカワ文庫）や、
 トマス・ホーヴィングの『名画狩り』（文
 春文庫）などがそうである。日本では学芸
 員といっても一般にはなんのことかわから
 ない。博物館美術館で作品の保管・展示・
 研究に当たったり、展覧会を企画したりす
 る職種であるが、美術史の講座をもつ大学
 の専攻学生でも卒業まぎわに初めて知るこ
 とが、往々にしてあるほど知名度は低い。
 この仕事をしていると時々、そんな職業が
 あるんだったら、なれるように努力するん
 だった、という感想を聞くことがよくある
 し、じつさいにこのひと学芸員にしたらも
 っと活躍できるのに惜しい、と思う人材も
 いる（現実には、学芸員資格を持った人は
 年に二、三千人輩出するものの、その職種
 に就けるひとは、一人いるかないかであ
 る）。最近では日本でも画商のギャラリ
 ーに詰めている人のことまでキュレーターと
 呼んだりするので、カタカナ名のほうがそ
 のうち流行るかもしれない。

初めに挙げた作品は推理小説なので、新
 しく出てきた絵画が本物かどうかきびしい
 判断を迫られたり、絵画のすり替えがあつ

たり、マフィアがらみの命の危険があつた
 りと、エンターテインメント的要素がふん
 だんに盛り込まれている。絵画の真贋の決
 め手や、コレクターとの駆け引きなど、わ
 れわれにも身につまされるくだりもあり、
 なかなか面白い。ただし、エルキンズの小
 説とホーヴィングの小説とは、主役の行
 動パターンが違う。これは、主役が学芸員
 という現場の研究者であるか、あるいは館
 長という組織の長であるかという立場の違
 いから来るようだ。エルキンズの小説中の
 学芸員は、ときたま現実離れたドンパチ
 騒ぎに巻き込まれるものの、基本的に絵を
 観察して研究し、その位置づけを考えるこ
 とに仕事の中心を置いている。いっぽう、
 ホーヴィングの小説の美術館館長は、絵の
 評価を見さだめる点では学芸員と共通なの
 だが、その絵を入手するために美術館の大
 口会員に金銭的な援助をあおぎ、理事会で
 は敵対する委員をやりこめて予算獲得をは
 かり、作品購入に到達するという点に中心
 を置いている。話を極端化すれば、学芸員
 のほうは、たとえ最終的に自分の美術館の
 所蔵にならなかつたとしても、その作品が
 この世に存在し、正当に評価されるに至る
 ならば、それなりに満足するが、館長のほ
 うは作品を入手できなければ意味がないと

考えている。研究者と経営者の感覚の違い
 といえるかもしれない。

ホーヴィングは、じつは世界三大美術館
 のひとつといわれるニューヨークのメトロ
 ポリタン美術館の館長をつとめた人だ。小
 説に描かれている内容は、実体験にもとづ
 いているだろうから、人気の美術館の館長
 職がどのようなものかを知りたい人には重
 宝である。だが、わたしの知人でアメリカ
 のボストン美術館の学芸員は、ホーヴィン
 グの小説を読んでから、ますます自分は館
 長職に向いていないというか、館長にはた
 とえチャンスがあつてもなりたくない、と
 考えるにいたつたそうだ。

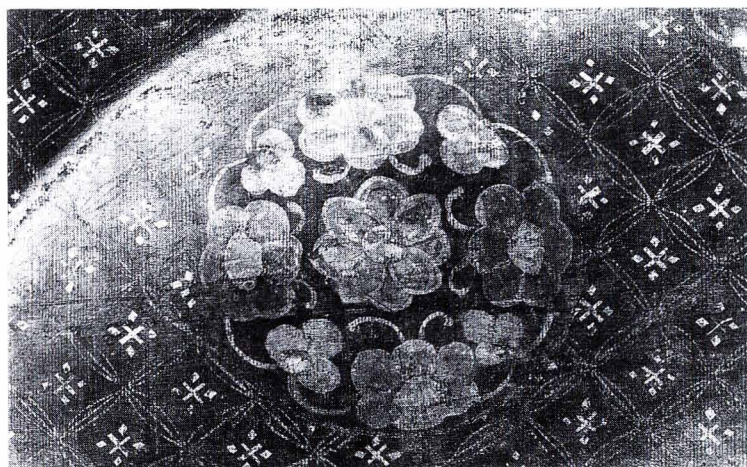
そのアメリカでは現在、各地の美術館の
 館長職がよく空いている。なり手がなかな
 かないとのこと。一九八〇年代、アメリ
 カ経済が低調だったときには美術館はリス
 トラの嵐で、ひとつの美術館の各セクショ
 ンで毎年定員を削減する事態が現実になり
 ていた。定年を待つて補充を見合せるので
 はなく、即刻fire（解雇）である。リストラ
 やボーナス・カットを断行せざるをえない
 立場の館長の精神的苦痛も並大抵ではなく、
 断行した直後から職員にあわせる顔がない
 と考えるのか、三箇月くらい行方をくらま
 すのが常だそうだ。そうした手腕も要求さ

れる館長職が敬遠されるのは、よく理解できる。リストラ時代を生き延びてきたボストン美術館の知りあいの学芸員は、現今の日本の国立博物館・美術館の独立行政法人化を本気で心配してくれている。文化を効率で測るあやまちを、身をもって体験しているからである。

話を日本の学芸員にもどそう。学芸員（京都国立博物館の場合は研究員）は展覧会の企画も行なうと前述したが、当館では毎年秋に館独自の特別展覧会を開催している。これが学芸員の研究発表の場をかねることにもなっている。創立百周年に当たっていた一九九八年からは、展覧会の開催にあわせて国際シンポジウムを行なうようになり、国際色豊かな事業に様変わりしつつある。たまたま、わたしは一九九九年秋の特別展覧会を企画することになり、ない智恵をしぼるはめになった。わたしの専門は平安・鎌倉時代の仏画を中心とする日本仏教絵画史である。一般にはとつきにくいこのジャンルの作品をどうやって“魅”せるか。欧米で流行りのニューアート・ヒストリー風に迫るのは力にあまり（もう流行はそろそろ下火になっているそうだが）、ジェンダーの大鈍をふりかざすのも穢りに乏しい。迷想を重ねたあげく、儀礼との関わりという視点を設定することにした。美術史での注目される学説が提示される時というのは、思うところ、研究者がまったく現代的な視野に立って鋭い考察をめぐらすか、またはとことん作品が生み出された当時に研究者がわが身を置いて想像力を働かせるか、どちらかの場合に限られるようだ。頭がキレ

る場合は前者でもいいが、キレない場合は後者に徹するしかない。後者に徹したところで、わたしにひらめいたのが「儀礼」なのである。

平安仏画の美の質と密度の高さは、専門家や好事家の間では周知のことだが、その当時は美術作品として制作されたわけではなく、ほとんどが儀礼で用いられるために描かれたものだった。しかも、儀礼の本尊となる画像制作に際して、美をつくせばつくすほど、儀礼効果＝功德が大きいと考えられていたのである。まさに信仰と美が一体となった時代だった。展覧会ではその美の様相を儀礼とのかかわりから探ってみたのだが、館蔵品だけではなく諸寺院・諸家



十二天像のうち 地天 膝部の文様

から名品を拝借することになる。特別仕様のケースの大きさやら、吊り金具の数と場所、吊り紐を隠す仕掛けやら、頭を悩ます事項は数限りない。それはともかく、これらの作品を会場に展示して最も印象的だったのは、公的儀礼の本尊画像のすさまじい迫力であった。平安時代の遺品そのものはないので、後世の転写本を参考にするほかないのだが、それでも四メートル近い画像がぞくぞくと目の前に展開すると圧倒的である。その巨大な画面に平安仏画の作風を頭の中ではめこむと、恍惚の世界となる。この想像の世界でのシミュレーションくらいは研究者（学芸員）の特権として、許されるべきものだろう。



国宝 十二天像のうち水天 1127年（京都国立博物館蔵）

ソウル瞥見

西垣安比古

YASUHIKO NISHIGAKI



西垣安比古(にしがき やすひこ)
一九四九年京都府生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。工学博士。京都大学大学院人間・環境学研究科助教授。建築論、建築史専攻。主な著書に『風水論集』(凱風社・共著)、『建築的場所論の研究』(中央公論美術出版・共著)、『世界美術大全集・東洋編』一〇巻、一一巻(小学館、建築の項目を担当)『朝鮮の「すまい」―その場所論的究明の試み』(中央公論美術出版)など。

十数年ぶりで京都に住まうことになった。盆地に位置づけられた京都は夏暑く冬寒い。町屋など和風の住宅では冬の寒さはひとしお身にしみる。一般的に言って京都は生活に快適な気候的条件に恵まれているとは言いがたい。しかし、古来都市は盆地に発達することが多い。北から南まで日本全国に小京都と呼ばれる都市があり、そのほとんどが盆地に立地している。気候的条件に恵まれない盆地が人間の集住地として選択される理由はどこにあるのであろうか。理由は単純ではないだろう。複合的な原因が絡み合っている結果であることは想像にかたくない。そのような因果の網の目を分析的に解きほぐすという方向ではないが、盆地に立地する都市がどのように体験されるか、その基本的次元を示してくれる記述が日野啓三により遺されている。

さんで、市の北側にはこの小山の質量の何百倍もある山嶺が厳然と宙天に聳え立っているのだ。(中略)北の空を限るその最も高い岩山から、左右につまり東西両方向に、低い岩山が連なっている。そして、「私が立っている南側の小山」よりさらに南方には「先ほど鉄橋を渡ってきた漢江の広い流れがある」。

「その日は曇っていた。霧は急速に薄れ始めていたが、日ざしはどこからも射していない。にもかかわらず、眺望は明確で鮮烈だ。まるで太陽とは別の光に照らし出されたように」と、何か日常の時間からは離れた永遠性を帯びた雰囲気の中で、次のように都市風景が描き出されている。「いま立っている石段は、市の南側の小山の中腹にある。その小山と向き合い市街を中には

少年時代を朝鮮で過ごした日野啓三が修学旅行で京城(現ソウル)を訪れた時、鮮烈に心の底に焼き付いたイメージをこのように書き留めており、人が都市と出会う決定的な場面がまことに印象的に描写されている。この時の京城との出会いについて、日野自身の語るところによれば「私というものがすでにあって、そこに多少特異な経験がつけ加わった、というようなことではない」と言う。つまり、それは日常的にいう経験ではなく、「私というもの」の根底にかかわる根本経験であった。「いまこの眺めは単にひとつの都市の全景といったものではなく、世界のかたちそのもの、自分自身の意識のかたち自体に不意に出会った、という震えるような興奮を感じさせた」と言わねばならない、そういう経験であった。小学生の日野が目当たりにした京城は北に北岳山、東西には仁王山、駱駝山が聳

え立ち、それを南の南山の中腹に立って眺めていたことになる。南山の南は漢江に開かれていた。それは「風水説」に従って選び取られたもので、単なる地形上の偶然でないことを彼自身後に知るようになるが、この京城の「かたち」を、日野は「閉じて開かれた小宇宙」と捉えている。そして、「閉じて開いている」というかたちが、私の気持ちを深く安心させると同時に、前向きに開かれてゆく力を与えられるように思えた」と言う。

一九九四年、京都が建都一二〇〇年を迎えたちょうどその年、奇しくもソウルは遷都六〇〇年の行事にわき返っていた。両都市はともに南に開いた盆地にあり、南に川が流れている。近年、京都についても風水の影響が云々されるが、ここでは風水論議を展開しようとしているのではない。京都とソウルがともに盆地に立地していることに着目しておくだけでよい。盆地は日野によって見事に書き留められたように強いイメージ喚起力があり、それは自己意識の根底にまで届く深さを秘めていた。都市のイメージ喚起力と言え、もう四〇年ほど経ってしまったがケヴィン・リンチの『都市のイメージ』においてイメージジャビリティという術語が提出された。パス、デイス

首善全図



首善全図

19世紀中頃の漢城(現ソウル)の古地図

トリクト、エッジ、ノード、ランドマークという要素の組み合わせによって構成されるイメージの強度によって都市を評価しうるとするリンチの考え方は従来の都市の形態美のみに着目したり、機能性のみを問題にする計画論的アプローチにはない魅力がたたえている。そしてエッジという要素が取り上げられていることから解るように、都市を囲うことがイメージャビリティを高めるうえで重視されている。リンチの都市論を引き継いでノルベルグ・シュルツがゲニウス・ロキ（土地霊）という古代以来の語に再び照明をあてることで新しい理論を展開したが、ここではさらに都市の境界に重要な意味が与えられ、囲うということが根本的な鍵語になっている。あるいは、ジョーゼフ・リクワートの『ベまち』の『アイデア』に取り上げられるローマの都市創建をめぐる議論を想起しておいてもよい。ここでも都市の境界を儀礼的に犂で掘り起こすことが都市創建に際して都市を都市たらしめるうえで最初になすべき不可欠の行為であった。このように近年の都市論においては都市の境界を明確化し、そのことによつて都市のイメージが描かれることの意味が注目を集めている。都市創建の当初から自覚的であったかどうかはともかくとして、京都やソウルのような盆地に立地する都市はきわめてイメージャビリティの高い都市であったと言えるだろう。

一九二九年生まれの日野が少年時代に京城を見る足場となった「いま立っている石段」は、朝鮮神宮へと至る大階段であった。足下には今しがた到着した京城駅が見え、

市街の中にはさんで遙か北の山嶺の下には景福宮の姿を阻んでデ・ラランデの設計になる総督府庁舎も望めたであろう。そして当時の京城にはもはや都市城壁はほとんど残っていないはずである。近代化の号令のもとに押し進められた日本による植民地化政策によって京城は大きく姿を変えられていた。李朝時代にはおそらく風水思想に従ったことと思われるが、漢城内には直線的な街路が通されることはなく、住居は網の目状に発達したコルモツキル（小路）に位置づけられていた。しかし、植民地化にともなつて直線的な大路が何本も通されることとなった。風水思想では地脈（龍脈）を流れる気が重視されたが、これらの大路はそのような地脈を断絶してまっすぐに拓かれた。

この時代に起こった都市空間の変化を一口で言い切ってしまうとすれば、境界の重層的な意味の深みが平板化したことではないだろうか。都市境界として意味づけられた漢城四周の山々は風水思想にもとづいてこの都市に住まう人々を守護する護龍とされており、都市城壁はその意味をさらに顕在化させていた。城壁には八卦に従つて八方に門が開かれ、護龍の山々とともに当時の世界観を表現するものであった。しかし、近代化の動きのなかで城壁は取り払われ、コルモツキルの奥まった所にあった住まいの傍には直線的な大通りが迫ってきた。また、景福宮の前を塞いで総督府庁舎も建てられた。この庁舎は禁川の流れていた場所を占めており、宮闕内のある種神聖とも言える場所と日常的な市街との境界が消され

てしまった。ここでも都市境界はニュートラル化され、植民都市としての結構を持たせるべく空間の意味にひずみが加えられた。

一九四五年の解放後、もちろん植民都市化を目指すすゝみは取り払われていったが、ニュートラル化は経済的發展につれてさらに勢いを増したのではなからうか。ソウルは漢江の南にまでスプロールし市内を流れる川はふさがれてその上に商店街が造られた。そして、コルモツキルも大規模開発されて姿を消しつつある。しかし、ここにきて若干新しい動きが見えだしている。その一つは大学路（テハンノ）周辺が若者文化の情報発信地として発展しつつあることである。大学路は旧市街東北の境界地域にあり、京城大学跡地周辺にあたる。都市の中心が漢江の南に急速に移行するなかで、その場所の歴史的文脈をいかしつつ展開しているこの地域の発展は注目に値する。しかも、ここではコルモツキルを散策する楽しみを味わうことができる仕掛けが豊富に用意されており、新しい都市空間形成への息吹を感じさせてくれる。新しい動向の一つの例は旧市街北の境界地域にあたる王宮の復原計画である。景福宮ではすでに旧総督府庁舎が取り壊され、弘礼門が復原されており、今後順次、すべての殿閣を復旧する計画という。この計画で旧市街北部の意味づけが変わることは明らかであるが、それがいまさら景福宮の北に位置づけられた青瓦台を神聖化する方向に向かうことはないだろう。これらの動きがソウルのイメージをどのように形成することになるのか、その行方を見守りたい。



取り壊された
旧総督府庁舎（左図）



再建される
景福宮弘礼門（右図）

磯江景孜Ⅱ著

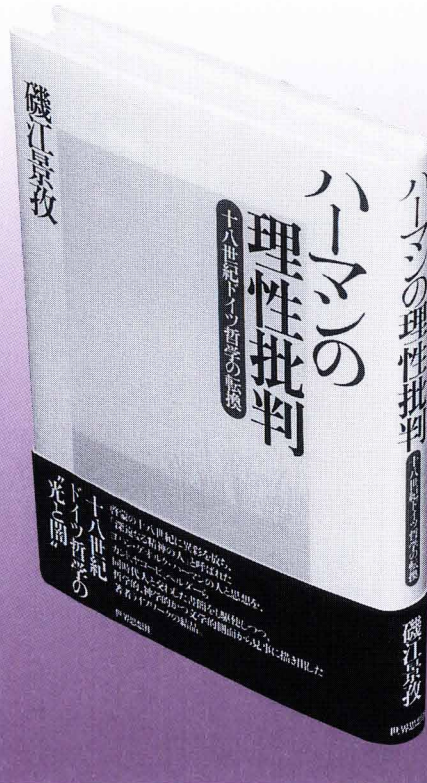
評者・川中子義勝（東京大学総合文化研究科教授）

「ハーマンの理性批判——一八世紀ドイツ哲学の転換」

世界思想社

一九九九年二月 二九六頁

定価五、二三八円



と思想」をキリスト教思想史の内に位置づけ、その思想と密接に結んだ文体と表現の問題を文学の視点から明らかにした。しかし、哲学、ことにカント哲学との関わりについてはまだ十全には語り得なかつたという恨みを残していた。磯江氏の著作は、この点をまさに正面から扱っており、筆者の期待をも満たして余りある、まさに待望の書となった。

今日のハーマン研究は、大きく分けて文学、哲学、神学と三つの領域に分かれるが、それはハーマンの思想圏の大きさそのものを表すとともに、そのため今日のハーマンへのアプローチが多様であり得ることを示している。ここではもっぱら哲学的接近が問題となる。

近年、刊行されたI・バーリンのハーマン論（日本でも翻訳刊行）は、哲学・思想史の立場から啓蒙的な問題を提供していたが、最近のハーマン研究の進展とはほとんど無縁の観点から記されたために、「キリスト教信仰の立場から啓蒙主義に対して非合理主義を対置した」という、すでに乗り越えられたハーマン像を繰り返すに止まった。それに対して、磯江氏の著書は、ハーマンへの最近の哲学的アプローチを正しく紹介しつつ、自らもその立場に立つて叙述を進めようと努めている。磯江氏はまずその書の冒頭で、ヘーゲルが「ロート版ハーマン著作集」への浩瀚な書評を記して以降の哲学的ハーマン評価の変遷をたどる。ハイデガーの思想圏のもと、E・メツツケはハーマンの思想全体を実存論の観点から叙述したが、これは非合理主義という古いハーマン像を覆し、研究の転換点となった。さらに今世紀に入って、哲学の言語論的転換が明らかになって以降、ハーマンの思想は俄然脚光を浴びるようになる。

経験から（つきつめれば、さらに言語から）の理性の純化を唱えるカントの立場に対して、理性の言語依存的特性に固執したハーマンの思想（「理性とは言葉だ」）は、初めて真の理解を獲得し、その先駆性が明らかとなった。磯江氏は、自らもこの観点に立ち、もっぱらカントとの関係においてハーマンの思想を跡づけていく。前半ではいくらか評伝的な叙述も見られるが、後半はハーマンの晩年の主著『理性の純粹主義の再批判』（生前未刊）を章立てを越えて繰り返し論じていく。この書に注目しつつも、その難解な著述に悩まされた人にとっては格好の入門書・参考書といえよう。

磯江氏の関心は、カント「と」ハーマンの理性批判である。理性批判はカントだけの専売特許ではない。カントの理性もまた、批判の一線をこえて不遜になる。この点を指摘するときハーマンは啓蒙の敵対者ではなく、啓蒙のラディカルな啓蒙者の立場に立つ。そのような今日のハーマン理解の水準から、ハーマンとカントの交渉史を丹念に提示していること。カントの思想形成にハーマンの持っていた意味を引き出そうとしていること。それを示すだけでもこの書は十分に価値がある。さらに哲学的関心にとって、①そのようなハーマンの立場が解釈学と密接に結ぶこと、②ハーマンの理性批判はフリードリヒ体制への政治批判を含むこと、③デカルト以来の数学主義の受容をカントの言語観の問題として示しつつ、近代全般におよぶハーマンの批判の射程の大きさを示そうとしていること、以上もまた本書の重要な視点であろう。惜しむらくは、著者のご逝去によって、ねぎらいの言葉をもはや語り得ないことである。刊行に尽くされた方々の労に感謝する。

ハーマンの著作は、その代表作「堅果の美学」がいみじくも言い表しているように、その滋味豊かな内実にもかかわらず、言葉の極端な凝集と文体の緊張とのゆえに、その堅い殻を割って味わうことはなかなか容易ではない。それゆえに、ドイツにおいても彼の読者は決して多いとは言えない。しかし昔から、ゲーテやヘーゲル、キルケゴールなど、慧眼の詩人・思想家のみが、彼を理解しようとの熱意に燃え、本当に腰を据えて正面から向きあってきた。ハーマンほどに読者を選ばず作家はあまりいない。

今日でも事情はあまり変わらない。その思想の射程の大きさが明らかになるにつれて、ハーマンの重要性はつとに指摘され、その思想は注目を浴びつつあるが、これに自ら取り組もうとすることは勇気を要するらしい。日本においても、桑本厳翼氏などによってかなり早くから注目されていたが、本格的な紹介は遅れた。その遅れはようやく取り戻されつつある。一九九六年以降たつづけに著されているハーマン研究書の第四番目として、磯江氏の著書は上梓された。先だって本稿筆者は、皮切りとして「ハーマンの生涯

田邊敏明 著

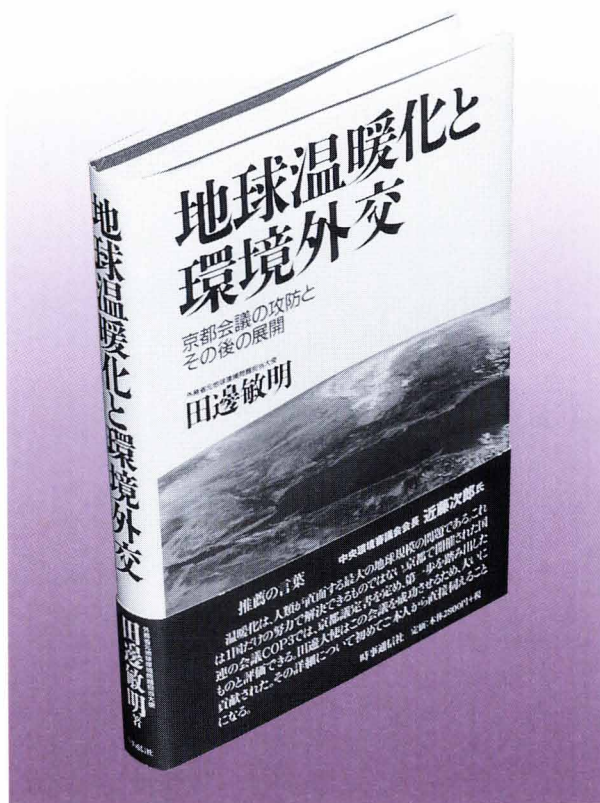
評者・西井正弘（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

「地球温暖化と環境外交」——京都会議の攻防とその後の展開

時事通信社

一九九九年五月 三四二頁

定価二、八〇〇円



一九九七年十二月、京都国際会議場で開催された「気候変動枠組条約第三回締約国会議」（通称COP3）において、「京都議定書」が採択された。先進国は、二〇〇八年から一二年の間に、温室効果ガス（GHG）を、九〇年（一部のガスは九五年）比で、平均五％削減が義務づけられた。

本書は、この会議の日本政府代表として、会議の準備段階から深く関わってきた外務省の地球環境問題担当大使（当時）田邊敏明氏が、同省の事務官の協力の下に書き下ろされたもので、外交交渉の実態について貴重な事実を明らかにしてい

る。従来、このような外交交渉の実態については、交渉当事者以外には伝えられないことが多かった。その意味で、本書は、今後の環境問題の研究者にとつて、必読の文献となろう。

地球環境問題は、一九七〇年代から国際社会の関心事項となった。そのきっかけが、七二年のストックホルム国連人間環境会議であることは、定説となっている。七〇年代には、湿地保護に関するラムサール条約、世界遺産条約、絶滅のおそれのある動植物の国際取引を規制するワシントン条約が採択され、発効した。

八〇年代に入ると、オゾン層保護に関

するウィーン条約・モントリオール議定書や、有害廃棄物の越境移動の規制のためのバーゼル条約が採択された。オゾン層の保護については、条約・議定書の発効後定期的に開催される締約国会議（COP）・締約国会合（MOP）において規制が強化されており、地球環境条約の成功例と言われる。この条約交渉については、アメリカの代表であったR・E・ベネディクトが、各国の思惑・利害対立のなかから、モントリオール議定書の署名に至る経緯を、きわめてリアルに描いている（小田切力訳『環境外交の攻防——オゾン層保護条約の誕生と展開』工業調査会・一九九九年）。

地球温暖化問題も、八〇年代後半には世界的な関心を呼ぶようになった。しかし、七〇年代には、地球は寒冷化するとした気象学者の書物も出版されていた。環境問題の難しさは、その科学的な不確実性にも起因している。オゾン層破壊物質とは異なり、地球温暖化の原因物質は多様であり、また人々の生活への影響がきわめて大きく、利害関係も錯綜している。これらが、温暖化防止を巡る外交交渉を複雑化させる原因となっている。

本書は、第I部 地球温暖化問題とは何か、第II部 温暖化防止京都会議を招致する、第III部 温暖化防止京都会議の準備交渉、第IV部 温暖化防止京都会議第V部 今後の課題と、条約関連の用語解説、参考文献からなる。さらに資料編として、気候変動枠組条約（一九九二年）・ベルリン・マンデート・京都議定書（一九九七年）の公定訳と仮訳が付されている。ただ、事項索引が付けられていれば、もっと本書は利用しやすいものではな

いだろうか。

九二年の気候変動枠組条約では、先進国・市場経済移行国（通称、附属書I国）は、温室効果ガスの排出抑制のための政策の採用と措置をとること、その情報をCOPに提出することが義務づけられたにすぎない。条約発効後、九五年に開かれたCOP1（ベルリン）において、「ベルリン・マンデート」が採択された。そこでは、二〇〇〇年以降の国際的取組に関する文書を、COP3で採択すること、発展途上国にはGHG削減の義務を課さないこととされた。

京都議定書の採択に至るまでに「ベルリン・マンデート・アドホック・グループ」（AGBM）が、八回開催されたが、米・日・欧や、オーストラリア、小島嶼国連合（AOSIS）、産油国、途上国（G77+中国）などの利害対立が解消に至らず、京都会議において、厳しい議論が続いたことが詳細に記されている。それが、曲がりなりにも京都議定書として採択されるに至ったのは、著者を初めとする日本政府関係者の努力やエストラーダ議長の優れた手腕などによるが、現場に立ち会っていた著者ならではの逸話がきわめて豊富かつ率直に述べられている。

本書は、地球環境問題における科学と政治、経済、安全保障及び外交交渉の関係を的確に指摘しており、その記載内容は信頼できるものである。採択された条項の解釈や背景について、今後研究者がかならず引用する文献となろう。一読を薦めたい。

地球温暖化を巡る京都会議については、ジャーナリストによる優れた著書がある（竹内敏二『地球温暖化の政治学』朝日新聞社・一九九八年）。本書と併せ読めば、外交交渉の表と裏を充分に読みとることができよう。外交は、国内政治を反映したものなのである。

篠原資明 著

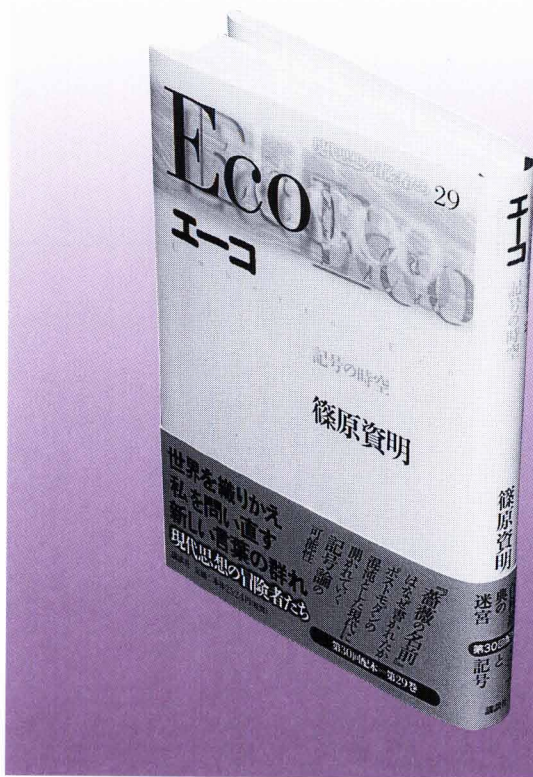
評者・北村知之（福井県立大学助教授）

「エーコ」：記号の時空

講談社

一九九九年三月 二七九頁

定価二、五三四円



思想家についても遺漏なく押さえて、読者は単にエーコ自身の思想や小説の内部にとどまらず、エーコを中心とする広大な思想圏を視野におさめることになる。

まず序章においてエーコの関心の百科事典の様相が素描される。スコラ哲学から大衆文化、アヴァンギャルド芸術、記号論にメディア論、TVからCD-ROMに至るまでの。

第一章では、美学研究者として出発したエーコの問題意識が示される。エーコは大学時代トマス・アクィナスの美学に取り組み、その成果は今ではトマス美学研究の基本文献となるほどのものであったが、篠原氏は、伝統的なトマス思想を克服清算して新地平を切り開こうとするエーコの関心に焦点を当てて、当時の思想的状況、つまりクローチエやバレイゾンという今世紀イタリアを代表する哲学者との関連も語り、戦後イタリア美学の状況もあわせて描き出している。

第二章、エーコが現代美学の創造的な思想家として登場するのは『開かれた作品』においてである。ここで読者は、現代音楽やジョイス、マクルーハンらに出会うであろう。『開かれた作品』あるいは『開かれ』というコンセプトは、本書ではたえず言及されており、エーコ思想の基幹をなすものと目されている。

第三章はエーコの記号論。先進的な美学者の域を超え、現代の代表的思想家としてのエーコを世界に認知させたのが、記号論についての彼の研究であるが、ここでは、レヴィ・ストロース、ソシュール、バースらの思想をも踏まえながら、エーコの記号論がコンパクトにまとめられている。

第四章では、初期の大衆的物語から『物語における読者』のメタ・テキスト

まで、エーコによる物語のテクニカル分析が具体例に沿って概観される。

ところで、ほとんど大衆的とも言うべき知名度をエーコが獲得したのはその小説作品によってであるが、第五章から終章までの三章は、三編の長編小説にそれぞれ当てられている。『薔薇の名前』、『フーコーの振り子』、そして昨年邦訳が出た『前日島』。本書においてとりわけ面白く読めるのは、これらエーコの小説作品をめぐる解釈論である。

『薔薇の名前』については（第五章）、その黙示録的思考を指摘して、ボルヘス、さらにポストモダンをめぐる理論やTVメディアの変質まで論じてゆく手際はじつに鮮やかで、同作品の多面性をあらためて認識させられる。また『フーコーの振り子』では（第六章）、ヘルメス主義と対比しながら解釈理論を論じているが、ここでは著者独自の的方法論である『交通論』も動員されて、議論はいつそう豊かなものとなっている。そして終章では『前日島』をめぐる、バロック期スペインの思想家グラシアンが言及され、グラシアンとエーコが二重写しに語られている（篠原氏にはグラシアンについての研究論文もある！）。

本書は、百科全書的なエーコについて、同じく百科全書的な篠原氏が、その盛りだくさんの内容を、『開かれ』という概念を中心に据えて、簡潔かつ平明に語った著作であり、単にエーコの紹介にとどまらず、現代の芸術・文化の状況について恰好の見取り図を提供するものである。巻末には主要著作の要約や読書案内などもあって、エーコの思想圏への最適の入門書となっている。エーコに関心を持つ日本の読者には今後必読の書となろう。

著者の篠原氏にとって本書は「現代思想の冒険者たち」シリーズ中の第二作となる。先に出版された『ドゥルーズ』もすでにこの書評欄で取り上げられている（第五号）。前回は今世紀後半のフランスを代表する哲学者、そして今回は現代イタリアを代表する知識人ウンベルト・エーコの総合的な紹介、まったく瞠目させられるばかりの力作である。私の記憶ではエーコに対する著者の関心は二十年以上もさかのぼり、美学会でもエーコについての研究発表をして、日本では最も早

い時期に美学者としてのエーコに注目した人であろう。

さて、エーコは周知のように、単なるアカデミックな哲学教授ではなく、世界的なベストセラー作家として名高い。若い頃はTV局に勤務して当時の前衛芸術運動にも関わり、批評家としても活躍、また近年は自ら監修した電子百科事典も出版して、まさに現代の百科全書的知識人である。この怪物的エーコに対して、篠原氏の目配りはじつに広範、エーコの著作のみならず、エーコに関わる多様な

間宮陽介 著

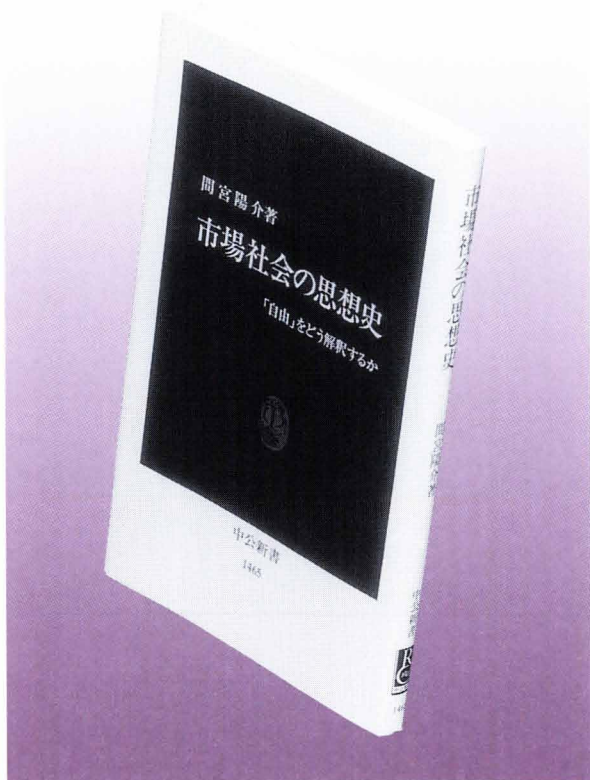
評者・大瀧雅之（東京大学社会科学研究所助教授）

『市場社会の思想史——「自由」をどう解釈するか』

中央公論新社

一九九九年三月 一八六頁

定価六六〇円



音であるだけでなく、評者の経験からしても大いに説得的である。

経済学に限らず歴史が単調に進歩するという考え方に、評者は反対である。いかなる学問においても、古典の果たす役割は重要である。古典を書いた偉大な天才の発想とその転換の妙、および途上での苦闘から、われわれは多くのことを学び、そして勇気づけられるのである。単線的な歴史観の持ち主は、多くの場合、この創作の喜び・苦闘とは無縁な百科辞典的学者なのだろう。

本書が指摘するところ、アダム・スミス以来、経済学は集権と分権の間での振れ、筆者の言葉では、「自由の循環」を繰り返してきた。しかしそれは、経済学が進歩していないことを意味するわけではない。あとがきで筆者が主張するように、「過去を認識せよ」ということは過去に帰れということではないのである。これが本書の第二の特徴である、経済学史に輝く著作とその時代背景が密接に関連して記述されている点によって、裏付けられている。

明示はされていないが、本書は、スミスに代表される古典派とその精緻化としての新古典派を紹介した前半部（第六章まで）とヴェブレン、ポランニー、バーリ・ミーンズを経てケインズに至る後半部（第一四章まで）の間に、経済（経済学）に大きな断層があることを十分に意識して構成されている。すなわち企業が、古典派・新古典派の想定する質点としての存在から、複雑な内部構造を持つ組織体へと変貌をとげ、それが経済学でも中心的課題とされるようになった。本書を大胆にまとめれば、新古典派とケインズの間に位置する、ヴェブレン、ポランニー、バーリ・ミーンズの著作では、組織

体となった企業の新たな行動様式を説明し、それを社会のなかでいかに規律づけるかが対象となった。それを受けたケインズは、期待論・貨幣論において組織体となった企業を描写した上で、現代資本主義における失業のメカニズムを集成した、と考えられる。

このような筆者の理解は、きわめて自然で説得性に富む。アインシュタインが「自分はニュートンの肩の上に乗って考えただけだ」と述べたことは有名であるが、ケインズもまた独り屹立する天才ではなく、時代のなかで生きた人だったのである。そして以上の認識はやがて、本書のコーダである第一五章とあとがき（読者はあとがきが、執筆後の雑感ではなく非常に重要な役割を担っていることに留意されたい）に集約され、「現代の人間は現代という問題状況の下で、新たな思想活動を続けていくべきなのである」という主張が導き出される。まことに堅牢かつ巧妙な構成である。

以上述べたように、本書は学説史の本としてはまことに画期的であり、限られたスペースでこれ以上を望むのは、酷というものであろう。しかし書評の信頼性を高めるため、あえて無理を云おう。一つは効用学説についてで、新古典派にいたって初めて需要という考え方が定式化され価格の決定メカニズムが明らかにされたことを、もう少し前面に押し出してもよかったと思う。これは近代経済学の教師としての感想である。

今一つは、マルクスに関する記述が第一五章で初めて出てくるが、その理解が偏りのない素晴らしいもので、古典派の結尾にぜひ一章を別立てにしてほしい、といった点である。

じつによくまとまった明快な経済学史の入門書である。新書という限りあるスペースに、これだけ充実した内容が、しかも平易で美しい文体で書かれた例は、評者の知るところ昨今きわめて稀である。経済学に熟達した教師が本書を、経済学史ではなく、経済学そのものの入門テキストとして用いれば、大いに教育効果上がるものと期待できる。本書は、「大家」が書いた軽薄な偏差値教育向けの色刷り教科書より、はるかに深く経済学の根本的な考え方を、日常の感覚に根ざしながら、われわれに語りかけてくれる。

本書の特徴は大別して二つあり、これ

らが相俟ち、読者を引きつけて離さない魅力を醸し出している。第一の特徴は、副題にあるとおり、また第一五章で著者自身も述べているように、経済学の歴史を「自由の循環の歴史」という観点から、一貫して解釈している点にある。評者のように理論経済学を専攻する者から見ると、いわゆる経済学史の教科書はベダンテイクでやたら細事をあげつらっているが、総体として何が云いたいのか、疑問が残る本が多い。その意味で、本書は評者にとって（やや大げさかもしれないが）革命的であった。すなわち、本書で提示される循環的史観は、その重要な通奏低

加藤真二著

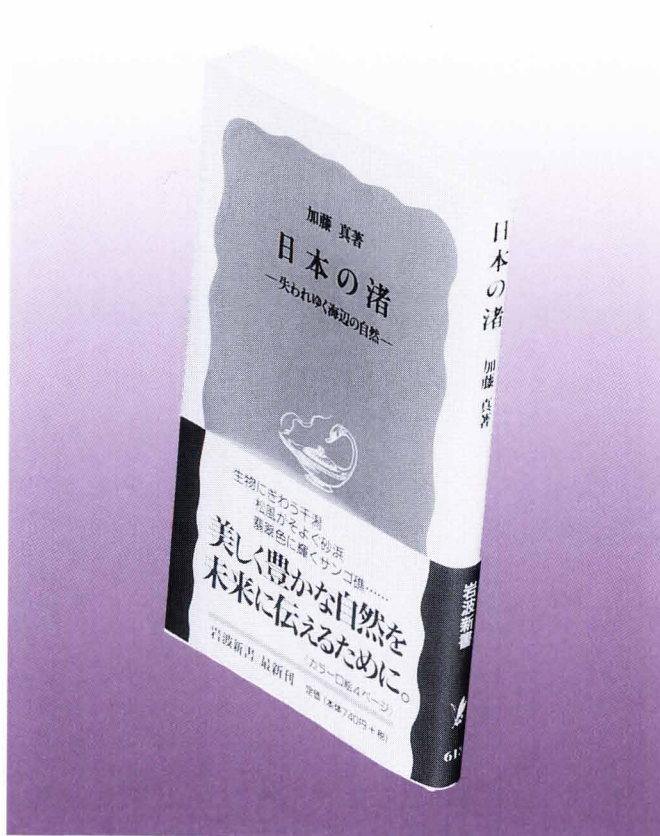
評者・西田隆義（京都大学農学研究科助手）

「日本の渚——失われゆく海辺の自然」

岩波書店

一九九九年四月 二二〇頁

定価七四〇円



うつくしい渚のまればと

この数年来、長良川、諫早湾、名古屋湾、吉野川と連日のように渚の保全をめぐる問題が報じられている。そうした報道の洪水のなかに、この小さな本がひかえめに誕生した。著者は生態学者であり、これまで潜葉虫から貝にいたるじつに幅広い生物を対象に研究を重ねてきた。興味の対象には狭い意味での自然科学には収まりきらない、仙人や漁師と豊穣な自然との関わりが常にあったようだ。およそ二〇年以上も辺境の渚を訪ね歩いた集積

が、この小さな本となつて結晶している。その結果、かつての美しい渚を描くやわらかな文体にもかかわらず、行間にはそれを破壊したものに對する激しい怒りが満ちているのを読者は感じるだろう。本の内容をまず紹介しよう。全体が七章から構成されており、一—六章はそれぞれ日本の渚を構成する代表的景観である、河口、干潟、藻場、砂浜、サンゴ礁、ヒルギ（マングローブ）林についてであり、最終章は渚の保全に充てられている。記述は自然科学と民俗誌・詩歌を自在に

往來する形でなされており、この種の本にはまれな文体の美しさが際だっている。そして、さまざまな景観を示す渚と、そこに生息する多様な生物、それを生態系を破壊しない形で利用したかつての生活、さらにそのような人と渚のかかわりを叙情にのせて歌った詩歌などが渾然一体となりやわらかに描かれている。それは、一握りの砂に含まれる微細な生物にくつきりと合わせた正確な焦点を、徐々に引いてゆき、次いで渚の砂中に潜む奇妙な生物間の相互作用に焦点をあわせ、最後に浜辺と人のかかわりを描くというように、俯瞰的な構成を示している。このような俯瞰的な構成にもかかわらず、分析する主体である著者の目は分析される客体とわがち難く融合している。けがれを知らぬ浜辺で波遊びをするフジノハナガイを見ている著者の目は、客体であるフジノハナガイとほとんど一体化している。著者は日本の片隅に奇跡のように残された美しい渚を、時間をかけて訪ね歩いてきた。その歩みは、古くは芭蕉や菅江真澄、近代にいたっては、柳田国男、折口信夫、宮本常一らが辿った足跡に似ている。あるいは意図的に選びとつた方法ないし態度かもしれない。壮大な体系的知識の構築にはじめから向かうのではなく、むしろそうした営為からはこぼれ落ちそうなささやかなくさきに目をこらすことを積み重ねながら、精神の淵に澱のように析出するものを大切にしようとする枚挙の精神がうかがわれる。

本書にはこのような稀にみるべき美質が存在する。その一方で、あるいはそのゆえに現実感が稀薄になっているところも感じられる。そもそも本書は偉大なる憤怒の書であって、問題の具体的解決を提示するものではなさそうだ。たとえば、美しい渚には伝統的な習俗とつましやかな信仰をもった清貧な民が暮らしていたが、現在、渚は無惨にも荒らされてそこには渚をビーチと呼ぶ「野蠻人」が徘徊するという本書のイメージについて考えてみよう。都会から来たと思わしきこの野蠻人ははたして近代の負の遺産だけをもたらしただけであらうか。彼らはおそらくは、つましき民の子孫であり、野蠻な自然観は生活上の利便さと因習の克服ゆえに自ら主体的に選んだものであるかもしれない。今からすでに六〇年以上も前に、日本浪漫派のある詩人は故郷の有明海で遊ぶ子どもらと広大な干潟の光景をやさしく歌いながら、同時に「……美しい故郷は、それが彼らの実に空しい宿題であることを、無数な古来の詩の讚美が証明する。かつてこの自然の中で、それと同じく美しく住民が生きたと私は信じ得ない……」と歌わざるをえなかったのである。日本浪漫派の詩人においてさえ、甘美な過去を歌うことができない過酷な生活の実態があったのだらう。そして少なくとも現在、過酷さはかなりの程度克服されている。野蠻な民を駆逐するのではなく、野蠻な民を点景として、なお美しい渚が保たれる方途を見いだす以外に美しい渚が保たれることはないであらう。

さて、本書のもっとも正しい読み方はどんなものだろうか。わたしはこの小さな本を持って、フジノハナガイが波遊びをするという清らかな渚を一つ訪ねてみたいと思った。汀線に寄せる透明な潮に足をひたして、指の間からこぼれゆく砂の感触を楽しむこと。そしてフジノハナガイの波遊びを彼らとともに楽しむこと。それがこの本の感想としてふさわしいものだと思う。

人環図書

— 本研究科教官の新著より —

新現象学運動

小川侃・梶谷真司編

世界書院

キールのヘルマン・シュミッツの創始した新現象学運動は、身体と感情／雰囲気を中心とした現象学運動で、基本的には、ゲーテ、クラークス、マッハとアヴェナリウス、ハイデッガーなどからの影響が大きい。しかし、一九六四年から一九八〇年までの一六年をかけて、シュミッツが作った『哲学体系』（五巻一〇冊）の大作が根本的な出発点になっている。この書物は、新現象学の全面的な紹介である。この書物は、シュミッツを一九九六年に学術振興会の援助で京都大学人間・環境学研究所に招待したときの講演集とシュミッツの古稀を祝しての寄稿論文とからなる。シュミッツは、京大以外に東北大、東大、九大、広島大、同志社大で講演し、好評を博した。第一部にはシュミッツの日本講演という表題のもとに、哲学の現在の課題（その一、生の経験の復権、その二、主観性）、現象学と実証主義哲学、芸術における身体と感情（「新しい現象学」の視点から見たフッサールとハイデッガーと、シュミッツ用語解説を収める。第二部には寄稿論文として「まなざし・身体・支配」（グロスハイム）、「シュミッツ現象学における主観性の問題」（梶谷真司）、「自然の現象学」（ゲルノット・ペーメ）、「物の現われと準物体」（小川侃）以外に、エルランゲン学派のヤーニツヒヤ、ノーベル賞学者のローレンツの講座継承者、ミッテルシュテットなども寄稿している。その他シュミッツは、フイヒテやヘーゲルの研究でも先駆的な著名論文を発表しており、それらを評価する日本人の論文（田端信広、林克樹）をも収めている。

定価（本体）五、〇〇〇円
（四六判四〇二頁）

Interkulturelle Philosophie und Phänomenologie in Japan, (Hg.)

T. Ogawa, M. Lazarin, G. Rappe, Iudicium, München

フンボルト財団の財政援助のもとに、東亜研究関係の書物を多く出版しているドイツの著名な Iudicium 社から出版されたこの書物は、日本を訪れて日本に接した哲学者や現象学者の論文と、日本の現象学者の論文とを編集して出版したものである。基本的には、現象学と哲学からする比較文化論もしくは間文化論の書物である。寄稿者のなかには、ハンス・レンク、デブラタ・シンハ、レストター・エンブレ、アルフォンソ・リンギス、ゲルノット・ペーメ、ジョン・セリス、アンソニー・シュタインボック、グレゴール・パウエルなどという国際的に著名な哲学者、現象学者、日本思想研究者が見い出される。この書物で、編者たちが主張したかったのは、地球が狭くなり、哲学の議論、現象学の緻密な議論がいまや国際的なレベルで進行しており、京都がその一つの中心になっているということであった。そして哲学という精神運動は、つねに異なった文化の接触のなかから新しい物の見方を生育させてきたのだという当り前なことのいわば再発見が本書を共通するテーマになっている。

定価（本体）DM 78,- Stf. 71,- OS569-
（四六判四二二頁）

『アダム・スミスの誤算…幻想のグローバル資本主義(上)』『ケインズの予言…幻想のグローバル資本主義(下)』

佐伯啓思著 P H P 新書

本書の意図は、近年の経済的グローバルイズムの思潮に対して異を唱える点にある。ここで著者は、スミスとケインズという二大経済学者をとりあげ、その新たな読解を通じて、現代のグローバルバリズムを批判的に理解するという方法をとっている。かくて、一般にはグローバル市場経済の生みの親だとされるスミスの全く別の側面、むしろ重商主義のグローバル戦略に対抗した、いわば反グローバル主義者ともいふべきスミス像が浮かび上がり、また、今日では時代遅れとも見なされているケインズ理論の意味を、従来ほとんど無視されてきた、一九二〇年代の反グローバル主義者という観点から読み直すことになる。今日のグローバルな市場の世界的展開において問題の焦点となるのは、依然として経済の基本単位である国家の役割をどう理解するか、そして、市場の背景にある社会の倫理や文化をどう保持するかにあるだろう。近年の経済改革論の中で唱えられてきた市場万能主義が、思想としても確かな根拠をもたないことを、本書は二大経済学者の著書を通して示している。

（上）〔新書判二二七頁〕
定価（本体）六五七円
（下）〔新書判二二六頁〕
定価（本体）六五七円

人は必ず太る しかし必ずやせられる

森谷敏夫著 講談社

書店に並んでいるダイエット本の多くは、科学的根拠や裏付けのまったくないものが多く、ロングセラーや古典的な名著が、ことダイエットに関してはほとんど見当たらないのが現状である。本書は、最新の肥満研究成果や、実験結果をわかりやすく解説して、「肥満」というこの複雑な問題に科学的なメスを入れたものである。とくに、健康的にやせるといふことが、重要なポイントになっている。また、肥満は美容上の問題であるだけでなく、「肥満症、糖尿病、高血圧症、高脂血症」の死の四重奏がメロディーを奏で、生活習慣病（ガン、心臓病、脳卒中など）の温床となることもある。自分が肥満しているかもしれないと気にしてはいても、何も手を打っていないかた々々は、この本で肥満のデメリットを再認識するであろう。この本は、読者が肥満のメカニズムを正しく理解して、食事のとり方、運動のしかたを学び、実践すれば、かならず肥満を解消することができるように配慮されている。

〔四六判二五四頁〕
定価（本体）一、四〇〇円

瓦版

◆”人環”とは？

本雑誌の表題「人環フォーラム」の「人環」は、平成三年四月に新たに開設された「京都大学大学院人間・環境学研究所」の略称です。「人環」は学部を併設していない独立大学院です。

◆催し物のご案内

◆第三回人間・環境学フォーラム

- 日時 平成二年四月一二日（水）午後三時から五時三〇分
 - 会場 京都大学大学院人間・環境学研究所 地下大講義室
 - 講演者 カール・ベッカー（京都大学総合人間学部）「東西の死生観を探って——日本的医療の中の死」
 - 佐野 浩（奈良先端科学技術大学院大学）「遺伝子組換え植物・実情と可能性」
 - 懇親会 同日午後六時から八時。生協吉田食堂一階（立食形式）
 - 連絡先 同大学院専攻事務室（TEL 〇七五—七五三—二九九一）
- 詳細は、本研究所ホームページ（<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/jinkan/koukai.html>）および学内掲示のポスターをご覧ください。

◆形の文化会・シンポジウム

- 日時 平成二年四月二二日（土）午前一〇時から午後五時
- 場所 京都大学大学院人間・環境学研究所 地下大講義室
- 協賛 「仏像の形と心」東京芸術大学名誉教授 西村公朝氏ほか研究発表多数
- 連絡先 宮崎興二（TEL 〇七五—七五三—六八一三 FAX 〇七五—七五三—六八一四）

◆民族自然誌研究会第十九回研究会 テーマ コムギの伝統的利用と伝播（仮題）

- 日時 平成二年四月二二日（土）午後一時から五時
- 場所 京大会館。この研究会は参加費五百円で誰でも参加できます
- 講演者 大田正次（福井県立大学生物資源学部）「地中海地域におけるコムギの伝統的利用」
- 加藤鎌司（岡山大学農学部）「コムギの日本への伝播（遺伝学的研究から）」
- 長野宏子（岐阜大学教育学部）「小麦粉伝統発酵食品中の微生物」
- 連絡先 福井勝義（TEL 〇七五—七五三—六六一四）

◆民族自然誌研究会第二〇回研究会 テーマ 「すいば」論——子供のエスノグラフィーからの発想——

- 日時 平成二年七月一日（土）午後一時から五時
- 場所 京大会館。この研究会は参加費五百円で誰でも参加できます
- 講演者 阪本寧男（龍谷大学国際文化学部）「私の『すいば』」
- 山田 勇（京都大学東南アジア研究センター）「『すいば』と生態資源保全」
- 福井勝義（TEL 〇七五—七五三—六六一四）

人環フォーラム

第9号予告 HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM NO.9

対談 東アジアの過去、現在そして未来 ——20世紀から21世紀へ——

上田正昭・金 東勲 司会・山田 誠

特集 ミクロの世界を探る

豊島喜則・池永満生・田村 類・前川 覚

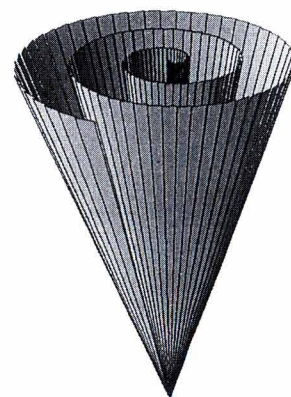
表紙(1)写真 金沢城石川門の石垣。金沢城の搦手にあたる石川門は、城内で唯一櫓が残っている城門であり、同じく前田家江戸屋敷の門「赤門」に対して「白門」と呼ばれる。本丸・二の丸御殿等が焼失した現在では、加賀前田家百万石の偉容を今に伝える数少ない建築物の一つである。門内は石垣で区切られた枡形で、秋雨にぬれた石が新鮮な輝きをみせている(撮影 天野太郎)

表紙(2)カット 中国・漢時代の石刻画。「陝西漢畫」より

表紙(3)カット らせん雉 コンピュータグラフィクス(松田島子)

表紙(4)写真 六世紀に造られたコンスタンティノブル(イスタンブール)最大の地下貯水池(地下宮殿)の円柱を支える逆さメドウサの首。大理石製。安定した給水は古くからの重要問題だった(撮影 金坂清則)

表紙(4)背景図 コンピュータ・アート(作成 佐藤恵子)



編集委員会

委員長
副委員長

高橋 誠人
加山 義人
杉田 幹人
藤山 雅人
前田 陽子
宮崎 二介
問 興

人環フォーラム 第8号

平成二二年三月二七日 発行

編集 「人環フォーラム」編集委員会

発行 京都大学大学院人間・環境学研究科

〒606-8501 京都市左京区吉田一本松町
電話 〇七五―七五三―二九九三

印刷製本 昭和堂印刷所

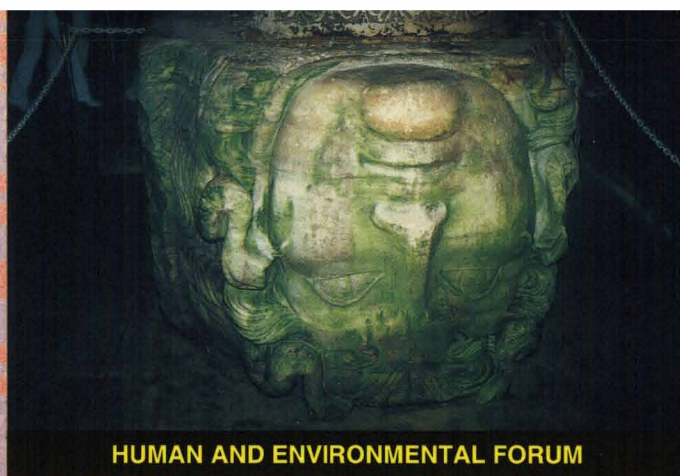
編集後記

アルバート・モルツという名の映画人を御存知だろうか。もしこの脚本家が「赤狩り」に巻き込まれていなかったら、ハリウッド映画史はより豊かなものになっていたはずである。モルツは一九五〇年に「ハリウッド・テン」のひとりとして投獄される直前に、「幽閉前後」という政治パンフレットを自費出版し、次のように述べている。

私はことによったら急進的と思われかねないことを口にしていくかもしれない。……しかし法廷の正義を求め……なら怯えることも憚ることもなしに……すべての男女が、本当にすべての人間が自由に自分の考えを口に出すことができる国を求めることにおいて、私はつまるところここを保守的であろう。

「赤狩り」とは議会が個人の尊厳と自由を蹂躪する付和雷同のパフォーマンスであった。「人環フォーラム」を個人の尊厳と自由を守る発表の場にしてゆきたい。

(M・K)



HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM